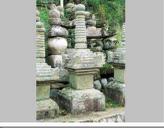
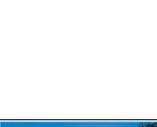


国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(建造物)	結界石	けっかいせき	3基	世羅郡世羅町甲山	昭28.6.23	石造、一基は折損している。花崗岩製。	高さ88.5m・幅27.6cm.	今高野山の結界石で、もとは四至(し)に立てられていたものの一部である。現在は境内の1ヵ所にまとめて保存されている。 その中の1基には「大界外相北方」、他の1基には「大界外相西方建武五年戊寅九月八日」の刻銘がある。「建武五年(南朝年号、1338)」は8月28日に改元され「暦応元年」になっていたが、結界石建立時にその情報が伝わってなかったことが分かる。 結界石とは、仏道修業等の障害になるものが入ることを許さないため、寺域を標榜した石柱である。		
県	重要文化財(建造物)	熊野神社宝蔵	くまのじんじやほうぞう	1棟	三次市島敷町	昭28.10.20	校倉、入母屋造、棧瓦葺		校子(あぜこ)の断面形状や材料の古さ、風蝕のくあい、それに校子上の斗組(ますくみ)の風格等から考えて、室町時代末期(16世紀)に三吉氏によって寄進建築されたものと思われる。床下及び軒以上の屋根は後世の改修である。 栂栴板(びわいた)に胡粉(ごふん)下地の土上に墨で絵が描かれ、入母造(いりもやつり)に向拝付(こは)は、いっせつという屋根の形態とともに、校倉建築では珍しい例となっている。 熊野神社は旧名若一皇子(わかいちおうじ)神社と言い、中世にはこの地方の領主であった三吉氏の尊業をうけていた。		
県	重要文化財(建造物)	多家神社の宝蔵 附 神輿 1	たけじんじやのほうぞう	1棟	安芸郡府中町上宮の町三丁目	昭29.4.23	校倉、入母屋造、檜皮葺		もと広島城三の丸(現在の広島市中区)の稲荷社にあったもので、江戸時代初期の元和年間(1615～1623)、浅野氏が広島に入封した時に建立されたと言われる。明治初年藩主浅野氏から寄進され、現存唯一の広島城関係の建物となっている。向拝(こは)は、いっせつの中に大きな神輿(みこし)が納められている。 校子(あぜこ)組手の外の部分が方形であることは、極めて異例である。日本に残存する30棟程度の校倉は、いずれも校子が三角(表裏中央に縦線があるが裏は平である)に附られたものであるが、この多家神社校倉は、校子組手の部分が四角(表裏に縦線がある)である。		
県	重要文化財(建造物)	弁天島塔婆(九層石塔婆)	べんてんじまとうば(きゅうそうじいとうば)	1基	福山市鞆町弁天島	昭29.9.29	石造九重塔、花崗岩製	高さ3.71m	鞆の対岸、弁天島に建つ九層石塔で、鎌倉時代(1192～1332年)の文永8年(1271)銘がある。 もと十一層で、第五層と第六層が欠失したと思われ、第四層の上部が不自然になっている。各層ごとに低い輪部を作り出してあり、軒は厚く、力強い反りは両端で適当に反転している。初重輪部に篆研形で彫られた金剛界四仏の種子と記年銘がある。鎌倉時代の手法を十分発揮したすぐれた作品で、県内最古の石塔婆でもある。相輪は借しくも上半分を欠失している。		
県	重要文化財(建造物)	康万福寺塔婆(七層石塔婆)	はいまんぶくじとうば(ななそうじいとうば)	1基	世羅郡世羅町堀越	昭29.9.29	花崗岩製 七層	高さ4.19m	この層塔は、康寺跡の西の屋根線上にあり、南北朝時代の応安3年(南朝年号、1370)藤原行光を大工として建立されたものである。基礎に刻銘をもち、基礎の地下に一宇一石の経を納めている。 万福寺跡は三方を小丘に囲まれた小さな谷間にある。中世には来た寺院であったと思われるが、現在は一部の礎石や石塔類をわずかに残すのみである。		
県	重要文化財(建造物)	安楽院本堂 附 三門 1棟	あんらくいんほんどう	1棟	世羅郡世羅町甲山	昭30.1.31	寄棟造、書院造	桁行12.3m、梁間11.0m	この建物は、もと地元有力者の住宅として建造されたものを寄進し寺院としたものと思われる。室町時代後期(15世紀後半～16世紀)の住宅建築を知る上で貴重な遺構である。また、当初の位置に立つこの山門1棟は、四脚門で安土桃山時代(1573～1602年)の建造。冠木(かぶき)上の墓段(かえるまた)は時代色をよく表している。 安楽院は今高野山の子院で、もとは今高野山院門から龍華寺へ至る坂の左手にあった。昭和29年(1954)、近所からの出火により一部焼損したため、昭和40年(1965)に現在地の大師堂隣へ移築された。		
県	重要文化財(建造物)	明王院三門	みょうおういんさんもん	1棟	福山市草戸町	昭30.3.30	桁行4.58m、梁間3.71m、四脚門、切妻造、本瓦葺		石段上に建つ四脚門である。慶長19年(1614)再建だが、現在の山門の建築材は新旧二棟に分かれ、再建以前の門の部材が使われている。慶長19年のものと思われるのは建物の上半部である斗[84a]と(と)きょう、軒、屋根などであり、輪部材である腹長押(はらなげし)、台輪、方立(ほうたて)などは、材質や技法などから室町時代(1333～1572年)のものと思われる。		
県	重要文化財(建造物)	青目寺塔婆(五層石塔婆)	しょうもくじとうば(ごそうじいとうば)	1基	府中市本山町	昭30.3.30	石造五層塔、花崗岩製	高さ2.09m	鎌倉時代の正成5年(1292)源業を願主に建立された5層の石塔である。基礎に年号の刻銘がある。形の整った美しい石塔である。 青目寺は寛保5年(1743)に現在地に移ったと言われるが、この塔もその折に移されたと思われる。 青目寺は府中平野の北側にある山腹にあり、弘仁4年(813)四国屋島寺の青目上人が開祖したと伝えられる天台宗の寺院である。はじめは背後の龜ヶ岳の山頂にあたり、南北朝の争乱後衰微し、寛保3年(1743)には山上の諸坊の仏像などを現在地に移したと言う。		関連施設: 青目寺収蔵庫(0847-45-4459)
県	重要文化財(建造物)	宝蔵寺宝篋印塔	ほうぞうじほうきょういんとう	1基	庄原市本町	昭30.9.28	花崗岩製	高さ1.8m	この塔は、地隠庄(じびのしょう)の地頭山内氏の祈禱所であった宝蔵寺にある。基礎に延文4年南呂(1359・8月)という北朝年号をもっているが、上下町安福寺の南朝年号の宝篋印塔と共に、当時のこの地域の情勢を知る資料となる。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(建造物)	日吉神社宝塔 正和四年五月八日の刻名がある	ひよしじんじやほうとう	1基	府中市本山町	昭32.2.5	石造、花崗岩製	高さ1.5m	塔の源流は仏舍利を納めたインドのストゥーパ(塔塚)に始まると言われ、大乘仏教の伝来地においてはその仏舍利を納めた塔を高くすることにより、釈迦への崇敬の念を示したと言われるが、宝塔は原初の形をよく止めた形状をしている。 日吉神社は青目寺(しょうもくじ)の守護神として近江から勧請されたもので、その神社の背後に宝塔がある。南北朝時代の正和4年(1315)の刻銘をもち、基礎の下には備前焼のかめが埋められていた。		
県	重要文化財(建造物)	沼名前神社鳥居 寛永二年黄梅吉良日の刻銘がある	ぬなくまじんじやとい	1基	福山市朝町後地	昭32.2.5	石造	高さ5.47m	沼名前神社は額紙園社とも言い、式内社である。備後風土記には疾隅(えのくま)の国の社と記されている。 この鳥居は寛永2年(1625)福山藩主・水野勝重が長子勝貞の誕生により、その息災延命のため寄進したものである。笠木の上に鳥ぶすま形がのせられている点が特異な形式である。		
県	重要文化財(建造物)	粟島神社鳥居	あわしまじんじやとい	1基	世羅郡世羅町甲山	昭32.2.5	石造	高さ2.18m、笠の長さ2.20m	粟島神社は安楽院の鎮守で、その境内地に祀られている。柱に「ころび(柱上部が内側に傾くこと)がなく直立している古式のものである。右柱裏面に「康暦二年二月十三日」の銘がすかに読みとることができるが、風化して不明なのは惜しまれる。小さいが古拙な感じのする鳥居である。 ※康暦2年=1380年		
県	重要文化財(建造物)	宝篋印塔	ほうきょういんとう	1基	福山市新市町厚山	昭33.1.18	石造、花崗岩製	高さ1.3m	宝篋印塔の名称は、古く宝篋印陀羅尼經を納めたことによるが、その後供養のためや墓石として用いられるようになった。 この石塔の基礎には刻銘があり、南北朝時代の康暦2年(1380)に宗禅という僧侶の供養のため建てられたのが分かる。		
県	重要文化財(建造物)	今高野山総門	いまこうやさんそうもん	1棟	世羅郡世羅町甲山	昭34.10.30	四足門、切妻造、椽瓦葺		幕殿(かえるまた)、頭貫(かしらぬき)上の絵様科木(えようひじき)、懸魚(けぎょ)等から判断して、室町時代末期(16世紀後半)の建立と考えられる四脚門であり、北面して参道入口に建っている。今高野山一山の総出入門であったといわれ、門から龍華寺にいたる道の両側にはかつての塔頭の跡が並んでいる。 今高野山は、大田庄が肥州高野山の荘園となった文治2年(1186)以降に創建されたと考えられている。大田庄は高野山の大きな財源であったため、その勢力の拡充を目指し、大伽藍を建て、高野山の守護神である丹生、高野両明神をも勧請して新しい高野山という意味で今高野山と命名したという。		
県	重要文化財(建造物)	万年寺僧侶墓碑 無縫塔(銘扶岩) 同(銘長安) 同(無銘) 墓碑(銘永禄四年風庵禪師) 同(銘平翁均禪師) 宝篋印塔(銘天文十六寿岳楽栄) 五輪塔(無銘)	まんねんじそうりよぼひ	7基	世羅郡世羅町川尻	昭34.10.30		無縫塔(扶岩)高さ1.03m。 無縫塔(長安)高さ0.7m。 無縫塔(無銘)高さ1.39m。 墓碑(永禄四年)高さ1.06m。 墓碑(平翁均禪師)高さ1.0m。 宝篋印塔 高さ1.18m。 五輪塔 高さ0.94m。	万年寺は鎌倉から室町時代(12～16世紀)にかけて栄えた臨済宗仏通寺の寺院で、廃寺となっていたが、三川ガムの建設と共に水没し、残存する石塔群はガムの中にある小島に移され保存されている。移転した石塔類は多いが、その中の七基は中世禅宗墓制を研究する上で貴重な資料である。		
県	重要文化財(建造物)	石造五輪塔	せきぞうごりんとう	1基	三次市布野町上布野	昭36.4.18	花崗岩製	高さ2.3m	五輪塔は地・水・火・風・空の五大、つまり仏教概念の一切の物質を構成している要素を示したものである。 この松雲寺の五輪塔は、布野村内にあった果平城の城主が出家し宗円と号したが、その勧進によって建立されたものといわれ、同寺では開山の墳墓として今日まで伝えてきたという。塔の基礎(地輪部)に鎌倉時代の元亨2年(1322)の刻銘があり、広島県における最古の五輪塔で、作すくれている。		
県	重要文化財(建造物)	明王院書院	みょうおういんしえん	1棟	福山市草戸町	昭37.3.29	桁行八間、梁間六間半、入母屋造、本瓦葺		庫裏(くり、県重要文化財)とともに元和7年(1621)の建築と伝えられる。小屋組は古式の手法で仏壇の間、西の間、二階下の間からなり、一間ごとに柱を建てた書院形式初期の技法を伝える建物である。棟(ふすま)、杉戸に描かれた花鳥の絵は狩野派のすぐれたものである。向唐破風(むかいからはふう)屋根の玄関が附属する。		
県	重要文化財(建造物)	明王院庫裏	みょうおういんくり	1棟	福山市草戸町	昭37.3.29	桁行十二間、梁間十二・二間、入母屋造、本瓦葺		江戸時代の元和7年(1621)に建立された。書院と同年代の同じ初期書院形式を踏襲した建物で、小屋組は古式で規模は雄大である。数次の修理にもかかわらず、江戸初期の遺風をよく伝えている。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(建造物)	誓台寺客殿	ばんだいきやくでん	1棟	福山市沼隈町能登原	昭37.3.29	桁行五間半、梁間五間半、入母屋造、椀瓦葺、方丈建築		江戸時代の元文3年(1738)建立。中央に仏壇の間を設け、左右に書院と奥の間を配した禅宗の方丈建築で、欄間の意匠もすぐれている。建立後著しく改修を受けたが、江戸時代中期(16世紀後半～17世紀前半)の方丈建築物の好例となっている。 誓台寺は沼隈半島の南端、阿伏鬼(あぶと)岬にある。暦応年間(1338～1342)に覺建親王(かくそけい)が開いたと伝え、一時衰退し建築物は荒廃したが、元禄元年(1707)霊夢によって得た観音を安置する観音堂とともに、毛利輝元によって再建されたと伝えられる。阿伏鬼観音として親しまれている。		
県	重要文化財(建造物)	石造宝篋印塔 正平十の銘あり	せきぞうほうきよういんとう	1基	府中市上下町字矢野	昭38.4.27	花崗岩製	高さ1.16m	南北朝時代の正平10年(1355)建立の宝篋印塔で、塔身に銘が刻まれている。 この塔が建った矢野は中世矢野郷あるいは矢野荘に属し、南北朝時代初期(14世紀前半)には付近で南朝勢力が活発に活動していた。この塔も当時の上下地方における南朝色を示す資料となっている。		
県	重要文化財(建造物)	枝の宮八幡神社本殿	えだのみやはちまんじんじやほんでん	1棟	山県郡北広島町大朝	昭40.4.30	三間社流造、屋根、銅板葺		安土桃山時代の天正3年(1575)建立の棟札が残る。後世修復が繰り返され、当初部材の残りは悪い。三間社造である。向拝(こうはい)の基礎(かえるまた)は当初の部材で、国重文の龍山八幡神社本殿(同町新庄)の基礎によく似ていて、そのできばえはやや劣り、装飾部が簡素であり見劣りする点もあわせて、地元の工匠による建立と思われる。 県内の残存例が数少ない天正期の社殿であるとともに、地方工匠の技能の様子を知るに良い資料である。また、龍山八幡神社本殿において失われている彫像および桁組の残存している点も高く評価されてよい。		
県	重要文化財(建造物)	極楽寺本堂	ごくらくじほんどう	1棟	甘日市市原	昭42.5.8	桁行三間、梁間三間、四方妻階付、方形造、柿葺		現在の姿は江戸時代後期の天明9年(1788)に古材の一部も利用して再建されたものと言われる。正面向拝(こうはい)廻りの工夫を除けば法華寺阿彌陀堂そっくりの風やかな平安御風の感じのする風流な堂である。内部主屋方三間の神楽様仏殿の様式のもので、これに和風の装飾をつけたものである。極楽寺は標高660mの極楽寺山頂にある真言宗の古刹で、戦国時代の永禄5年(1562)毛利元就が本堂を再興したことが棟札にみえる。		
県	重要文化財(建造物)	三滝寺多宝塔	みたきでらたほうとう	1棟	広島市西区三滝町	昭43.1.12	三間多宝塔、本瓦葺、内部壁面、三間四面(2間1尺4寸四方)		大永6年(1526)の創建、もとは和歌山県の広八幡神社の境内に建てていた。山津波によって破壊されたため、天保6年(1835)に修理し、その後かなり手が加えられている。昭和26年(1951)、原爆被災者の霊を弔うため、現在地に移築された。 全影が比較的美しく、浄土寺や厳島神社の多宝塔につく古建築に属する多宝塔として価値がある。		
県	重要文化財(建造物)	神辺本陣	かんなべほんじん	7棟	福山市神辺町川北	昭44.4.28	本陣の本屋(瓦葺平屋建)、御成の門、上段の間、三の間、札の間、玄関、敷台		江戸時代、尾道屋普波家が営んでいた西本陣の跡。尾道屋普波家は清造販売業も営んでいた。延享5年(1748)に建てられた本屋(平屋建瓦葺)は、御成の間、上段の間、三の間、札の間、玄関、敷台に至るまで、参勤交代の諸侯が宿泊した当時の面影をそのままとどめている。札の間には諸侯の投宿時門前にかかげた木札が数多く残る。 店住居は天保2年(1831)建築、背後には馬屋も残り、安政2年(1855)の建築という正門と木造瓦葺の塙もあわせて、江戸時代の本陣施設がよく保存されている。 江戸時代の神辺は西面街道(近世山陽道)の宿駅として栄えた。		
県	重要文化財(建造物)	西国寺仁王門	さいこくじにおうもん	1棟	尾道市西久保町	昭44.4.28	三間一戸、入母屋造、本瓦葺。		江戸時代の慶安元年(1648)の建立の仁王門である。県内で数少ない様式形式の仁王門で、建立年代からは比較的古い様式でまとめられた、格調の高い建物である。 元文5年(1740)の棟札があり、その時の修復で、尾道の豪商・泉屋新助を施主に、大工を藤原五良兵衛として、大工194人、屋根葺き職人21人、人夫191人、合力人夫212人が従事し、瓦2800枚を追加したことが知られる。		
県	重要文化財(建造物)	児玉家住宅	こたまけじゅうたく	1棟	安芸高田市甲田町浅塚	昭48.5.30	木造、寄棟造、茅葺、平屋建二階付。	19m×11m	児玉家はかつて「玉屋」を称したこの地方の豪農で、その主屋は18世紀中頃の建築と思われる。 規模の大きいこの建物は、ほぼ当初の状態をよく伝えており、表の部屋と納戸間の筋に一間ごとに配置された柱が正確に残っており、台所の縁の間が土間にそのまま出ているのは地方的古式を伝えるものである。土間上部の梁組は二重の桁組という組み方で、この地方の特色を表しており、極端な巨材を用いていないのは年代的にふさわしい構造である。		
県	重要文化財(建造物)	寿福寺禅堂	じゅふくじぜんどう	1棟	庄原市東城町新免	昭59.1.23	宝形造、茅葺、方三間の土間の堂、内部和様仏壇		室町時代後期(15世紀後半～16世紀後半)の和様の禅堂である。方三間の土間の堂で、現在は宝形造の特異な屋根が乗っている。天井の低い住宅風の優れた意匠をもったものである。堂の柱は円柱で、外側に廻縁の付いた痕跡があり、上部には舟形木(ふなびしぎ)を使用している。もとは寺の裏の高台にあたるものをここに移したといわれ、相当の改修を受けているが、柱、舟形木、天井、天井長押、仏壇米迎室等は完全に残っている。 内部の装飾、特異な屋根の形式、中世遺構のまったくない曹洞宗の中世の仏堂であるなど、芸術的にも学術的にも貴重な建築物である。 寿福寺は常磐峠近くの山間にある曹洞宗寺院である。同町内の徳雲寺末寺として戦国時代の天文3年(1534)に創められたという。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(建造物)	楽音寺本堂 附 有文墓碑銘石	がくおんじほんどう	1棟	三原市本郷町南方字堂之前	昭62.3.30	桁行三間、梁間三間、三面妻階付、寄棟造、本瓦葺		安土桃山時代の慶長3年(1598)の建立である。方三間の堂の四方に後に裳階(もこし)をめぐらせている。現在は背面の裳階は撤去されている。 堂内の空間が非常に大きく、中世や近世の社寺建築ではあまり見られない特殊な技法が用いられているなど、戦国時代の地域の特徴が顕著な建物である。 楽音寺は現在の国道2号線の南方丘陵裾に位置し、平安時代後期(12世紀)に開発領主・沼田氏が創建した古刹である。鎌倉時代(1192~1392)に小早川氏菩提寺となり18坊を数える大寺に発展したが、江戸時代初頭(17世紀前半)に寺領を没収され、衰微した。		
県	重要文化財(建造物)	旧佐々木家住宅	きゅうさききけいゆうたく	1棟	三次市三和町敷名字狛師岩山	昭62.3.30	桁行七間半、梁間四間半、茅葺、平屋建		江戸時代中期(17世紀後半~18世紀前半)の農家建築である。表の「板の間」隣の「でい」が1間間の4畳で、奥に神座らしい床がつけられ、あたかも8畳出床の形のあるなどの特徴を有し、古式の農家の間取りの様式をよく伝えている。 もとは三和町上菅にあったがその後解体され現在地に移転された。		連絡先:三次市教育委員会 (0824-64-0092)
県	重要文化財(建造物)	光照寺山門	こうしょうざんもん	1棟	福山市沼隈町中山南	昭63.12.26	四脚門、切妻造、本瓦葺、桁行4.3m、梁行4.1m		江戸時代初期の慶長18年(1613)建立といわれる規模の大きな四脚門である。組物は壁付の肘木(ひじき)を横に広げた唐椽系の構成で、全体には建設当初の部材をよく残している。 光照寺は沼隈半島の中央、山南の谷合いにあり、親當上人の法弟明光上人が中国地方への布教の拠点として建保4年(1216)に創建した寺院で中国地方最古の浄土真宗寺院である。伽藍は戦国時代末期に火災にあったが慶長18年に福島正則の援助によって再建した。		
県	重要文化財(建造物)	光照寺鐘撞堂	こうしょうじかねつどう	1棟	福山市沼隈町中山南	昭63.12.26	入母屋造、四柱式、本瓦葺、間3.6m×3.8m		江戸時代初期の慶長18年(1613)建立と伝えられる、四柱式の鐘楼である。県内最古であり、また有数の規模を持つ。唐椽を主体にした構造である。天井の板の一部に後補材がある以外は当初材であり建立当初の形をよく残している。 光照寺は明光上人が中国地方への布教の拠点として建保4年(1216)に創建した寺院であり、中国地方で最も古い浄土真宗の寺院である。		
県	重要文化財(建造物)	大慈寺観音堂 附 厨子 1基 棟札 2枚	だいじじくんのどう	1棟	三次市吉舎町吉舎	平11.11.20	方三間、入母屋造、薄板鉄板葺、唐椽仏堂		戦国時代の永禄12年(1569)に建てられた唐椽の仏堂である。江戸時代中期(17世紀後半~18世紀前半)と明治末期に大きな改修を受け天井、建具は失われ、低い床が張られ、屋根、入口、仏壇の向きが替えられる等の変更が加えられているが、建具を除いては当初の形態がよく残っている。 建築形態はとくに贅を凝らしたものでないが、時代の特色をよく示している。 大慈寺は吉舎東方山中にあり、応永28年(1421)に和知蓮宗寺氏家によって開かれた禅宗寺院である。開山の宗綱は三原市の佛通寺開山忠愚及の高弟であったという。観音堂は永享11年(1439)に和知時実が建立したがその後焼失し永禄12年に再建された。		
県	重要文化財(建造物)	千葉家書院 書院、廊下及び浴室、浴室、本門及び築地塙、土蔵	ちばけしやいん	5棟	安芸郡海田町中店	平3.4.22	書院/入母屋造、棧瓦葺 廊下及び浴室/切妻造、棧瓦葺 浴室/片入母屋造、棧瓦葺 本門/切妻造、棧瓦葺 築地塙/本門両側17.70m、土蔵/二階建、切妻造、本瓦造		江戸時代中期の安永3年(1774)に建築されたもので、面皮柱を用い、床間に書院を組み合わせたなど、数寄屋造りを基調にしている。また欄間・障子等に意匠を凝らしており、保存状態もきわめてよい。旧山陽道沿いに民家の中で書院の建物がはっきりした形で残っているものは少なく、貴重である。 千葉家(神保屋)は、旧山陽道に面したところにある。江戸時代には「借送役」として幕府や藩の書状や荷物の運送業務に従事し、また幕府役人等も宿泊していた。		
県	重要文化財(建造物)	佐々井厳島神社本殿内玉殿 鳥居社額 1枚 棟札 1枚	ささいいつくしまじんじほんでん ないぎよくでん	5基	安芸高田市八千代町佐々井字小丸	平3.12.12	第一殿/見世棚造、屋根切妻造、柿葺/桁行0.770m、梁間0.703m、棟高1.788m 第二殿/見世棚造、屋根切妻造、柿葺/桁行0.876m、梁間0.833m、棟高1.757m 第三殿/見世棚造、屋根切妻造、柿葺/桁行0.854m、梁間0.582m、棟高1.542m 第四殿/見世棚造、屋根切妻造、柿葺/桁行0.870m、梁間0.627m、棟高1.712m 第五殿/見世棚造、屋根切妻造、柿葺/桁行0.918m、梁間0.612m、棟高1.660m		南北朝から室町時代初期(14世紀前半)にかけて造られた5基の玉殿(宮殿くうでん)で、14世紀前期に造られた第一殿は神社本殿形式の現存する玉殿としては全国でも古いものである。墨書によって第五殿は文和2年(1353)、第三殿は文安2年(1445)の建立であることが知られる。5基に共通している点は、切妻造で平入りであること、柿葺であること、柱は丸柱で土居桁の上に乗っていること、組物は造三斗として禅宗様式であることなどがある。 玉殿は社殿内に安置される建物であるが、この玉殿は規模も大きく、また、細部も細かく作られ、保存状態も極めて良好である。また、柿葺の屋根も葺き替えは受けておらず、広島地方の鎌倉、室町時代(12世紀~16世紀)の建築技法を知る上で、貴重な存在である。 佐々井厳島神社は本郡から三次に抜ける街道に沿って北西に面して建てられている。延徳2年(1490)の鳥居社額、天正2年(1574)毛利輝元の社殿造営の棟札が残されている。		
県	重要文化財(建造物)	常盤神社本殿内玉殿	ときわじんじほんでんないぎよくでん	3基	安芸高田市八千代町勝田字隠地	平3.12.12	第一殿/一間社、流見世棚造、板葺/桁行0.382m、梁間0.433m 第三殿/一間社、流見世棚造、板葺/桁行0.355m、梁間0.388m 第四殿/一間社、流見世棚造、板葺/桁行0.355m、梁間0.388m		常盤神社本殿内に安置される玉殿のうち、戦国時代、16世紀中頃の建造と推測されている3基の玉殿。様式的には室町時代後期(16世紀)の特徴を有する流見世棚造の小社殿で、実物と同じような仕事で造られている。保存状態も極めて良く、特に建立当初の深長板葺の屋根が残っているのは貴重である。資料の少ない中世後期(15~16世紀)の神社社殿を知る格好の資料である。 常盤神社の沿革は詳らかでないが、明治16年(1883)に旧勝田村内の八幡神社と新宮神社(旧称熊野新宮)の二社を合併して常盤神社と改称しており、玉殿は旧八幡神社のものと思われる。「高田郡史」によれば八幡神社は天文年間(1532~1554)ごろに柱元造が再建したと伝えられる。		
県	重要文化財(建造物)	願福寺薬師堂	がんにふじやくどう	1棟	山県郡安芸太田町宇堂河内	平3.12.12	方三間、宝形造、棧瓦葺、向拝付		江戸時代初期、17世紀後半頃の建立と考えられる。荘堂的な小堂であるが、斗拱(ときょう)に出組を使い、内部も手先肘木(てさきひじき)を出して天井桁を支える等、本格的な構成になっている。屋根は当初は茅葺であったと推測されている。 堂内に安置されている薬師如来像や十二神等は小像ではあるが天文20年(1551)に造られたものであり、江戸時代の社堂の稀有な現存例であることとあわせて、室町時代末期から江戸時代初期(16世紀後半~17世紀前半)にかけてのこの地方の信仰を知る格好の資料となっている。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(建造物)	観現寺厨子	かんげんじすし	1基	東広島市西条町御園宇字勝谷	平4.10.29	桁行一間1.63尺(0.494m)、梁間一間1.22尺(0.37m)、総高2.93尺(0.888m)、如意頭		頭貫(かしらぬき)本鼻の模様や葺股(かえるまた)その他の技法からみて、室町時代中期(15世紀後期)の製作と考えられる。規模は小さいが、軸組の組み方は本格的なものであり、本鼻の縁形(くがた)や斗肘木(とひじき)の形状、如意頭(にいがしら)の縁形(くがた)など、室町時代中期の建築的特徴を有し、製作技術も優れたものであって、室町時代(14世紀～16世紀)の安芸地方の建築様式を知る上で、貴重な資料である。 観現寺は西条盆地の中央部、黒瀬川の左岸近くにある。		
県	重要文化財(建造物)	観音寺本堂 附 棟札 1枚	かんのんじほんどう	1棟	福山市北吉津町一丁目	平4.10.29	桁行五間、梁間五間、一間向拝付、入母屋造、本瓦葺		慶安4年(1651)建立。福山城の鬼門守護のため建立されたと推定されている。 折衷様の建物で、表飾に桃山時代から江戸時代初期(16世紀末～17世紀前半)の技法が見られる。県内唯一の近世密教寺院本堂の遺構として、また折衷様の変遷をたどるうえでも、貴重な事例である。		
県	重要文化財(建造物)	観音寺表門	かんのんじおもてもん	1棟	福山市北吉津町一丁目	平4.10.29	桁行一間、梁間一間、四脚門、切妻造、本瓦葺		慶安4年(1651)頃、本堂と同時期に建立されたと推定される。四脚門と呼ばれる4本の柱で構成された門で、江戸時代初期(17世紀前半)の様式を伝えている。 禅宗様を取り入れた折衷様で構成されているが、和様の門の特徴である冠木を使用せず、中央柱を様まで伸ばし、側との間に海老虹梁を渡し、そのために出来た棟と扉間の空隙を花格子欄干で埋めるなど、独特の工夫が見られる。		
県	重要文化財(建造物)	住吉神社本殿・瑞垣及び門 附 覆屋 1棟 幣殿 1棟 棟札 3枚	すみよしじんじやほんでん・みずがきおよびもん	2棟1条	呉市豊町御手洗字住吉町	平8.9.30	本殿ノ桁行一間、梁間一間、住吉造、檜皮葺 門ノ一間冠木門、板葺 瑞垣ノ短辺3.64m、長辺4.99m、刺頭板塀		江戸時代の文政11年(1828)大坂住吉神社を勧請して建立された。拝殿は天保4年(1833)の造営である。御手洗町の南部、波止(はと)のもとに位置し、御手洗外港の整備にあわせて大坂湾池家の寄道により建立された。 小規模ながら本殿・瑞垣・門が完備した本格的な住吉造社殿である。 住吉造の社殿は全国的にも少なく、江戸時代後期(18世紀後半～19世紀前半)の貴重な資料となっている。 御手洗は瀬戸内を代表する港町のひとつである。江戸時代前期(17世紀)に町が形成されて以来、沖乗り航路の中継地として栄えた。		
県	重要文化財(建造物)	恵美須神社本殿・拝殿 附 覆屋 1棟 棟札 2枚	えびすじんじやほんでん・はいでん	1棟	呉市豊町御手洗字蛸子町	平8.9.30	本殿ノ一間社流造、檜皮葺 拝殿ノ桁行三間、梁間二間、入母屋造、本瓦葺、向唐破風、向拝付		江戸時代の享保8年(1723)の建物である。御手洗町の先端、港の近くに位置している。 流造の小規模な本殿ではあるが、江戸時代中期(17世紀後半～18世紀前半)の特徴を良く残している。拝殿は唐破風付(からはらうつき)の向拝(こうはい)を付け、本瓦葺きの本格的な建物である。島嶼部の小規模神社を代表する貴重な建造物である。 御手洗は江戸時代の沖乗り航路の重要な中継地として栄えた港町であった。		
県	重要文化財(建造物)	吉備津神社神楽殿	きびつじんじやくらでん	1棟	福山市新市町宮内	平9.5.19	桁行二間、梁間一間、屋根入母屋造、妻入銅板葺		江戸時代、寛文13年(1673)建立である。 いわゆる舞殿形式である。舞殿は高床の舞楽舞台に入母屋造妻入の屋根を架けた吹抜けの形式であるが、神社では神事用として最初に成立した固有の祭祀専用社殿である。京都を中心とした大社に造営され、近畿一円に普及するが、広島県内ではその例が少ない。 当社の神楽殿(舞殿)は簡素であるが建築的にも優れていて気品を備え、建築年代も明らかであり、保存状態もよく地方の舞殿としては貴重なものである。 吉備津神社は備後一宮であり、平安時代初期の大同元年(806)に備中吉備津神社を現地に勧請したとされ、永万元年(1165)六月日付の記録にその名が見える。		
県	重要文化財(建造物)	極楽寺本堂	ごくらくじほんどう	1棟	三原市東町	平9.9.25	本堂ノ桁行七間、梁間五間、入母屋造、本瓦葺、背面経葺		江戸時代の元文7年(1737)頃の建立である。 向拝(こうはい)を設けない、簡素で全体的に素朴な作りである。内陣を結界で仕切っているが、この結界が残っている例は極めて珍しい。 極楽寺は浄土宗寺院である。		
県	重要文化財(建造物)	福生神社本殿	ふせいじんじやほんでん	1棟	世羅郡世羅町上津田	平11.4.19	正面三間、入母屋造平入、銅板葺		江戸時代の正徳5年(1715)の建立である。方三間(方5.44m)の前室付平面で前一間は吹き放しになっている。この平面形式は本県においては17～18世紀にかけて多数造営され、当本殿はその最盛期の建立になる。 龍や獅子、鳳凰、虎など主要部に彫刻装飾がみられ、地方の建築技術者の建築装飾に対する理解や認識の伝播を知る上で好資料である。形態が良好で、細部に地方色が濃厚にみられ、近世の地域大工層の建築技術の顕微鏡化して創意工夫による変容の様態を知る上で貴重な遺構である。 福生神社は大正9年(1920)下津田村大須村(世羅西部)に京都伏見福生大社を勧請し、永禄12年(1569)8月に現地に遷座して社殿を造営したと伝えられている。この時、夜中の遷宮に従った氏子によるたいまつ行事が県無形民俗文化財指定の「神籠入り」である。		
県	重要文化財(建造物)	常国寺唐門	じょうこくじからもん	1棟	福山市熊野町	令和4年2月24日	正面1間 側面1間 向唐門 本瓦葺 木造		常国寺の唐門は、室町幕府最後の将軍である足利義昭の由緒を、享保期の施主と大工が当時の知識と技術で建物の形式及び意匠で示したという特色をもつ建造物である。扉上段の棧の間に桐文様を浮き彫りした板が嵌められ、中扉の意匠は足利氏の家紋である二つ引龍が彫られている。軒丸瓦の瓦頭模様も、旧のものとは二つ引龍であり、足利義昭の御在所であった由緒を表現している。 虹梁や木鼻に彫られた絵様や葺股の形などは、共に時代相応の特徴をみせる。控柱の虹梁形の頭貫とそれに直交する木鼻は雲形に作られており、大瓶束の左右に付く笈形彫刻も力強く、材質・技法・意匠ともに優れている。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	絹本着色弘法大師画像	けんぼんちやくしよくこうぼうだいしがぞう	1幅	世羅郡世羅町甲山	昭28.6.23	絹本着色、屏風仕立て、	縦232cm、横147cm	今高野山御影堂の本尊で、いすの座に正座する大師像を描いている。高野山、普通寺のそれとともに三大師像と称される名品で、それらと同様に秘仏として伝存した大師像である。 わが国最古の大師像は京都醍醐寺及び大阪金剛寺の平安時代(794~1191年)作のものであるが、本品は鎌倉時代初期(13世紀前半)の数少ない作品の一つで貴重である。		関連施設:今高野山龍華寺収蔵庫(0847-22-0840)
県	重要文化財(絵画)	絹本着色水野忠重画像	けんぼんちやくしよくみずのただしげがぞう	1幅	福山市寺町	昭28.10.20	絹本着色、軸装	縦120cm、横52.5cm	水野忠重は三河の国人領主、初代福山藩主・水野勝成の父である。この画像は寛永17年(1640)に水野勝成が画工に命じて描かせたもの。画の上には、勝成の求めに応じた大徳寺住職・宗玩の賛がある。 賢忠寺は、水野勝成が創建した水野氏歴代の菩提寺で、水野氏関係の遺品をいくつか伝えている。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色水野勝成画像	けんぼんちやくしよくみずのかつなりがぞう	1幅	福山市寺町	昭28.10.20	絹本着色、軸装	縦98cm、横46cm	正保2年(1645)、水野勝成晩年の姿を描いた画である。大徳寺住職源安の賛がある。 水野勝成は徳川藩代の大名で、元和8年(1627)福山城を築いた。武将として活躍する一方、俳諧(はいかい)などの文学をたしなんだ。福山においても新田開発や城下の建設に意をそそいだ。彼の墓所は、同じ賢忠寺境内にある。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色弘法大師画像	けんぼんちやくしよくこうぼうだいしがぞう	1幅	福山市市町	昭29.9.29	絹本着色、軸装	縦113cm、横77cm	この大師像は目許が常に見守っているように「目引き大師」とも言われる。構図は他の弘法大師像と変わりないが、重福の右上の隅に大師の笠懸像である弥勒菩薩が描かれているのは珍しい。室町時代(1333~1572年)の作。 画の裏面には、元禄12年(1699)に盗難にあつたが江戸谷中(やなか)長久寺で発見され、寺に帰ってきた旨の墨書がある。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色弘法大師絵伝	けんぼんちやくしよくこうぼうだいしえでん	8幅	尾道市東久保町	昭30.3.30	絹本着色	縦152cm、横96cm	室町時代中期(15世紀)に製作された。弘法大師の一生を説く絵伝である。この類の絵伝は各地に多く残されているが、この絵は各部分とも力強い筆致のよき絵伝である。 第一軸は「大師誕生から久米寺感経」まで、第二軸は「入唐から清水写経」まで、第三軸は「唐東祥雲から三鼓抜擧」、第四軸には「応天文政筆から二荒日光」まで、第五軸は「東寺勸修から二間修法」まで、第六軸には「高野尊入から入定御願拜見」まで、第七軸と第八軸は2幅1組でストーリーがつづられ「陸博参詣」と第八軸「法皇行幸」が描かれている。また、図の下から上へストーリーが展開している。		関連施設:浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(絵画)	絹本着色弘法大師像	けんぼんちやくしよくこうぼうだいしぞう	1幅	尾道市西久保町	昭30.3.30	絹本着色	縦78cm、横39cm	高野山の真如親王筆の御影の系統に属する作品で、小幅ながらその幅下に高野壇上伽藍の景を描いているのは珍しく、その布置から見て天授3年(1377)の一部伽藍の焼失以前の情景を描いたものと思われる。それから判断して鎌倉時代末期(14世紀前半)の作かと考えられる。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色地藏菩薩像	けんぼんちやくしよくじぞうぼさつぞう	1幅	尾道市西久保町	昭30.3.30	絹本着色	縦110cm、横95cm	地藏菩薩は、六道の衆生を救う菩薩と言われ、わけても地獄における救済の力を中心として信仰され、わが国でも平安時代中期から鎌倉時代(1185~1332)にかけて信仰が盛んになり、庶民生活と結びつき、その遺像、絵画は多い。 本品も、そのような室町時代(1333~1572)に描かれたと思われる作品で、左足を下げ、右足を立膝にして岩座に坐す。右手を額にそえ、左手には錫杖(しゃくじょう)を持ち、左右に掌裏童子、掌裏童子の二童子を配した延命地藏菩薩の像である。彩色は鍍金(きりがね)・金泥・緑青や朱を用いて精緻に描いた色彩の豊かな面像である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色観音上人絵伝	けんぼんちやくしよくしんらんしょうにんえでん	1幅	福山市沼隈町中山南(京都市下京区 龍谷ミュージアム寄託)	昭30.3.30	絹本着色	縦175cm、横120cm	この絵伝は、南北朝時代の建武3年(1336)本願寺存覚上人が滞留した際、法然上人絵伝三幅などとともに寄附したと伝えられる。画工は藤内、建康5年(1338)成立という。康永2年(1343)の絵伝が増幅される以前のもので、掛軸絵伝の初期のものである。 光厳寺は建保4年(1216)明光上人の開創といひ、中国地方浄土真宗流布の拠点であった。		関連施設:龍谷ミュージアム(075-351-2500)
県	重要文化財(絵画)	紙本着色竹林寺縁起絵巻	しんぼんちやくしよくちりんじえんぎえまき	2巻	東広島市河内町入野	昭31.3.30	紙本着色		室町時代(1333~1572年)の作で、漢文調の詞書と絵を交互に配した長巻である。行基にまつわる竹林寺の創建と小野篁(おののたむら)伝説を記している。 竹林寺は河内町市街地の南方にそびえる霊山山頂に位置する真言宗の古刹で、中世、国人領主平賀氏の保護を受け承継していた。 ※小野篁(802~852)…平安時代初期の学者・漢詩人・歌人		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	絹本着色十六善神像	けんぽんちやくしよくじゅうろくぜんしんぞう	1幅	三次市三良坂町田利(三次市小田幸町 広島県立歴史民俗資料館寄託)	昭33.1.18	絹本着色	縦125cm、横60cm	中尊、脇侍の円光の金線の(まどりが)とどみなく鮮やかな良質の金泥の描線であること、面輪(がけん)に一輪半の輪目の荒い素網を使用していることから室町時代中期(15世紀前半)の作と想われる。釈迦は宝座に結跏趺坐(けつかざ)し、身光頭光の二重門の光背をそなえ、左手をひざに右手は説法印を結び、その頭上高く宝珠を飾った天蓋を掲げている。前方左右には白象に乗る普賢、獅子に乗る文殊の二菩薩の脇侍と、左下方には玄奘(げんじょう)三藏法師求法の変を描いている。その他画面左右に十六善神が描かれている。 所有者の田利八幡神社は上下川沿いの低丘陵斜面に位置し、鎌倉時代(1192～1332年)にこの地域を治めた地頭・広沢氏によって勧請されたと伝えられる。		関連施設: 広島県立歴史民俗資料館(0824-66-2881)
県	重要文化財(絵画)	絹本着色阿彌陀三尊来迎図	けんぽんちやくしよくあみださんぞんらいごうず	1幅	広島市南区堀越二丁目	昭36.4.18		縦87.5cm、横37.5cm	室町時代中期(15世紀前半)の作。絹本は織り目の荒い素網を用い、下地に顔料を施した上に描いている。 中尊は雲上の跏趺蓮座(ふみわけれんざ)に立ち、左手を垂れ右手を胸に弥陀の印を結んでいる。肌・衣ともに金泥で仕上げ、衣文などは繊細な網目文・亀甲文・虎沙門亀甲文・唐草文を金色の線で描いている。 宝冠をしただき首に瓔珞(ようらく)を垂れた左(勢至=せいし)右(観音)の二菩薩の脇侍もまた雲上の跏趺蓮座に立ち、各々の字形の前かがみの姿勢で、勢至菩薩は合掌し、観音菩薩は蓮華形の蓮を持つた動的な表現をしている。		
県	重要文化財(絵画)	紙本着色隅置鉄山絵巻	しほんちやくしよくすみやてつざんえまき	2巻	山県郡安芸太田町加計	昭36.4.18	紙本着色 卷子装	第一巻長さ740cm、幅24cm、 第二巻長さ760cm、幅24cm	江戸時代後期(18世紀後半～19世紀初め)に描かれたもので、基北出身の幕末の狩野派画家、佐々木古仙斎の作ではないかと推定されている。 古くから中国産山鉄は珍貴な原料とした製鉄が盛んであったが、江戸時代の「たたら製鉄」の状況をいきいきと描いた珍しい作品である。砂鉄の輸送た「すく(鉄鉄)」「けら(鋼鉄)」を作る「高炭たたら」での生るの様子を描く巻と、「かんば(鉄山事務所)」と鍛冶場の巻の二巻に分かれており、最後の部分に「たたら」と鍛冶場で使った種々の道具類が描かれている。描写はきわめて写実的で、鉄山研究の貴重な資料である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色法然上人像	けんぽんちやくしよくほうねんしやうにんぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭37.7.20	絹本着色 軸装	縦69cm、横42cm	浄土宗の光明寺に古くから伝わる画像で、黒の法衣をまとい高麗線(こうらいべい)の置に坐り、数珠を手にし顔骨を高く頭は二段に描かれたいわゆる法然頭である。法然の画像としてはごく古いもので、寺伝によると円光大師(法然)自筆の尊影というが、画面に建暦口年(1378～1381)正月六日とあり、室町時代初期(14世紀)の作であることが知られる。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色浄土真宗光明派先徳像	けんぽんちやくしよくしょうどうしんしやうみょうこうはせんぞう	1幅	福山市駅家町倉光	昭38.11.4	絹本着色、軸装	縦122cm、横94cm	光明派浄土真宗教団の、平安時代から鎌倉時代(9～14世紀前半)までの主な僧侶13人の肖像画。 南北朝時代(1333～1392)ないし室町時代初期(14世紀前半)の作と推定される。 光明派浄土真宗は、鎌倉時代末期以来、沼隈山南(さんな)の光照寺を中心に備後南部一帯で信仰をあげた。 向って左上の源空以下、親鸞、真仏、源海、了海、誓海、光明、信光、良賢、明尊、性善、勝尊の順で左右交互に描かれている。最後の一人はよくわからない。信光以下勝尊までは光明に従って来た備後教団の指導者で、最後の人物は願主であろうか。 像を重ねて描き、彩色を加えた華致のすぐれたもので、初期真宗教団の研究資料として貴重である。		
県	重要文化財(絵画)	絵馬(魏馬毛○毛) ※魏の俗字、○は馬へんに魏のツカ	えま(そうもうりよくもう)	2面	尾道市東久保町	昭41.4.28		縦158cm、横176cm	天正5年(1577)福州明石郡船上(ふなげ)(現在の兵庫県明石市船上町)の石井与次郎兵衛尉が奉納した絵馬。 2枚1対の大形の絵馬で、細い椗材の薄板を縦に貼り合わせ、その表面に紙を張り、首をあげた[84x0]毛の馬と首をふした姿の[84x1]毛の馬を一匹ずつ墨書淡彩で描いたものである。いずれも机に綱でつながれており、鞍はつけていない墨力雄健な絵である。 奉納者の石井与次郎兵衛は、後に豊臣政權の水軍の一員としてその名がみえる人物であり、瀬戸内の海上交易に従事していたと推測される。安土桃山時代(1573～1602)の尾道と瀬戸内の海上交通の実態をうかがわせる資料となっている。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(絵画)	光明本尊	こうみょうほんぞん	1幅	尾道市久保町	昭41.4.28	絹本着色、軸装	縦149cm、横91cm	光明本尊は初期真宗教団の礼拝の対象として使用されたもので、古くは三幅一対であったが、その後一幅のものも一般的となった。 本品は南北朝時代(1333～1392)のものと考えられ、本願寺覚如の子・存覚が自筆の画像を宝田院とともに与えたと伝える。 中央に「南無不可思議光如来」の九字の尊号を配し、左下隅に「痛命尽十万無量光如来」の十字尊号、右下隅に「南無阿彌陀仏」の六字尊号を配し、釈迦、弥陀の二尊像を描いている。そして右に天竺(てんじく)・童貞(しょうじやう)の十菩薩を、左に和朝の像を描き、その下部に聖徳大師像を加えている。光明本尊は東日本には多いが、西日本には少なく貴重な資料である。 福善寺は天正元年(1573)行業法師が開いた浄土真宗寺院。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色法然上人絵伝	けんぽんちやくしよくほうねんしやうにんえでん	3幅	福山市沼隈町中山南(京都市下京区 龍谷ミュージアム寄託)	昭42.5.8	絹本着色、軸装	縦150cm、横130cm	浄土宗の開祖法然上人及び新来の仏教を積極的に受容した聖徳太子の二人は浄土真宗と浅からぬ縁をもっている。 この絵は建武3年(1336)中国地方における浄土真宗布教の拠点である光照寺に、本願寺の存覚上人が澤留した際、同寺所蔵の親鸞上人絵伝とともに着したと伝えられるもので、表書きによると願主は明尊上人、画工は狩野権門と記され、建武5年(1338)に描きあげられたという。掛軸絵伝の初期のものとして貴重な資料である。		関連施設: 龍谷ミュージアム(075-351-2500)
県	重要文化財(絵画)	絹本着色聖徳太子絵伝	けんぽんちやくしよくしょうとくたいしやうえでん	4幅	福山市沼隈町中山南(京都市下京区 龍谷ミュージアム寄託)	昭42.5.8	絹本着色、軸装	縦150cm、横120cm	建武5年(1338)、明尊上人を願主として隆円が描いた作品で、親鸞上人絵伝や法然上人絵伝と一連の作品である。聖徳太子は浄土真宗においても重要視されており、聖徳太子を礼拝するために多くの作品が作られた。 4軸にわたって聖徳太子の生涯を紹介したものである。1軸4段で16場面が描かれている。		関連施設: 龍谷ミュージアム(075-351-2500)

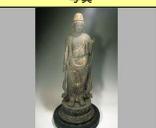
国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	絹本着色春日曼荼羅	けんぼんちやくしよくかすがまんだら	1幅	尾道市西久保町	昭44.4.28	絹本着色、軸装	縦99cm、横36.4cm	曼荼羅には、儀軌(ぎき)によって密教の根本理念を図式化したものと、特殊な尊像を中心にその曼荼羅が効果ありと信じられた加持祈禱の際に奉懸(ほうけん)される別尊曼荼羅がある。本品は「春日鹿曼荼羅」と称される別尊曼荼羅のひとつで、上方に遠山を描き、中央に本地仏を下方に春日大社の御使いと云われる神鹿の立つ姿を描いている。破損も少なく保存も良好な室町時代(1333～1572)の作である。		
県	重要文化財(絵画)	刺繍阿弥陀三尊種子曼荼羅	ししゅうしゃかさんぞんしゅうまんだら	1幅	尾道市西久保町	昭44.4.28	絹糸刺繍、軸装	縦73cm、横27.5cm	著色絹糸で上方に天蓋を刺繍し、中央の三尊の円光の中の蓮座に、毛髪で刺繍した種子がある。その下には三尊の円光上に火香、花瓶を刺繍して供え、三尊を祀る形をあらわしている。蓮座蓮弁の糸は、筆織(うんかん)式の色調であらわし美麗である。表装中廻しの裂の上方には散華、下方には蓮池を織った豪華なもので、刺繍工芸を知るうえに貴重である。室町時代(1333～1572)の作。		
県	重要文化財(絵画)	紙本着色宮景盛像	しばんちやくしよくみやかげもりぞう	1幅	庄原市西城町栗	昭45.5.14	紙本着色、軸装	縦84cm、横43cm	戦国時代の永禄10年(1567)に描かれた西城宮氏の当主・宮景盛の肖像画。西城宮氏は、備後に勢力をもった有力な國人領主・宮氏の庶家である。久代(東城町)を本拠としていたが、宮高盛の時に西城大富山城に拠点を移した。宮上総介景盛は高盛の孫にあたり大富山城の第二代城主である。画の上層には浄久寺二世の覚海禅師の肖像画があり、それには宮氏は本来藤原姓であるが、高盛の時代に源姓を称したことが記されている。浄久寺は宮高盛が創建した曹洞宗寺院であり、宮氏の菩提寺であった。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色覚海禅師像	けんぼんちやくしよくかくかいぜんしぞう	1幅	庄原市西城町栗	昭45.5.14	絹本着色、軸装	縦92.5cm、横47.5cm	浄久寺は、備後における曹洞宗の巨刹徳雲寺(東城町)の第二世開山宗梅(ていあんそうばい)が、宮高盛を開基檀那として建てた寺である。覚海はその浄久寺二世で、画は天正8年(1580)に宮高盛が寄進したことともに覚海禅師自賛の七言律詩が記されている。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色藤原盛勝像	けんぼんちやくしよくふじわらもりかつぞう	1幅	庄原市西城町栗	昭45.5.14	絹本着色、軸装	縦88.7cm、横37.5cm	安土桃山時代の天正10年(1582)12月作。西城宮氏一族であった藤原盛勝の肖像画である。盛勝の没後、彼の子の盛和が描いたもので、浄久寺四世徳光禅師の賛がある。浄久寺は宮高盛が開いた禅宗寺院。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色不動明王像	けんぼんちやくしよくぶどうみょうおうぞう	1幅	福山市駅家町新山	昭46.4.30	絹本着色、軸装、38cm幅と16.5cm幅の画絹を継ぐ	縦120cm、横54.5cm	室町時代中期(15世紀前半頃)の製作。中央に火炎光背を背にする不動明王立像を描き、制多迦(せいたか)、狩野羅(かしのら)の二童子を左右の脇侍に記した三尊形式の構図をとる。色彩及び描線は当初のものをよく残しており、保存も良好である。不動明王は、如来の使者、真言行者を守護するという性格を持っており、空海・円珍以後平安・鎌倉・室町を通じて流行し、今日に多くの作品を残している。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色不動明王像	けんぼんちやくしよくぶどうみょうおうぞう	1幅	福山市北吉津町二丁目	昭47.4.24	絹本着色、軸装	縦98cm、横40.5cm	室町時代中期(15世紀前半頃)の作。火炎光背を背にした中尊不動明王を中心に、脇侍に制多迦(せいたか)、狩野羅(かしのら)の二童子を配する。当初の彩色をよく残している。不動明王像は平安時代(794～1191)以来流行し、彫刻に絵画に県内にもその作例は多い。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色不動明王画像	けんぼんちやくしよくぶどうみょうおうぞう	1幅	広島市安佐南区祇園四丁目(広島市南区宇品御幸二丁目 広島市郷土資料館保管)	昭48.12.18	絹本着色、掛幅装	縦105.4cm、横40.0cm	室町時代後期(15世紀後半～16世紀)の作と思われる。もと軸装であったものを額装している。裏面の墨書銘によると、広島藩主浅野吉長が、修復を加えた後、当時感徳院と称した数喜寺に寄進したものであるという。作者は禅僧の玄沢という。右壁に立つ不動明王は、両眼を見開き歯牙はあらわさず、右手に剣を左手に素条を持っている。火炎光背及び着衣には朱色を施した痕が見える。像は鋭い筆致で表されている。		関連施設：広島市郷土資料館(082-253-6771)
県	重要文化財(絵画)	絹本着色釈迦涅槃図	けんぼんちやくしよくしゃかねはんず	1幅	三原市本郷町船木	昭49.4.25	絹本着色、軸装	縦157.7cm、横156.5cm	室町時代後期(15世紀後半～16世紀)の作と思われる。軸巻具は表文渡金(そもとぎん)で、絹幅三幅と半幅を両側に縫いたものを用い、絹本の織目はやや荒い。顔料の剥離は少ない。永禄4年(1561)に毛利元就が、その子小早川隆景を高山城に訪ねた時、その宴に侍した墨華尼に与えたものであるという。江戸時代の安永6年(1777)に表装替えが行われた。箱裏に墨書銘がある。永福寺は小早川氏の祖・土肥茂平の菩提寺である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	紙本着色楽音寺縁起	しほんちやくしやくがくおんじえんぎ	1巻	三原市本郷町南方 (福山市西町二丁目 広島県立歴史博物館寄託)	昭50.4.8	紙本着色、卷子装	縦34.1cm、長さ1600.3cm	天慶年間(938~946)藤原倫実が純友の乱に受けた護持仏薬師小像の霊験と恩に報いるため楽音寺を創建した縁起を、詞書と絵をつらね叙した紙巻物である。現存する絵巻は、江戸時代初期の寛文年間(1661~1673)遠光風によって原本を写し上げられたかわりに下付された模写である。奥書に「狩野右筆藤原安信筆」とあり当時第一流の画家が往古縁起を忠実に模写したものとみとめられる。この縁起は鎌倉時代(1192~1332)の原作の写しとして、歴史的美術的価値は相当にあり、安国沼田荘や豪族沼田氏の起源を知るための好資料である。楽音寺は本郷町南方に所在する真言宗寺院。沼田荘開発領主の沼田氏の氏寺として創建され、鎌倉時代以後は地蔵・小原川氏の氏寺となった。盛時は18院の子院をもっていた。江戸時代初期、福島正則によって寺領が没収された。		関連施設：広島県立歴史博物館(084-931-2513)
県	重要文化財(絵画)	紙本着色十六善神像	けんぼんちやくしやくじゅうろくぜんしんぞう	1幅	世羅郡世羅町甲山	昭53.10.4	紙本着色、軸装	縦101.4cm、横49cm	十六善神とは、大般若経を守護する護法善神で、釈迦如来と共に描かれた画幅は、大般若会の本尊としていつか遺存している。この絵も他に多く見られる構図で描かれており、法衣を通肩(つうけん)にかけ施無畏(せむい)印を結び獅子座に坐した中尊釈迦如来を中心に、その周囲に円光をあらわしている。釈迦の下方左右には、文殊菩薩、普賢菩薩等四菩薩と毘盧博支善神(びるはしやぜんん)等の十六善神を配し、最下方に玄奘(げんじょう)三蔵法師の求法の姿と鬼像を描いている。釈迦の上方には、曼羅(まんらん)彩色と見られる天蓋を描き懸けている。剥落の部分はあるが補筆はなく、よく当初の状態をとどめた室町時代末期(16世紀)の作である。龍華寺は今高野山ともいい、大田庄の中核寺院であった。		毎年8月20日のみ公開 関連施設：今高野山龍華寺収蔵庫(0847-22-0840)
県	重要文化財(絵画)	絹本淡彩楊柳観音像(巖絶道沖の賛あり)	けんぼんちたんさいようりゅうかんのんぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭54.11.2	絹本白描淡彩、軸装	縦35.7cm、横18.4cm	古くから仏画の画題として愛好され、種々の病気の消除を本誓とするという楊柳観音を描いたもので、小幡ではあるが、繊細流麗な墨線は像の隅々にまで生きており、特に宝冠の描写は精緻である。寺伝によると松室(もつむい)聖といふ落款等もなく、確證の根拠を欠いているものの画幅上部の観絶道沖(げんぜつどうちゅう)の賛により、南宋時代(12~13世紀)のすれた画工の手になる作品であることがうかがえる。なお、賛者観絶道沖(げんぜつどうちゅう)は、淳祐10年(1250)に死去しているから、この作品は13世紀半ば以前のものであると思われる。光明寺は、南北朝時代初期(14世紀前半)、足利尊氏の從軍僧によって天台宗から浄土宗に改宗したと伝えられる。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色地藏菩薩十王像	けんぼんちやくしやくじざうぼさつじゅうおうぞう	1幅	尾道市東土堂町	昭55.6.24	絹本着色、軸装	縦94.3cm、横86.0cm	嘉禎4年(1562)朝鮮半島で描かれた仏画で、李朝朝鮮の国王や王妃等の寿命長久と国土の安泰、人民の安寧、仏法興隆を願って、清平山人が描いたもの。この十王像一面を描き清平寺に安置して書をたき、更にその功德を一切衆生に及ぼさんことを祈念したと記す。中央に地藏菩薩。その周辺に仏法を守護し死者を救く十王を描く。光明寺は浄土宗寺院である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色釈迦涅槃図	けんぼんちやくしやくしゃかねはんず	1幅	福山市内海町田島	昭57.2.23	絹本着色、軸装	縦181.0cm、横156.7cm	涅槃像は内身を金色に塗り法衣には袈裟(けさ)の田相を表わす。涅槃台の格狭間(こうざま)には曼羅(まんらん)彩色を施す円形を描き、涅槃像を比べる比丘、鬼人、菩薩、婦人、動物等の描写は普通の涅槃図と異ならないが、天上にある麻耶夫人がむかって左上に描かれているのは珍しい。沙羅樹の華紋、画面に湧く雲法の線は時代性かと思われる。涅槃像の法衣の田相をくまどり彩華していること、涅槃台の格狭間の曼羅彩色にて円形を作っていることから室町時代末期(16世紀)の作と考えられる。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色明光上人像	けんぼんちやくしやくみょうこうじょうしやうにんぞう	1幅	福山市沼隈町常石	昭57.10.14	絹本着色、軸装	縦112cm、横90cm	沼隈光照寺や宝田院を開いた明光上人の肖像画。南北朝時代(1333~1392)の作。冊子を置いた机を前に、数珠をつまんだ姿を描く。明光上人の銘を有し、金具の文様、絵画の描法などは工法的にすぐれ、また宝田院の開山をほいの本県における浄土真宗明光流の伝達の歴史を知る上でも貴重な資料である。明光(1286~1353)は、親堂上人直門の六老僧の一人として伝えられている。開元鎌倉方面で布教活動していたが、西下して元応2年(1320)頃備後沼隈郡の中山南に光照寺、更に宝田院を開き、布教にあたった。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色光明本尊	けんぼんちやくしやくこうみょうほんぞん	1幅	福山市沼隈町常石	昭57.10.14	絹本、軸装	縦168cm、横102cm	南北朝時代(14世紀)の作。本画像の名称の由来は、画像の構成が中央に金にて「南無不可思議光如來」の九字名号の本尊形をなし、それより金線をもって光明を奏するところよっているものと思われる。中央名号と、向って右側下方の歸命十万光如來の十字名号との間に顔光背(げんこうはい)を付す釈迦如来立像を描き、向って左側下方の「南無阿彌陀仏」の六字名号との間に、これも光背を付す阿彌陀如来立像を描く。左右にはインドや日本の先師像が配されている。本願寺寛如の子・存覚が自筆の画像を尾道・福善寺とともに宝田院に与えたと伝えられる。		
県	重要文化財(絵画)	紙本着色一流相承絵系図	しほんちやくしやくいちりゅうそうしやうえいけいず	1幅	福山市沼隈町常石	昭57.10.14	紙本着色、卷子装	総長348cm、縦44cm	この系図には嘉暦元年(1326)の銘があるが、同年の紀年銘をもつ系図は他にも存在しており、どちらが先に描かれたものかはっきりしない。しかし、いずれにしても南北朝時代初期(14世紀前半)の製とみてよい。また、工芸的にも当時の製紙の紙質を知る標本ともなり、系図の前書は国語学の上からも当時の版木書の筆致を知る上の参考となるものである。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色浄土曼荼羅	けんぼんちやくしやくじょうどまんたら	1張	廿日市市廿日市	昭60.12.2	絹本着色、額装	縦187.0cm、横177.0cm	浄土曼荼羅信仰が盛んであった鎌倉時代末期(14世紀前半)の作と推定される。奈良の当麻寺には有名な浄土曼荼羅があり、所謂当麻曼荼羅と言われるものである。この漸喜寺蔵も当麻曼荼羅と同形式になるものである。もとは軸物であったと思われるが、今は破損を防ぐために額張りの形になっている。図構構成は、全く当麻曼荼羅とそっくりを一つにして、中央に阿彌陀三尊を配して上方には殿堂樓閣を描き、下方には仏菩薩衆生の極楽生活の標態を表わす。図面の左右両方には、十数区を区切って極楽の意趣を具現したと思われる図面を表わし、また下段も十数区に区切り、同じ手法を用いているが、中央の区には当麻寺のものと同様に製法の意趣、曼荼羅を構成したと思われるが、今は消え去り、鎌倉時代(1192~1332)のものは広島県には少なく、この曼荼羅は本県における貴重な仏教絵画である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	絹本着色金剛用兼禪師像	けんぼんちやくしやくきんこうようけんぜんじぞう	1幅	廿日市市佐方	昭60.12.2	絹本着色、軸装	縦109.2cm、横50.7cm	戦国時代の永正8年(1511)の描かれた禪師の由[84a2]2(きやくく)に特准(きざ)する像である。その像の右脇に一本の長杖が描かれている頂相(ちんぞう)である。画面の法衣の筆法は直線的で陰影を与えていないのも製作時代のヒントとも思える。剥落で画面はうすくなっているが、由[84a2]文様も派手な手法であったと推測される。 画面に描き出されている長杖は、現在も同寺に保存されており、木製で柄に一面小突起を彫刻した長さ205cmのもので、この長杖は禪師の常用のものであったと思われる。 製作年代の正確に知られる作品であり、絵画(尚像画)史の正確な基準作品として、本県における貴重な例である。 洞雲寺は長享元年(1487)飯島神社主家が金剛用兼を開山として創建した禪宗寺院。 金剛用兼は永平寺再興に尽力し、阿波の守護大名・細川氏からも帰依を受けていた。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色如意輪観音像	けんぼんちやくしやくにょいりんかんのんぞう	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		縦80cm、横40.5cm	南北朝時代の建武元年(1334)の作で、図の右下に墨書銘が見える。寺伝では足利尊氏が寄進したといふ。 六臂(び)の如意輪観音を墨線で描き、彩色はほとんどない。水墨画的な淡彩の画面は鎌倉時代末期から室町時代(1333～1572年)にかけて出始め、それは仏画本来の礼拝の対象としてのものから鑑賞的な面へと移行することを意味するものと言われる。本画像は、上記のような絵画的な見解とその記年銘がほぼ一致する点からみて、貴重な資料であると考えられる。 如意輪観音は、変化観音の一つで、如意とは如意宝珠、輪とは法輪を意味し、それらの功徳によって衆生の苦を抜き、業を与える観音である。像形には二臂、四臂、六臂、八臂、十臂、十二臂等があるが、六臂の例が多く流布しており、その最も著名な例としては、大阪観心寺の本道如意輪観音坐像があげられる。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色千手観音像	けんぼんちやくしやくせんじゆかんのんぞう	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		縦171cm、横82cm	鎌倉時代末期(14世紀前半)の作と推定される。 絵画的な観点からは、画面下方の濃褐色の岩、上方の濃緑色の岩山や虚空、そうした暗いバックを背景として、周囲に二十八部衆を従えて中央に大きく金色の千手観音像、上方に同じ金色の五観音が浮かび上がるように鮮やかに表現されているのはまことに優美である。千手観音のやや画面でうつろった表情に元末期(14世紀)の画法の影響が見られるようである。光背(こうはい)の文様にも見られるように繊細な表現がよくなされてあり、六観音を一回りあらわす特異さにも注目すべきところである。 千手観音は四十八本の指を持つ。形形光背を戴く。 画面向かって左下に「備後国尾道浦」、右下に「浄土寺常住」の墨書銘が認められ、本画像が浄土寺伝来の什物であることが明らかである。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色浄土曼荼羅	けんぼんちやくしやくじよどうまんだら	1幅	尾道市東久保町	昭62.3.30		縦128cm、横128cm	鎌倉時代の作で、もとの軸木の銘によると寛元元年(1243)作、正慶2年(1333)修理と伝えられる。 阿弥陀三尊を中心に多数の仏たちが集まる極楽浄土の情景を描いたもので、当麻曼荼羅と呼ばれる形態の図の一つである。左右および下端にはイタケ夫人が阿弥陀如来に帰依する物語や十六観音などが描かれている。 絹地に絹に三幅に纏いであり、普通は縦横ぎであるのと異なる。このような横縦ぎは幅広い画面の場合に見られる。また、画面右端の上端辺の風景描写が日本的な図になっており、中央の阿弥陀三尊は、仏身は金泥で、衣文は切金を用いている。 廿日市市瀬音寺蔵(当麻曼荼羅形式)に次ぐ鎌倉時代末期の、本県には少ない逸例と言える。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色仁王経曼荼羅	けんぼんちやくしやくにおうきょうまんだら	1張	尾道市東久保町	昭62.3.30	絹本着色、軸装	縦161cm、横128.5cm	鎌倉時代中期(13世紀)の作。方形の三区画に分けられ、中央に不動明王、周囲に四大天王や四天女などを描いている。 仁王経曼荼羅とは、国家人民の安穏を目的とする「仁王経法」という修法の本尊である。息災、増益、敬愛、護法(まもり)の四種の修法をたたく。 この図は息災法用で、山口県神上寺に伝わる図の原本を写したと考えられている。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色仏涅槃図	けんぼんちやくしやくぶつねはんず	1幅	庄原市東城町川東	平1.3.20	絹本着色、軸装	縦163.0cm、横167.4cm	安土桃山時代の天正6年(1578)、石州佐波郷(島根県邑智郡邑智町)の大龍禅寺住持が武州(武蔵、東京都・埼玉県一帯)の圓工益園(いづは)という者に描かせた涅槃図。 観音の表現は、肉身は金泥(きんでい)、肉身線は赤、衣文(きん)は黒、着衣も金泥。金具表現の金泥は盛上彩色(もりあげざいしき)が見られる。その他、群青、緑青、丹、胡粉(ごふん)のほか多様な色彩が見られる。保存もよく、上記のように制作年代及び由来も知られ、多くの顔の表情は類型的だが、大画面いばいに丹念に描かれている。 千手寺(せんじゆじ)は、寺伝によると天平年間(729～766)開基の寺といわれ、永祿年間(1558～1570)に巨見園邑智郡佐波郷の領主であった佐波広忠が毛利氏に譲りなつて奴可郡に知行を与えられ、東城に常住し、菩提寺としたと伝えられる。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色五大明王像	けんぼんちやくしやくごだいみょうおうぞう	3幅	庄原市東城町川西	平1.3.20	絹本着色、軸装	不動明王／縦152.4cm、横84.2cm 金剛・降三世／縦137.9cm、横95.1cm 大威・軍荼利／縦138.0cm、横95.3cm	五大明王像の五大明王とは、五大尊とも称し、彫刻絵画にあらわれ、密教修法(しゅほう)の本尊として信仰された。 中央の不動明王は、遊戯羅焰焰(かるえんこう)を負い坐している。注目すべきは大威徳明王で、通形はうづまる水牛の背に背坐する姿であるが、ここでは疾走する水牛の上立つ形式をとる。各尊とも墨線のデッサンは優れている。衣紋線には肥理のある墨線がひかれている。胸飾(うでこう)など金具の表現には胡粉下地の金泥(きんでい)、いわゆる盛上彩色を施している。 年代はおよそ鎌倉時代末期から南北朝時代ころ、14世紀前半とみられ、作風も優れている。 法恩寺の由来は明かでないが、平安時代(794～1191)の開基と伝えられている。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色観音三十三身像	けんぼんちやくしやくかんのんさんじゅうさんしんぞう	4幅	三次市吉舎町吉舎	平1.3.20	絹本着色、軸装	縦119.0cm、横61.0cm	室町時代(1333～1572)の作と推定され、応永31年(1424)出雲国仁多郡阿井郷(島根県仁多郡仁田町)の月溪良運が寄進したと大慈寺開山宗綱禪師の「宗綱語録」に伝えられることから、ほぼその頃とみられる。 『法華経』の観世音菩薩普門品第二十五によれば、観音は三十三身に变化(へんけ)して法を説くということが見える。大慈寺の4幅は、その三十三身像を表現したもので、3幅には各8体、1幅に9体が描かれている。その描写は一筆ずつ丁寧に描かれ、彩色は金泥(きんでい)の盛上彩色を施しており、その他、丹、朱、群青、緑青、靑、赤、黄、その他多様な色を用いている。尊形部分の後世に修装したと思われる。 大慈寺は禪宗寺院で、三原市・佛通寺を本山とする仏通一六派の一である。中世、和智氏の崇敬を受けていた。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色当麻曼荼羅図	けんぼんちやくしやくたいまんだら	1幅	庄原市東城町東城	平2.12.25	絹本着色、軸装	縦148.3cm、横153.6cm	描法や色調の点から鎌倉時代(1192～1332)の作と推定される。浄土宗西山深草派本山の誓願寺が江戸時代の元和9年(1623)に入手し、宝暦7年(1757)西方寺の再建落成に伴い、誓願寺から寄贈されたと伝えられる。 絹地は縦方向四幅の縫ぎ合わせである。図相は通例どおり中央に阿弥陀、観音、勢至(せいし)の三尊、群青、その他虚空、宝珠、宝樹、宝池などいわゆる極楽浄土の景観が表わされており、左右及び下辺の端はそれぞれ四圍縁取りが施されている。西方寺の誓願寺蔵図は、後世の中期頃の仏身、蓮台、頭光、身光部に補彩が加えられている。全体的に見てあたかも彩色のある色紙で、菩薩像の目鼻立もはっきりし、かつふくらした表情をしているなど、美術的に見るべきところは多い。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(絵画)	紙本着色仏涅槃図	しほんちやくしよくぶつねはんず	1幅	三原市本郷町南方 (福山市西町二丁目 広島県立歴史博物館寄託)	平2.12.25	紙本着色、軸装	縦200.0cm、横190.0cm	南北朝時代(1333～1392)の作。当初、墨の線だけで描かれていたが、至徳4年(1387)に彩色されたことが軸木銘から分かる。9段に62～64枚の紙を貼り重ねて描かれているが、貼り重ねたときに下に下る側にも墨の輪郭線があり、画の下方から順に描いては重ねていったものと推測される。軸木に墨書銘があり、江戸時代後期までの修復の経過を知ることができる。 仏涅槃図は釈迦の臨終の景観を描く仏画である。沙羅双樹(さらそうじゆ)の下に横たわる釈迦を中心に、その死を悲しむ人や動物の姿が描かれている。紙本の涅槃図は珍しい。 美音寺は、沼田荘開発領主・沼田氏の菩提寺として、平安時代(794～1191)に開かれたと言われる。鎌倉時代(1192～1332)、小早川氏が沼田荘地頭となると、小早川氏の菩提寺となった。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色親鸞上人絵伝 附 溜塗絹画 1口 包紙 4枚	けんぽんちやくしよくしんらんしやうにんえでん	4幅	呉市川尻町川尻	平3.4.22	絹本着色、軸装	縦135.0cm、横77.5cm	浄土真宗を開いた親鸞上人にまつわる縁起説話を描いたもので、寛文3年(1663)東本願寺から光明寺へ送られたものである。細部にわたって非常に緻密に描かれ、彩色顔料の質も高く、華麗な仕上げとなっており、保存がきわめて良好である。 大谷宗承の画像では古いものであり、また作者の京都の町絵師や表具師の名前も墨書によって知られるなど、貴重なものである。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色釈迦十六善神像	けんぽんちやくしよくしやくしゃかじゆうろくぜんしんぞう	1幅	府中市栗柄町	平6.10.31		縦210.0cm、横81.5cm	釈迦十六善神像は、「大般若経」を転読する大般若会の時の本尊として懸用されたものである。 この画像の時代的特徴は、釈迦の肉髻珠(にっけいしゆ)が低く扇形になり、衣の先端が尖って台座にかかっている。また全身の線画が写実的で、その死を悲しむ人や動物の姿が描かれている。紙本の涅槃図は珍しい。 南北朝時代末縁から室町時代初期(14世紀)の作と考えられる。 この画像にはセットになる大般若経600巻が現存しており、全国的にも稀な例であることから、歴史的意義と共に本県において貴重な仏画である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色釈迦八相図	けんぽんちやくしよくしやくしゃかほっすうず	8幅	尾道市西土堂町	平8.3.18	絹本着色、 三幅一鋪 第一幅「託胎」、第二幅「降誕」、第三幅「試衣」、第四幅「出家」、第五幅「半度文」、第六幅「降魔」、第七幅「転法輪」、第八幅「涅槃」	第一幅/縦114.0cm、横119.5cm 第二幅/縦112.1cm、横120.1cm 第三幅/縦111.8cm、横119.4cm 第四幅/縦113.6cm、横119.0cm 第五幅/縦113.5cm、横120.4cm 第六幅/縦112.6cm、横119.1cm 第七幅/縦113.1cm、横119.4cm 第八幅/縦112.2cm、横119.9cm	持光寺の八相図には、第一幅から順に「託胎(たくたい)」「降誕(こうたん)」「試衣(しせい)」「出家(しゅつげ)」「半度文(はんどうぶん)」「降魔(こうま)」「転法輪(てんぽりふん)」「涅槃(ねはん)」の場面が描かれており、各幅に数字順ずつ、30余りの事項が描かれている。 この八相図は、微妙な筆(ぼ)かきによって立体感を表し、繊細な色使いが施され、わが国中世の絵画(大和絵)に特有の無い所から見下ろす空間法が用いられている。わが国に残る大画面形式の釈迦八相図は、これを含めて6例しかなく、中世に描かれた八相図八幅本の中で、完存している唯一の事例である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色伝足利尊氏像	けんぽんちやくしよくでんあしかがたかしょう	1幅	尾道市東久保町	平28.3.28	絹本着色、一幅一鋪、軸装	縦107.0cm、横56.7cm	画面中央部に、束帯姿で高麗冠(こうらいべり)の上げ髪に坐す人物像を描く。人物の容顔は程やかな印象に整えられており、その描写には似絵的な特徴が見られる。着している袍(ほう)には足利将軍家も家紋に用いた五七桐(ごしちのきり)が一面に散らされている。 本画像は、足利尊氏と深い関係があった浄土寺に尊氏像として伝来した肖像画である。面装や花押、幸納文書などはなく、像主は未詳であるが、足利将軍家との関わりがうかがわれる図様など高い技量をに蓄けた中央絵師の手による制作と見られる出来映は、広島県内の中世に遺る数少ない武人肖像画の中でも大変貴重である。		
県	重要文化財(絵画)	絹本着色仏涅槃図	けんぽんちやくしよくぶつねはんず	1幅	尾道市西土堂町	平28.10.27	絹本着色、六幅一鋪、軸装	本紙縦202.9m、横154.3cm	仏涅槃図は釈迦の臨終の景観を描く仏画である。持光寺に伝わるこの涅槃図は、沙羅(さら)双樹(そうじゆ)の下、宝(ほう)台(たい)の上に横たわる釈迦を中心に、それを取り巻く巻衆(まいしゆ)や動物が卓越した筆致・画技によって描かれている。 本図は、旧裏打ち紙の銘文により、弘安7年(1284)に面師(えし)法橋(ほつきょう)若狭(わかさ)によって描かれ、江戸時代中期までに3度の修理が行われたと伝わる。後補画所が多いものの、本図の主要部である釈迦と周囲の巻衆の表現は制作当初の状態をとどめている。 制作年代が鎌倉時代に遡る涅槃図の遺例が少ない中で、本図は制作優秀であるとともに、度重なる修理を経ながら大切に使用され、受け継がれてきた歴史的価値を有すことから、貴重なものである。		
県	重要文化財(絵画)	含輝院障壁画 附 納め箱	がんきいんしやうへきが つけたり おさめばこ	29幅 8枚 (納め箱 1合)	三原市高坂町 (福山市西町2-4-1 広島県立歴史博物館寄託)	令7.1.9	障壁画:紙本墨画・紙本着色 掛幅装 29幅 納め箱:木造 被せ蓋	障壁画: 縦 158.0～175.0 cm、横 87.0～131.0 cm 納め箱: 縦 195.5cm、横 143.5cm、高さ 13.0cm	佛通寺含輝院(三原市)の庫裡(くり)・客殿は、小早川隆景により慶長元年～2年(1596～97)にかけて修築され、本絵画のほとんどがその修築の際に納められた複製と考えられる。寺伝によると「雪舟筆」とされ、現在は掛幅装 29 幅及びマツリ8枚となっている。文化 11 年(1814)に広島藩主・浅野齊賢(なりかた)により複製された本絵画の納め箱の蓋裏には、複製を良好に保存するため柵(さし)が刺(さ)して裏打ちを施したことや、箱の扉裏面なども記されているが、本絵画の伝来状況が窺える。本絵画は、これまでの調査研究により、作風や伝来状況などから雲谷(うんこく)の作品とみなされている。代々毛利氏の御用絵師を務めた雲谷派の祖である等閑は、雪舟の面風を継承し、室町時代と近世をつなぐ水墨画の名手とされる。本絵画は、筆触の柔らかさや、淡く金泥をはいした幽遠な空間演出などに優れた面技が認められるとともに、室町時代の古様な 水墨山水図の様式や、等閑が学んだ狩野派の要素も見られ、等閑の初期作を示す作品と評価されている。以上より、本絵画は、製作優秀であることに加え、雲谷等閑の初期作として絵画史研究 上の基準作となり得ること、地方に残る 16 世紀末に遡る障壁画として、一連の作品がほぼ 復元可能な形で伝わる貴重な作例であることから、本県の文化史及び絵画史上、特に重要である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造四天王立像	もくそうてんのうりゅうぞう	4躯	三原市本郷町南方	昭28.6.23	寄木造、玉眼	像高171cm	東禅寺は、旧名墨沼(ひきぬ)寺といひ、小早川氏の氏寺として相当の大きであったが、雷火によって焼失し、現在は一室を残すのみとなった。 四天王像は往時の隆盛を示しに足る力強い傑作で、各々玉眼入り、多聞天(たもんてん)の首の柄と玉眼の押入木の墨書銘により、鎌倉時代の元徳元年(1306)6月17日に、源信成が往生極楽を願って造像したことが知られる。近くにある弁海神社旧蔵文書により、源信成は鎌倉時代末期(14世紀前半)に沼田庄柴羽(なしば)郷弁海名の名主であったことが知られる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造大日如来座像	もくそうだいにちらいざぞう	1座	世羅郡世羅町	昭28.6.23	寄木造、玉眼入り	像高66cm、腰張57cm、台座高さ88cm、光背高さ103cm	玉眼入り、漆箔のこの仏像は金剛界の大日如来で、もとは今高野山境内の現在塔の頭と呼ばれている丘陵に立てていた、多宝塔の本尊であったと伝えられる。胎内の頭の部分に「元亨三年(1323)八月十五日 高近承」といふ墨書銘があり、造立年が明確で、仏体だけでなく光背、台座にも当初のもので完存していることは極めて稀であり、このような例は、鎌倉時代(1192～1332)以前の仏像には非常に少ない。		関連施設:今高野山龍華寺収蔵庫 (0847-22-0840)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうざう	1躯	世羅郡世羅町西神崎	昭28.6.23	一木造	像高100cm	<p>観世音は大悲大慈の菩薩で、その功德により、千手、如意輪、馬頭などの観音に変化して人々の崇拝を受けたが、十一面観音もそのような変化観音の最初の菩薩で、十一種の威力を一身にあらわしたものとされる。</p> <p>この観音は化仏を欠失しているが、口脛や唇の紅などに当初の彩色を窺った平安時代(794～1191)の優れた作品である。小像ではあるが、木目を巧みに利用したこの菩薩は、かつて今高野山ゆかりの大神の遺跡かと思われる大御堂に安置され、地元の人々によって大切に保存されている。</p>		
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音座像	もくぞうじゅういちめんかんのんざざう	1躯	三原市小泉町	昭28.8.11	寄木造	像高61cm	<p>龍泉寺の本尊で、端麗な面相の平安時代(794～1191)の作。十一面観音としては珍しい坐像である。脇侍の多聞天・不動明王も広島県重要文化財である。</p> <p>龍泉寺は小早川氏一族の小泉氏の氏寺で、標高340mの山上にある。当初は真言宗であったが、現在は曹洞宗になっている。</p>		
県	重要文化財(彫刻)	木造多聞天立像	もくぞうたもんてんりゅうざう	1躯	三原市小泉町	昭28.8.11	一木造	像高84cm	<p>龍泉寺十一面観音の脇侍。顔かたちの引き締まった秀作で平安時代(794～1191)の作品である。一木造のため割れを防いでいる。</p>		
県	重要文化財(彫刻)	木造不動明王立像	もくぞうふどうみょうおうりゅうざう	1躯	三原市小泉町	昭28.8.11	一木造、背割りあり	像高86cm	<p>龍泉寺十一面観音の脇侍。長身で腰の張りが細く柔らかな感じのする平安時代(794～1191)の作。一木造のため割れを防いでいる。</p>		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来座像	もくぞうあみだにょらいざざう	1躯	世羅郡世羅町賀茂	昭29.9.29	寄木造	像高64cm、膝張54cm	<p>『芸藩通志』によると、江戸時代後期(18～19世紀前半)には善法寺は康寺になっており、相当以前から無住であったことが知られる。禅宗の寺で、かつては真言宗寺院であったと伝えられている。</p> <p>平安時代(794～1191)の作で、衣の襟が異常に高く、出雲地方によく見られる地方色がある。陰陽の文化交流を考える資料である。</p>		
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来立像残欠	もくぞうやくしにょらいざざうおよびざんけつ	1躯	世羅郡世羅町賀茂	昭29.9.29		現在の高さ70cm	<p>『芸藩通志』によると、江戸時代後期(18～19世紀前半)には善法寺は康寺になっており、相当以前から無住であったことが知られる。禅宗の寺で、かつては真言宗寺院であったと伝えられている。</p> <p>平安時代(794～1191)の作で、腰からは切り落とされて現存しない。この仏像は衣の襟が異常に高く、出雲地方によく見られる地方色がある。陰陽の文化交流を考える資料である。</p>		
県	重要文化財(彫刻)	木造多聞天立像	もくぞうたもんてんりゅうざう	1躯	福山市津之郷町津之郷	昭29.9.29	一木造	像高114cm	<p>平安時代初期(9世紀)の傑作である。康和光寺にあった四天王像のうちの一とされる。</p> <p>康和光寺は出土した瓦から推測して、奈良時代(710～793)の創建と思われる寺院である。周辺は和名類聚抄に載る津之郷の郷名を伝えることなどから、この地に有力な豪族が居住し、和光寺はその氏寺であったとも考えられる。</p> <p>※和名類聚抄(わみょうるいじゅうしやう)…平安時代の百科辞典</p>		
県	重要文化財(彫刻)	木造文殊菩薩座像	もくぞうもんじゅぼさつざざう	1躯	尾道市東久保町	昭29.9.29	寄木造、彩色	像高63cm	<p>背に頭光身光を食い、右手に宝剣、左手に経巻を持ち、獅子の背上の蓮華座に半跏(はんか)坐している。金剛を食い、日光耀々たる獅子は、文殊菩薩に比べて大ぶりに造られ、南北朝時代(1333～1392)の作とされる。なお本像を納める厨子の床板に、南都津波屋(つばい、橋井)仏所で造像され、永和4年(1378)7月4日に安置された旨の墨書銘が見られる。</p>		
県	重要文化財(彫刻)	木心乾漆日光菩薩立像	もくしんかんしつにっこうぼさつりゅうざう	1躯	府中市本山町	昭30.3.30	一木造	像高88cm	<p>弘仁4年(813)に創建された青目寺(しよもくじ)に現存する代表的仏像で、寛保3年(1743)に、山の中腹の現在地へ移されたという。平安時代(794～1191)以来の古仏像群の中でもひとときすぐれたこの像は、平安時代初期の作品と言われ、本尊の十一面観音の脇侍として伝存している。衣文の影りがやや深く見えるが、これは乾漆(かんしつ)の手法によるためと思われる。</p>		関連施設：青目寺収蔵庫(0847-45-4459)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木心乾漆月光菩薩立像	もくしんかんしつがっこうぼさつりゅうぞう	1彫	府中市本山町	昭30.3.30	一木造	像高88cm	弘仁4年(813)に創建された青目寺(しょうもくじ)に現存する代表的仏像で、寛保3年(1743)に、山の中腹の現在地へ移されたといふ。平安時代(794～1191)以来の古仏像群の中でもひとときわすれられたこの像は、平安時代初期の作品と言われ、本尊の十一面観音の脇侍として伝存してきている。衣文の彫りがやや深く見えるが、これは乾漆の手法によるためと思われる。		関連施設: 青目寺収蔵庫(0847-45-4459)
県	重要文化財(彫刻)	木造日光菩薩立像	もくぞうにっこうぼさつりゅうぞう	1彫	三原市小坂町善根寺薬師堂	昭30.3.30	一木造、背割りあり	像高166cm	善根寺仏像収蔵庫は、古仏像三十数体を所蔵する。これらはおそらく廃絶した大寺の遺物であろう。『芸海通志』によると「本徳山と称し、福村山城城主田坂右馬允義忠が、祈願所なりしといふ」とある。この像は木造月光菩薩像とともに、この薬師堂の本尊脇侍で、背割(せぐり)がある平安時代(794～1191)の作である。		関連施設: 善根寺収蔵庫(三原市教育委員会文化課文化財係 0848-64-9234、善根寺保存会会長 早川正樹 0848-66-2323)
県	重要文化財(彫刻)	木造月光菩薩立像	もくぞうがっこうぼさつりゅうぞう	1彫	三原市小坂町善根寺薬師堂	昭30.3.30	一木造、背割りあり	像高166cm	善根寺仏像収蔵庫は、古仏像三十数体を所蔵する。これらはおそらく廃絶した大寺の遺物であろう。『芸海通志』によると「本徳山と称し、福村山城城主田坂右馬允義忠が、祈願所なりしといふ」とある。本像は木造日光菩薩像とともに、この薬師堂の本尊脇侍で、背割り(せぐり)がある平安時代(794～1191)の作である。		関連施設: 善根寺収蔵庫(三原市教育委員会文化課文化財係 0848-64-9234、善根寺保存会会長 早川正樹 0848-66-2323)
県	重要文化財(彫刻)	木造吉祥天立像	もくぞうきつしょうてんりゅうぞう	1彫	三原市小坂町善根寺薬師堂	昭30.3.30	一木造	像高153cm	善根寺仏像収蔵庫にある古仏像群三十数体のうちのすぐれた仏像のひとつで、吉祥天は神像風の髪形をした吉祥な像であり、福徳を司る女神として広く崇敬されている。本像は、背割(せぐり)があり割削を防ぐ手立てを講じている。平安時代初期(9世紀)の作である。		関連施設: 善根寺収蔵庫(三原市教育委員会文化課文化財係 0848-64-9234、善根寺保存会会長 早川正樹 0848-66-2323)
県	重要文化財(彫刻)	木造天部立像	もくぞうてんぶりゅうぞう	1彫	三原市小坂町善根寺薬師堂	昭30.3.30	一木造、背割りあり	像高135cm	善根寺仏像収蔵庫にある古仏像群三十数体のうちのすぐれた仏像のひとつである。腐朽しており持ち物を欠失しているため像名を明確にできないが、平安時代初期(9世紀)の作である。		関連施設: 善根寺収蔵庫(三原市教育委員会文化課文化財係 0848-64-9234、善根寺保存会会長 早川正樹 0848-66-2323)
県	重要文化財(彫刻)	木造狛犬	もくぞうこまいぬ	1対	世羅郡世羅町伊尾	昭30.9.28	一木造、彩色	像高54cm	狛犬は、宮中や神社におかれた守護獣の像で、普通の獅子と一角をもつ獅子の姿に作られ、それぞれ阿吽(あうん)をあらわすのが一般的である。本像は、かつて大田庄桑原方左衛門が治めていた地域の、井原八幡神社の随神門にある。彩色の大部分は剥落し、美しい木目が表れているこの一対は、室町時代(1333～1572)の作品と思われる。		関連施設: 大田庄歴史館(0847-22-4646)
県	重要文化財(彫刻)	僧行賢関係遺品 石造不動明王立像 1彫 石造多聞天立像 1彫 石造地藏菩薩立像 1彫 石造供養碑 2基 石造水槽 1口	そうぎょうけんかんけいひん	6点	東広島市高屋町中島	昭31.3.30	石造	不動明王/像高51cm、高さ82cm 地藏菩薩像/像高51cm、高さ1m	鎌倉時代後期から南北朝時代(13世紀後半～14世紀)にかけて、僧行賢が発願して作ったといわれる石造物群。東広島市高屋町中島を中心に分布する。行賢については詳細不明である。慶長乗参跡にある石造不動明王は胎形光背(ふちがたこうはい)に彫刻彩色され、元禄2年(1322)の銘がある。その簡潔な作風や独自な形式から、行者系彫刻の先駆的なものとして注目される。共存する多聞天(たもんてん)も銘はないが同時の形と考えられる。ここから高品寺に運ばれた水槽(みずわね)は石製湯槽とも推測されており、縁上面(ふちじょうめん)に元享2年銘が刻まれている。中島西山の慶西福寿寺跡付近の供養碑(板碑)2基のうち1基には法華経贈品(ほけきょうゆげん)の一節がある。他の一基は正中2年(1325)銘がある僧入道の供養碑である。背後に立つ地藏菩薩(じざうぼさつ)像は石に彫刻され背面に暦応4年(南朝年号、1341)銘がある。		
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来座像	もくぞうやくしにらよらいざぞう	1彫	安芸郡府中町石井城	昭32.5	寄木造、彩色	像高86cm、膝張77cm	道隆寺は、平安時代(794～1191)に開創された安芸国府の古寺で、薬師如来はその本尊である。檜材で全体に素地木目があらわれ、容顔は端正で破綻の少ない佳作である。通肩(つうけん)にかけた衣がひどく薄く感ぜられ、その腹部衣文(えもん)にかすかな翻波(はんば)式をかかえる点は平安様式であるが、胸に建仁2年(1201)の建立銘をもっている。また、この像には肉髻、白毫の痕跡がないところから、地方作との説もあるが、平安様式の流れをむ本格的な作品であることは、各所の技法から十分うかがえる。 ※肉髻(にっけい)…仏の姿を表す三十二面相の一つで頭頂の髻(まげ)の形をした部分 ※白毫(びやくこう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあつて光明を放つとされる		関連施設: 道隆寺仏像収蔵庫(082-282-4636)
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来座像	もくぞうやくしにらよらいざぞう	1彫	三次市三良坂町仁賀	昭33.1.18	寄木造	像高55cm、膝張42cm	福善寺は応永30年(1423)の創建と伝える田利(たり)八幡神社の別当寺で、今は曹洞宗の寺であるが、もとは真言宗であった。 薬師如来はこの寺の本尊で、空髻は蟬髪(せみづつ)でなく、切込みであらわれ、肉髻、白毫の痕はなく、容顔は素地であるが、衣文、肌のに用いられた刀法や用材の使用法は本格的な技法を思わせるものがある。ここに背割(せぐり)を施して保存に留意し、面相は豊満のうちに威容をたたえた作風は平安時代末期(12世紀後半)の製作と思われる。 ※肉髻(にっけい)…仏の姿を表す三十二面相の一つで頭頂の髻(まげ)の形をした部分 ※白毫(びやくこう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあつて光明を放つとされる		

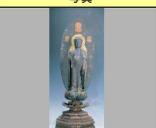
国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造神像 僧形神座像 1軀 女神座像 2軀	もくぞうしんぞう	3軀	三次市三良坂町田利	昭33.1.18	一木造、彩色	僧形神坐像 像高48cm、膝張39cm 女神坐像 像高45cm、膝張30cm 女神坐像 像高38cm、膝張28cm	室町時代の応永12年(1405)、和智元来によって寄進された神像。仏師はいずれも源中納言空心と記録されている。僧侶の姿をした八幡神像と女神2像があり、3軀とも彩色され作調は素朴である。3軀ともに底部に墨書銘がある。 田利(たりの)八幡神社は上下川沿いの低丘陵斜面にあり、鎌倉時代(1192～1332)に和智氏一族の広沢氏によって勧請されたと伝えられている。		
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざぞう	1軀	三次市海渡町	昭36.4.18	寄木造、彩色	像高88.2cm、膝張74.2cm	佛海寺の本尊で、黒漆塗でところどころに彩色の痕跡がある。台座に坐るこの像の胎内には墨書銘があり、それによると、天文12年(1543)8月、永真藏主が住持の時、広沢藤原朝臣豊実を大壇那として、京都烏丸の仏師雲漢の子孫という康正が作った旨を記している。 造立銘のある数少ない作品として仏像彫刻史上の資料となるものである。		
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのりゅうぞう	1軀	竹原市竹原町	昭37.3.29	寄木造、玉眼	像高85cm、光背高さ94cm	西方寺(さいほうじ)は小早川隆景の創建と伝えられ、京都の清水寺を模して造ったという昔明間に本像は安置されている。玉眼入りで、刀法は鋭く複雑な衣文の構成には宋朝風の影響が見られる。右足のほぞ「法印性国」と、左足のほぞに「四天王」の墨書銘があるが、紀年がないのは惜しまれる。室相華(ほっそうけ)唐草文様を透(すかし)彫にした金銅製舟形(ふなかた)光背も仏像と一具で、室町時代(1333～1572)の作と考えられる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿彌陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざぞう	1軀	尾道市東久保町	昭37.7.20	寄木造、漆箔	像高88cm、膝張72cm	浄土寺阿彌陀堂の本尊で、紙本墨書定証(じょうしやう)起請文(きしょうもん)(重要文化財)に記されている像と推定され、脇侍の観音菩薩・勢至(せいし)菩薩とともに内陣に安置されている。 寺伝では定朝作と伝えるが、定朝様を忠実に臨摹した仏師による平安時代末期(12世紀)の作と考えられる。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(彫刻)	木造仁王立像 像内に永仁貳年の銘あり	もくぞうにおうりゅうぞう	2軀	広島市東区牛田新町三丁目	昭38.4.27	檜材、寄木造、玉眼	像高282cm	不動院の楼門にある檜材、玉眼入りの像で、阿形像の像内背板の墨書銘によると、両像とも大願主は内妙房阿闍梨(あじり)快賢、仏師は性智房らで、永仁2年(1294)の作であることが伝えられている。更に阿形頭部耳後の刻目(はぎめ)に墨書があり、正保2年(1645)に芸州藩主が仏師善助をして、仁王像の両眼を補修したとも記している。鎌倉時代(1192～1332)の在銘の仁王像は全国でも数少なく、時代相をあらわす雄健な作品である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造二十八部衆立像	もくぞうにじゅうはちぶしゅうりゅうぞう	13軀	三原市大和町平坂	昭38.11.4	檜材、寄木造、玉眼、彩色	像高48～52cm	椿真寺(せいしんじ)は現在では小さな寺であるが、承久元年(1219)土肥実平・遠平父子が、源頼朝の娘であり遠平の妻であったと伝えられる妙仏尼の菩提のために建立したという小早川氏ゆかりの寺である。 二十八部衆像は檜製の玉眼入りで彩色されており、小型ながら木目を生かした写実的な入念の作で、28軀が先存していないのが惜しまれる。鎌倉時代(1192～1332)の作である。 なお現存するのは、密達金剛力士(みつたごんこうりきし)、摩羅菩薩王(まらびしやおう)、金毘羅王(こんびらおう)、漢善車王(まんぜんしゃおう)、帝釈天(たいしゃくてん)、毘樓博叉天王(びるはくしゃてんのう)、金色孔雀王(こんじくじやくおう)、散首大得(さんしゅたいしやく)、沙迦羅龍王(さかろうりゅうおう)、阿修羅王(あしゅらおう)、乾闥婆王(けんたつばおう)、迦楼羅王(かろうらう)、大梵天王(たいぼんてんのう)の13軀である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造地藏菩薩半跏像	もくぞうじぞうぼさつはんかぞう	1軀	東広島市河内町入野	昭38.11.4	寄木造、漆箔	像高84cm、膝張48cm	この像は竹林寺の子院のひとつである乾蔵坊の本尊であったものである。漆箔、檜材のすぐれた作で、右手に錘杖、左手に宝珠を持ち、右脚半跏(はんか)で左足をひしん家で台座に坐っている。この菩薩像はかつてひどく破損していたため、その胎内銘が知られているが、それによると建武5年(1338)の作という。		
県	重要文化財(彫刻)	木造聖観音立像	もくぞうしょうかんのりゅうぞう	1軀	府中市本山町	昭40.4.30	一木造	像高117cm	観音像の基本形ともいえるこの聖観音像は、青目寺(しょうもくじ)が亀ヶ岳の山頂で天台宗の大寺院として存在し、のちの御堂の本尊であったであろうと思われるが、現在は虫蝕が著しく、再彫が後補であるのは惜しまれる。県重要文化財の日光・月光両菩薩像と同じ平安時代初期(9世紀)の優秀な作品で、あるいは青目寺創建当初からの仏像かとも思われる。		関連施設: 青目寺収蔵庫 (0847-45-4459)
県	重要文化財(彫刻)	木造天部立像	もくぞうてんぶりゅうぞう	2軀	府中市本山町	昭40.4.30	一木造	像高118cm、117cm	この像については、四天王のうち持国天(じこくてん)及び多聞天(たもんてん)との伝承はあるが、各々の両腕を江戸時代(1603～1867)に修復しており、その名称を明らかにするだけの確証はない。ともに平安時代初期(9世紀)の作で、保存は良好である。平安時代から南北朝時代(9～14世紀)にかけて来た青目寺(しょうもくじ)の仏像として、見るに足る作品である。		関連施設: 青目寺収蔵庫 (0847-45-4459)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来坐像	もくぞうしゃかにらいぎぞう	1躯	三次市吉舎町吉舎	昭40.4.30	寄木造、玉眼、彩色	像高43cm、膝張35cm	善逝寺(ぜんせい)は、現在、臨濟宗仏通寺派の寺で、和智筑前守資実の開基と伝えられる。胎内の墨書から、応安2年(1369)藤原師実が同寺の本尊として寄進し、宝徳3年(1451)修理したことが明らかである。玉眼、彩色の保存もよく、地方仏教史上の貴重な資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにらいぎぞう	1躯	三次市吉舎町清綱	昭40.4.30	寄木造、漆箔	像高96cm、膝張75cm	浄土寺は、応永14年(1407)南天山3代城主和智信濃守師実開基の和智氏の菩提所で、もと臨濟宗のち浄土宗に改宗している。胎内の墨書から、同寺の本尊として七代和智筑前守豊弘が天文4年(1535)に寄進したことが明らかであり、かつ保存が良好である。地方仏教史上の貴重な資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにらいぎぞう	1躯	廿日市市宮島町魚の棚	昭42.5.8	寄木造、玉眼半間の相、台座・光背は後補	像高55cm、座張44cm	精脚鉄座(けつかふざ)して定印(じょういん)を結ぶ。衣は通肩(つうけん)に懸け、髻髪(らほつ)は右旋回(うしろまわり)に刻している。肉髻、白毫は水精をもつたま珠す。玉眼半間の相で、原の三道を墨かき表す。『芸州巖島図説』に「龍上山西方寺宝寿院、本尊阿弥陀、像座御長一尺止あるも、座侍の観音、袈至(せいし)は欠失、後補のなす形運座(れんざ)の上面に天文2年(1533)の修理銘がある。衣文は袈さを欠くが、繊細さの感をつげる彫法は顔部顔面のやわらかい表現とともに室町時代初期(14世紀)をあまり下らない頃のものとされる。伝来も正しく保存も良好である。 ※肉髻(にこけい)…仏の姿を表す三十二面相の一つで頭頂の髻(まつ)の形をした部分 ※白毫(びやくごう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間において光明を放つとされる		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来立像	もくぞうあみだにらいりやうぞう	1躯	三原市西町	昭42.5.8	寄木造、半眼の玉眼	像高77.5cm	衣は通肩(つうけん)に懸け、袈裟の理は金具をもって作る。衣文は流麗な写実風にしかも袈さを偲ばせ、いわゆる安阿弥流(あんあみりゆう)といわれる容姿を思わせる。袈裟は金泥にて繊細なワックスの文様と唐草文を施している。保存は良好で、左足のほぞに「巧匠口口口止墨痕を残している。台座は後補で、もと胎内にあったという「慶長七年六月一十七日」の墨書銘がある法名運記の矩形的料紙を添えているが、慶長7年(1602)に修理をし、これ納めたと思われる。写実的作風、面影の表現は鎌倉時代末期(14世紀前半)、あるいはそれをあまり下らない件と思われる。西園寺(尾道市)の釈迦如来をしのばせるものがある。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにらいぎぞう	1躯	福山市沼隈町上山南	昭44.2.28	寄木造、半眼木眼	像高67cm、膝張56cm	寺伝の古記によると、本尊は当地の興寺西大寺(西提寺とも書く)の本尊であったと伝えており、衣を通肩(つうけん)にかけ、木彫の眼を半眼に精脚鉄坐(けつかふざ)し、弥陀の定印(じょういん)を結び後補の横合運座に坐す。衣文の彫りは後補の塗りやや鈍るところもあるが、全体的によく袈さをとめている。袈裟の端に、当初の金泥で描いた文様の痕を残している。光背(ごうはい)は左上角部を欠失しているが、本体と同時代の作かと思われる。室町時代初期(14世紀)の作である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造四天王立像	もくぞうしてんのうりやうぞう	4躯	三原市小坂町普根寺薬師堂	昭45.5.14	一木造	像高/伝持国天立像 155cm、伝增長天立像 190cm、伝五百天立像 155cm、伝多聞天立像 166cm	四像とも檜材の一木造で、各像ともに腹部の天衣(てんぬ)に翻波(ほんば)式の彫法が見られる。天邪鬼(あまのじゃく)を踏んで立つ伝增長天(ぞうちやうてん)像の腹部及び背部には、寄木造の初期的段階を示すものと思われる手法が見られる。各像の台座はともに後補、佛堂の御堂に保存されていたため、欠損し易い部分は当初のものではなく補修されているものが多い。平安時代中期(10～11世紀)の作である。		関連施設: 普根寺収蔵庫 (三原市教育委員会文化課 文化財係 0848-64-9234、普根寺保存会会長 早川正樹 0848-66-2323)
県	重要文化財(彫刻)	木造兜跋毘沙門天立像	もくぞうたつびしやもんでんりやうぞう	1躯	三原市小坂町普根寺薬師堂	昭45.5.14	一木造	像高170cm(台座を含む)	兜跋毘沙門天については、唐の玄宗皇帝の時代(8世紀前半)、安西城が敵軍に包囲された時、城の樓門に兜跋毘沙門天が出現して敵を払い去ったという伝承があり、そのため都城の樓門に置くならわしがあつたためその作例は少なく、県内にはほとんどない。 本像は台座まで一木で形成して、腹部の天衣(てんぬ)に翻波(ほんば)式の彫法が見られる平安時代前半(9～10世紀)の作品と見られるが、両肩から手先まで、持物など後補の部分が多く、顔面を形成しなわしているのは惜しまれる。		関連施設: 普根寺収蔵庫 (三原市教育委員会文化課 文化財係 0848-64-9234、普根寺保存会会長 早川正樹 0848-66-2323)
県	重要文化財(彫刻)	木造男神坐像	もくぞうだんしんざぞう	1躯	三原市八幡町宮内	昭45.5.14	檜材、一木造	像高89cm、腹部の幅51cm	神像は、神仏習合思想の中で、仏像の影響を受けて作られ始めたものである。神像が製作された文献上最古例のものは天平宝字7年(763)であるが、現存するのは平安時代初期(9世紀)のものである。 本像も、千製の平安時代(794～1191)の作である。社伝では藤原百川(ももかわ)像という。髻に朱色を、口髭などは繊細な墨線をはば当初のまま残している。両手先及び膝、それに冠の前面を欠失しているのは惜しまれる。		関連施設: 御調八幡宮宝物収蔵庫 (0848-65-8652)
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにらいぎぞう	1躯	広島市安佐北区深川四丁目	昭46.4.30	寄木造	総丈270cm、膝張237cm、肩張145cm、顔面長93cm、顔面横52cm、右手幅29cm	室町時代中期(15世紀)の作である。肩より腹にかけ、肩衣にはかすかな翻波(ほんば)式の彫法の痕が見え、体内には寄木(よせぎ)を支える組み木(うがひ)がある。寄木を継ぐには、要所約12cmの鉄製ブレイクでとめている。また、彫木の表面には荒目の麻布をはり、その上に黒漆を塗り、そして金箔をという本格的な手法がうかがわれ、更に差こみになっている左手首の柄には、時代を語る手斧(ちやうな)の彫り痕が残っている。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造仏殿椽厨子	もくそうぶつでんようし	1基	尾道市向島町	昭46.4.30		桁行26cm、梁間17cm、棟高(基礎とも)73cm、木造漆塗	本品は、工芸品であるとともに、和様を一部に交えた禅宗様の室町時代(1333～1572)の仏殿建築を彷彿しており、多少の欠損と塗りの剥落はあるが、小さな作品であるにもかかわらず、細部に究巧な時代の特色を示しており、この種のものとしては珍らしい秀逸な作品である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくそうあみだにょらいざう	1躯	福山市西町二丁目	昭47.4.24		寄木造 像高87cm、膝張47cm	平安時代後期(12世紀)の作と見られる傑作で、寄木造である。顔面及び胸部を金色に塗っているが、これは後補と思われる。左肩と右腰部の寄木は一部欠損しているが、腰部の辺の衣文には翻波(ほんば)式の手法が見られる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造地藏菩薩立像	もくそうじざうぼさつりゅうざう	1躯	福山市西町一丁目	昭47.4.24		寄木造 像高60.5cm	室町時代中期(15世紀)の作と考えられる像。寄木造。玉眼入り。顔及び胸部に金泥を塗り法衣に金箔を貼った上に、繊細優美な宝相華(ほうそうけ)文様を描いている。衣は通肩(つうけん)にかけ、右手の緋紐(しゃくじょう)は当初のもの、左手の宝珠は後補と思われる。岩座の上の白形蓮座に立つ写実的な作風の秀作である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来坐像ならびに脇侍二菩薩の獅子座および白象座	もくそうしゃかにょらいざうならびにわきしにぼさつのはしごおよびはくそうざ	3躯	福山市北吉津町二丁目	昭47.4.24		寄木造、獅子座、白象座 本尊／像高86cm、膝張76cm 獅子座／高さ93.5cm、長さ101cm 白象座／高さ66cm、長さ132cm	南北朝時代の貞和3年(1347)頃の釈迦三尊像(脇侍は後補)、現在の福山城跡の丘陵(常興寺山)にあつたとされる神宗寺院・常興寺に安置されたが、江戸時代初期(17世紀)の福山城築城の時、現在地に移されたと言われる。寄木造。 釈迦三尊像が残る例は県内でも少なく、面臨僧の動物座がそっくりしているものは更に少ない。本尊は、衣の下に漆を塗り布を貼った顔が見られる。手の指間に弁網をあらわし、説法印を結び跏趺坐(けっかふざ)して、宝飾蓮華座に坐している。道後時、像内に金剛製五輪塔や経典箱が納入されていた。 胎藏寺は真言宗寺院で、もと神辺(かなんべ、深安郡神辺町)にあり福島丹波の祈願所であった。福島正則の改易後に福山城下へ移り、17世紀中頃、現在地に移ったといわれる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来立像	もくそうやくしにょらいりゅうざう	1躯	福山市朝町後地	昭48.12.18		寄木造、玉眼、白毫、螺髪は左螺旋、肉髻相 像高79.0cm	室町時代中期(15世紀)の作である。寄木造。医王寺の秘仏として厨子に納められていたため大欠保存がよく、台座等すべて当初のものである。着衣の形法は写実的で、特に胸部の衣文及び左右両手のひじから流れる法衣のものはよく室町時代中期の特色を表している。法衣は通肩(つうけん)にかけ、右手を上げて掌を前に、左手は下げて掌の上に薬壺を握る立像である。頭部螺髪(らっはつ)は螺髪(らせん)を施した緻密な作で肉髻を施しているが、耳朶(じだ)には孔を貫く。口唇にされた紅の顔料は当初のものと思われる。 ※肉髻(にっけい)…仏の姿を表す三十二面相の一つで頭頂の髻(まげ)の形をした部分		
県	重要文化財(彫刻)	木造地藏菩薩半跏像	もくそうじざうぼさつはんかざう	1躯	福山市金江町金見	昭48.12.18		寄木造、円頂玉眼、水晶製の白毫 像高55.0cm、膝張41.5cm	室町時代中期(15世紀)の作。寄木造。実感坊に伝わるものだが、像底部の六角柱に承応3年(1654)銘の墨書があり、もと京都・龍興寺にあつたことが知られる。 この像は蓮華台座に半跏(はんか)して坐り、法衣は通肩(つうけん)にまとい袈裟をかけ衣文は写実的である。胸の下部に禪帯(ぜんたい)をあらわしているのは珍しい。円頂であり白毫をほめ、眼は玉眼に造る。頭部に三道があり、耳朶(じだ)には孔を貫くなど時代的技法を残している。 ※白毫(びやくごう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあって光明を放つとされる		
県	重要文化財(彫刻)	木造毘沙門天立像	もくそうびしゃもんてんりゅうざう	1躯	福山市神村町字平	昭48.12.18		一木造、獅子岩座 像高66.5cm	平安時代(794～1191)の作。一木造。背(かぶと)を帯、後補の鬼座に立つ天部の姿に彫成し、腹部には古式の獅嚙(しかみ)をあらわす。腰から半円形に垂れる腰飾は磨滅度はひどいが、翻波(ほんば)式の形法を用いていることが明らかに示している。更に背中の肩履垂(かぶとむら)も猫か時代の特徴をよく表したものである。なお、材質の木目を巧みに利用した秀作ではあるが、円光背・打抜銅製宝冠(うちぬきどうせいほうかん)・持物及び腰部左右に垂れる懸(ひれ)は後補である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造観音菩薩立像及び胎内納入品 木造十一面観音立像1躯、木造不動明王立像1躯、小骨片1片、印仏1,840枚	もくそうかんのんぼさつりゅうざうおよびたないのうごうひん	1躯	呉市安浦町内海字寺迫	昭50.4.8		一木造、背割りあり 観音菩薩像高107cm、十一面観音像高5.5cm、不動明王像高14cm、印仏縦15cm、横8cm	観音像の衣文の表現の刀法は概して速く、背部の衣文を影線で表す手法が見られ、前部の衣文には微妙に翻波(ほんば)式の刀法が見える。この像には背割り(せり)があり、胎内には印仏した紙葉をこよりで束ねて3段に安置している。 印仏紙は文書を利用したもので、正和4年(1315)や「延慶」、「元応」など鎌倉時代末期(14世紀前半)の年号が見え、観音立像も同時代の製作であろう。		
県	重要文化財(彫刻)	磨崖和雲石地藏	まがいわれいしじざう	1躯	三原市豊浦町向田浦字地藏窟	昭50.4.8		磨崖式半肉彫り 石の高さ2.8m、厚さ4m、幅5m、坐像の高さ96cm、膝張85cm	波打懸の花崗岩に彫刻された磨崖式半肉彫りの像で、頭部のうしろに円光背(えんこうはい)を浮き彫りにし、衣を通肩(つうけん)に胸に環塔(けっか)している。右手に緋紐(しゃくじょう)、左手に宝珠をのせている。像の左右には花瓶を浮き彫りにし刻銘があるが、潮と風雨にさらされて銘文は判読しにくくなっている。他の石壁に移動された銘文によると、「千時正安二庚子年九月日大願主敬位平朝臣茂盛、幹縁道俗都合七〇余人、仏師念心」とあり、造立の縁故を知りうる。なお、正安2年は西暦1300年にあたる。 ※環塔(ようらく)…珠玉をつづつた首飾り		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造地藏菩薩坐像	もくぞうじざうぼさつざう	1躯	尾道市御調町今田	昭50.9.19	寄木造、臼形二重蓮座	像高41cm、膝張34cm、光背の径29.1cm、台座の高さ23cm	円頂で眉間に白毫をあらわし、半眼に開いた眼は木彫で、首には三連がある。連扇(つうけん)にかけた法衣及び身帯を穿き、衣には菩薩や定数を描き、その彫法は写実的で流麗である。胸には透彫(すかしぼり)金具の装飾をかけたいている。右掌には当初の攝杖(しゃくじょう)をもつ。左掌には宝珠をのせていたと思われるが今は欠失している。台座、光背(こうはい)ともに当初のもので、室町時代(1333～1572)の作である。 ※白毫(びやくこう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあって光明を放つとされる。 ※環珞(ようらく)…珠玉をつつた首飾り		
県	重要文化財(彫刻)	木造持国天立像	もくぞうじこくてんりゅうざう	1躯	尾道市御調町下山田	昭50.9.19	寄木造(頭部・胴体は一木形成)	高さ40.5cm	寄木造ではあるが、頭部と胴体は一木形成にした小像である。髪を着け右手を肩の上まで上げて鉢(ほこ)を持ち、左手は腰に掛けている。肩裂(かたまれ)及び帯布を折げ、腰の両側から脛(ひれ)まぬを垂らしてあり、もた彩色されていたと思われる痕跡があるが、今はほとんど剥落している。衣文の彫りは深く立体感に富んだ季作で、顔部に彫立(またえだ)を造り、頭髪を兼ねて五眼をはめ、口を強く締めた気力にあふれる相の像である。室町時代(1333～1572)の作。		
県	重要文化財(彫刻)	木造日蓮上人坐像	もくぞうにちれんしょうにんざう	1躯	三次市向江田町(三次市小田幸町 広島県立歴史民俗資料館寄託)	昭53.1.31	寄木造、玉眼、裳懸座式台座	像高13.5cm、像幅14.7cm、台座ノ高さ4cm、横10.5cm、幅8.4cm	本像は玉眼入りの小品で、裳懸座(もかけざ)式台座と一体をなし、その下の礼盤座(らいばんざ)底部の板張に文明5年(1473)に真浄坊日伝が寄進したことを示す墨書があり、この木像の製作年代を推定できる。本像は、右手に巻(いやく)を持ち左掌は開いていて、経巻を持っていてと思われる。顔はすこぶる豪華彫りで堂々としており、保暦日蓮の面影を十分伝えている。 ※日蓮(1222～1282)…日蓮宗の開祖		関連施設: 広島県立歴史民俗資料館(0824-66-2881)
県	重要文化財(彫刻)	木造聖観音菩薩坐像	もくぞうしょうかんのんぼさつざう	1躯	竹原市吉名町	昭53.1.31	一木造	像高93.5cm、膝張72cm	この菩薩像の所在する場所を観音谷と称しており、『芸藩通志』によると古くは大寺であった慶長福寿寺跡の観音堂に安置されている。法衣を通肩(つうけん)にかけ袖助跏坐(けつかざ)の姿勢のこの菩薩像は、頭部及び胴体を一木で造り、膝張部のみを寄木している。宝髪を高く結い、そのはぎむには冠座の痕が見られるが、冠は欠失している。眼は木彫で、口紅・口籠ともに当初のま非残っている。法衣衣文の彫法は速く全体に薄着に見えるが、これは像の木地の上に布を張り付けた痕を残しており、その上に漆を塗る乾漆の手法によったためと思われる。現在も黒漆の上に置いた当初の金箔をよく残している。当初の姿をよく伝える平安時代後期(12世紀)の作である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造釈迦如来坐像	もくぞうしゃかにょらいざう	1躯	東広島市安芸津町上立花	昭53.1.31	寄木造、複合装飾蓮座、水煙透彫の舟形光背、玉眼	像高41cm、膝張32cm、光背ノ縦90.5cm、46.5cm、台座ノ高さ37.5cm	当初の漆まの光背(こうはい)を背に両手を定印(じょういん)に結び、これも当初のままの複合装飾蓮座に坐るこの仏像は、頭髪を細密な螺旋(らせん)状に表し、頭頂肉髻を小型で高した室町時代中期(15世紀)と思われる時代的特色をよく表している。白毫は透明で、眼は玉眼である。像は下地に黒漆を掛け、その上に金箔をおいた金色(一部後補)でその法衣の上に描かれた唐草文の痕も製作時代を知る手がかりとなる。舟形に作られた光背は、上部及び左右に都合3個の化仏(けぶつ)を彫し、化仏を中心に水煙の昇る状態を透彫(すかしぼり)で表した珍しい逸品であるが、左方上部の一部を欠失しているのは惜しい。 ※肉髻(にっけい)…仏の姿を表す三十二面相の一つで頭頂の髻(まげ)の形をした部分 ※白毫(びやくこう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあって光明を放つとされる		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざう	1躯	世羅郡世羅町田打	昭53.10.4	寄木造、漆箔	像高68cm、膝張66.5cm、光背の高さ139cm、幅102.5cm、台座の高さ47cm	頭部髻髪(らぼつ)を大型に造ったこの仏像は、衣文に翻波(ほんば)式の彫法をうかがえる部分を所々に残した、本格派仏師の作と思われる。像全体は表面に漆を塗り、その上に金箔をおいている。像体を倒して内部を見ると寄木の状態及び彫(かすがい)の使用がよく分かる。右手を肩にはめこむ技法を用いていることは、寄木造の一手法を知るうえで重要である。また、胎内の背の部分に承元4年(1210)の造立銘、膝部の裏に天文2年(1533)の修理銘があり、この仏像の造立年やその趣旨を知ることができ、貴重な資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来立像	もくぞうあみだにょらいりゅうざう	1躯	福山市内海町	昭54.3.26	寄木造、玉眼	像高83.5cm	木彫寄木造である。頭部胴部を一木をもってよく応用して、木目を左右均等に衣文にまで応用するなど、巧みな彫法を施している。台座、光背(こうはい)は後補と見られる。室町時代中期(15世紀)の作である。西音寺は眞言宗寺院である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしにょらいざう	1躯	府中市上下町上下	昭54.3.26	寄木造、開敷蓮座、円頭光背	像高149cm、膝張101cm、台座高さ19cm	木彫寄木造で、鎌倉時代後期(13世紀)作の半丈六仏である。顔面・胸部の金色、薄墨色(灰色)の法衣の彩色、頭部髻髪(らぼつ)と円光背(こうはい)の表面の青色は江戸時代(1600～1867)に彩色されたものと思われる。 ※半丈六仏(はんじょうろくぶつ)…いわゆる丈六仏(1寸6尺の略で立像は約4.8m、坐像は約2.4m)の半分の大きさの像。		
県	重要文化財(彫刻)	木造一鎮上人坐像	もくぞういちっしんしょうにんざう	1躯	尾道市東久保町	昭54.11.2	寄木造、乾漆、玉眼	像高80cm、膝張82cm	時宗の寺院である西園寺の開基と伝えられる六代遊行(ゆぎょう)上人一鎮の坐像である。この像は非常に写実味豊かで、頭部・顔面の筋骨や肉付きは巧みに表現されており、顔面・両手の皮膚色・唇の朱色等の彩色にすぐれている。像の仕上げは、木彫の上に麻布を貼り漆を塗布する方法を一度くり返し、像全体に穏やかさを漂わせる工夫がなされており、作者は不詳ながら、その確かな技術がうかがえる。南北朝時代(1333～1392)の作。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	金銅阿彌陀如来及び脇侍立像	こんどうあみだによらいわよりょうきょうじりゅうぞう	3軀	尾道市東土堂町	昭55.6.24		中尊阿彌陀如来立像/全長57cm、宝身48cm、台座9cm 脇侍観世音菩薩立像/全長39cm、宝身31cm、台座7.5cm 脇侍勢至菩薩立像/全長38cm、宝身31cm、台座7cm	鎌倉時代(1192~1332)以降、全国的にその造立信仰が流行した。信濃国長野の普光寺(ぜんこうじ)の本尊を真したと称されている「普光寺如来」の一作例である。本来あつたはずの一光三尊の板瓦光背(こうはい)を欠落しているのは惜しいが、室町時代(1333~1572)のつくられた造点である。中尊の頭巾も刀印であるはずである。東日本に多く(西日本に比較的少ない)と従来いわれてきた普光寺如来像の分布に、新しい一例を加えるものである。 光明寺10代住職融印が、文明元年(1469)普光寺本尊を写した本尊を、大永2年(1522)同じ融印が開創した塔頭南之坊に安置したものである。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿彌陀如来坐像	もくぞうあみだによらいざぞう	1軀	広島市安佐南区沼田町伴	昭56.11.6	ヒノキ材、一木造	高さ95cm、膝張75cm	ヒノキの一木造りの坐像だが、膝張り部は他の木材を合わせて縫(かすがい)止めている。法衣は道肩(つげん)にかけ両掌は膝上に弥陀の定印(じょういん)を結ぶ。白毫は木製品をはめ込んでいるが、後補と思われる。眼は彫眼になる。衣は薄し(かすがい)に翻波(ほんば)文を残す。像は重量削減とともに削れを防ぐため、内割(うちわり)が施されている。鎌倉時代前期(13世紀)の作である。 現在は、『芸海通志』の腕の項にも記載されている雲岸寺跡と伝えられる小堂宇にまつられている。 ※白毫(びやくこう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあって光を放つという		
県	重要文化財(彫刻)	木造仁王立像	もくぞうにおうりゅうぞう	2軀	福山市駅家町新山	昭57.2.23		阿形力士/像高190cm 力形力士/像高182.5cm	寛元3年(1245)、鎌倉時代の作。寄木造。阿形(あぎょう)力士、咩形(うんぎょう)力士の二軀(一対)からなる。作者は増長(しょうじょう)と記される。県内の指定七五像の中で最も大きなものである。 阿形力士は、頭部・胴体から左肩にかけて一木形成し、両腕はともに肩に縫(かすがい)止めてある。口を開いて歯を露し、眼は本彫に造る。右側髪垂れ、右足すねは寄木に造り縫(かすがい)にて止め、背割(せきわり)覆板は縫(かすがい)に固定している。右肘先、左手先を欠失、両足先は後補である。 咩形力士は頭部・胸部・脚部を一木形成し、脚部は肩に於いて寄木、背部及び腰部にかけて背割して板をはめ込み、縫(かすがい)に止めている。その一枚の三角形の板の面に造像が施されている。口を開き筋骨隆々たる忿怒(ふんぬ)の面を呈している。彫法技法は阿形力士とほとんど同形である。両足先、右手先などを欠失する。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿彌陀如来坐像	もくぞうあみだによらいざぞう	1軀	三次市吉舎町清綱	昭58.3.28	寄木造、装飾複合蓮座、頭円光背	像高51.5cm、膝張39.5cm	本像は、吉舎町南天山に城を築いた和智氏の3代目、和智実勝によって応永14年(1407)に創建された浄土宗の寺院である浄土寺に所蔵されている。像の仕上げ、着色はよ時代色をあらわしており、寄木の技法を知る好資料である。破損もなく、台座の型式も時代の特徴を具現している。また、室町時代末期(16世紀)の作である当寺の本尊像とあまり時代のへたたりを感じさせない作とみられ、保存も良好である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿彌陀如来坐像 附 体内仏、木造阿彌陀如来坐像 1軀	もくぞうあみだにひらいざぞう	1軀	三次市吉舎町敷地	昭58.3.28	寄木造、玉眼	像高43.5cm、膝張35.5cm 体内仏/像高18cm、膝張15cm	西光寺は中世にこの地方を支配した和智氏にゆかりのある寺で、この像も同寺に古くから伝えられている。眼は玉眼で顔面・胸部に製の金泥(きんいでい)を塗っている。彫法に翻波(ほんば)刀式法を残すなど古い形を残している。保存がよく全体的にラフな造つた像である。室町時代(1333~1572)の作である。 なお、体内仏は寄木造、像高18cm、膝張15cmの小像で、法衣の文様などから江戸時代(1603~1867)のものと考えられる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音菩薩立像	もくぞうじゅういちめんかんのんりゅうぞう	1軀	庄原市実留町寺上	昭59.11.19	一木造	像高179.0cm、頭頂より頭まで48.0cm、肩幅50.0cm	顔面が少々摩滅しているのが残念であるが、眼は半木の眼になり、当初の威厳をうかがうことができる。頭には三道を表わし、糸帯(じょうほく)は左肩より右脇にかけ天衣は両肩より下腹・膝前に2段にかけ、その形成には顕著な翻波(ほんば)文を彫出している。右手は垂れて著しく長く不自然に見えるが、この一種の不安定感が欠点とは感ぜられず、かえって仏像の彫法的な表情をよく表現している。左右両腕手頭には同形の額(くしろ)を彫作している。		
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしによらいざぞう	1軀	東広島市西条町吉行	昭60.3.14	一木造	像高130cm、膝張り100cm	平安時代後期(11~12世紀)の作。国分寺の薬師堂に安置される。一木造りのゆゆる丈六像と言われる巨像である。顔の長さ47cmにかなり大きく、螺髪(らぼう)は切り込み式に仕上げ、肉髻が見られる。額には白毫を嵌(はめ)め、目を木眼にする。耳は長大で耳朶は貫孔につる。唇は引き締まり、面相は親しみに見える。頭には三道を表わしている。平安時代末期の源平の戦い(1184~1185)の時に火災にあい、その後修理が行われたが、江戸時代の宝暦9年(1759)再び火災にあい、その痕を留めている。 ※肉髻(にくげ)…仏の姿を表す三十二面相の一つで頭頂の髻(まげ)の形をした部分 ※白毫(びやくこう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあって光を放つという		
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像	もくぞうやくしによらいざぞう	1軀	東広島市西条町寺家	昭60.3.14	寄木造	像高87cm、膝張68cm	長福寺に伝わる寄木造の仏像。膝張及び両腕削りの手法、漆塗り下地の布粘り手法などから室町時代初期(15世紀)の作と推定される。一部の法衣の彫刻は翻波(ほんば)文の彫法が認められる。なお、顔面や胸肌、手先などに彫消し金色を塗り、法衣の無文黒色仕上げはまさしく室町時代の仏にも表われる当代の彩色表現法である。また、髪際が下からず直線的になるのは当代の上期の作の特徴である。		関連施設・長福寺宝物収蔵庫(082-423-4143)
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来立像 附 木造日光・月光菩薩立像 2軀 木造十二神将立像 12軀	もくぞうやくしによらいりゅうぞう つけたり もくぞうにっこうかつこう ぼさつりゅうぞう もくぞうじゅうにしんしゅうりゅうぞう	1軀	呉市川尻町川尻	昭60.3.14	薬師如来像、日光・月光菩薩像、十二神将像/一木造	薬師如来像/像高67cm、肩幅21cm、台座高25cm、総高(光背含)90cm 日光・月光菩薩像/像高30cm、台座高13cm、肩幅9cm 十二神将像/像高29cm、台座高4cm(1体のみ7cm)、肩幅10cm	螺髪(らぼう)は切り込み式に仕上げ、眼は彫眼になる。法衣は道肩(つげん)に着け、顔面、胸肌、手先は彫消しの金色に塗る。右手は施無畏(せむい)印を結んで胸の背に上げ、左手は掌を上にして腹の高さに上げて、薬壺を手と同木で作り出す。光背(こうはい)は蓮弁形頭光のみ当初のものを残していると思われる。 本像は、顔面などの肌の彫消し金色仕上げ、法衣を穿実風に作りながらも彫刀の運びの硬直的なところなど、また眼の半眼開き、唇の小さく締まる形相は、室町時代中期頃(15世紀)の作と見られる。 木造日光・月光菩薩像は、彫刀の運び、衣文の湾曲の線、すなわち顔の直線など彫法技法は中尊薬師如来像と同じ技法で、中尊の脇侍として造立されたものである。 木造十二神将は、薬師如来の十二の大願に応じて現われた神、あるいは本尊の周囲を囲んで守護する神ともいわれる。彫法は中尊、脇侍によく似る。		

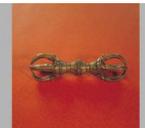
国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来立像	もくそうあみだにょらいりゅうどう	1軀	呉市川尻町川尻	昭60.3.14	寄木造	像高61cm、頭長13cm、面長8cm、面幅9cm、肩幅20cm、裾幅19cm、光背長90cm	鎌倉時代末期から室町時代(14～16世紀)の作。右手は胸に上げ、左手は垂れ、ともに弥陀の印を結ぶ。法衣は通肩(つうけん)にまとう。像の腹部に見る法衣の翻波(ほんば)様の彫法、袂(たもと)のなびきの写実風は、室町時代中期頃(15世紀)を思わす。この像については、顔光背(こうはい)にも彫出している。顔色以外は全面漆を下地に塗り、その上に金銅板を宝相華(ほうさうげ)唐草文に透彫(すかしほり)した舟形光背とし、室町時代の金工技法を推知する貴重な作品といえる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面千手観音坐像	もくそうじゅういちめんせんじゅかんのんざう	1軀	廿日市市原	昭60.12.2	一木造	像高207.0cm、膝高135.0cm	極楽寺本堂の本尊であり、平安時代中期(11世紀)の作と考えられる。一木造り。体の両側から出す千手は、ほとんどが小形のもので後補であり、大形のものも後補ではあるが、古い様態をよく留めている。左肩より法衣の下に着けている肩衣に翻波(ほんば)文の技法を出しているのは、この像の製作年代を知る一つの手がかりとなる。顔光の円光背(えんこうはい)及び台座は後補のものである。その面彫の雄渾な彫成、木目の利用等、県内には珍しい貴重な文化財である。 ※極楽寺…標高693mの極楽寺山山頂にある真言宗寺院。		
県	重要文化財(彫刻)	木板半肉彫虚空蔵菩薩像	もくばんはんにくにほりこくそうぼざう	1面	廿日市市原	昭60.12.2	木製板、半肉彫、漆塗の上に金箔、肉身が彩色	外縁/縦77.4cm、横45.0cm 内法/縦73.8cm、横39.1cm	安土桃山時代の文禄5年(1596)作で、極楽寺求聞持(くもんじ)堂の本尊である。方形で半肉彫成(はんにくちようせ)、黒漆塗りの枠に板をはめ、その板の中央は円形彫成で、その円は、開敷蓮華座上に置かれ、その蓮華座上に結跏(けっか)の虚空蔵菩薩像を半肉彫にしている。像は左手に花枝を持ち、右手を右膝の上に垂らし、法衣は通肩(つうけん)にかけ、宝冠を頂き、肉身は肌色を表わす。顔光・身光は、ともに円光背(こうはい)に彫出している。顔色以外は全面漆を下地に塗り、その上に金箔張りにした豪華なレリーフ像である。あたかも銅製鏡面に彫刻した鏡像を思わせる構造である。背面は黒漆塗りに仕上げ、大願主の小野寺法印祐宗や作者の肥後国(現在の熊本県)全知院伏魔をはじめ、宮島や廿日市の町人や女性と思われる人々の名が記録されている。極楽寺との因縁次第、僧俗等人間関係を知る資料を残している。安土桃山時代の仏像彫刻技法を知る貴重な資料であるとともに、地方の信仰状況を知る好資料でもあり、広島県内にはまことに珍しい資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造不動明王立像	もくそうふどうみょうおうりゅうどう	1軀	廿日市市廿日市	昭60.12.2	檜材、寄木造、岩座	像高81.5cm、台座高16.5cm、彫形部14.5cm	正覚院本尊。三鈷杆(さんこしょう)の彫形の鋭さ、衣文の刀法などより、室町時代中期(15世紀)を思わすもので、部分的には珍しい形を残す秀作である。頭髪は芬髻(しやけい)に結い、前面に花形の花冠を付けている。みづらは肩に垂らさず花弁しぼりに結んでいる。耳架(じか)に乳あり。口は結んで上下より一本ずつの牙を表わし、目に玉眼を入れた忿怒(ふんぬ)の面相である。額は三連(さんどう)につく。両側には花形を付けた鎖(くしろ)を巻き、同じ両手首、両足首にも付けている。右手は腰に上げて剣を持ち、左手は垂れて衆衆を持つ。肩衣は左肩より右脇に掛け、裳を着け、その裾の垂れがやや長きと思わせるのは製作時代の特徴でもある。この像は、岩座に立っている。岩座を載せている箱形台座の格狭間(こうざま)に、密教法具の三鈷杆を付している(右側は欠失している)のは注目する。像の造立にかかる年次の推定には次に参考になる資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造不動明王立像	もくそうふどうみょうおうりゅうどう	1軀	廿日市市原	昭60.12.2	一木造	像高68.0cm	県内には数少ない鎌倉彫刻である。頭髪は芬髻(しやけい)につくり、頭頂には蓮華を頂かせている。髪は左肩に垂らせ、耳は長大につく。目は木眼につくるが、明王の鋭さを表わす。口は面く閉じているが、牙が上下より一本ずつ現われて忿怒(ふんぬ)の相を示す。肩はいかり、力量感に充ち、右手は腰に上げ、剣を持つ手首を欠し、左手は下げて衆衆(しゅうじゅう)を持つ手首を欠している。なお、裳先(せき)の背面を人為的に切り取り、両足先も欠しているが、用材の巧妙さと肩衣、裳袴(もはかま)の彫力の鋭さは、本像の動的表現を巧みに具現している。その力強さは鎌倉彫刻の明王、力士像に見る特徴を十分に窺わすものを残している。		
県	重要文化財(彫刻)	木造天部立像	もくそうてんぶりゅうどう	1軀	廿日市市原	昭60.12.2	一木造	像高75.0cm	鎌倉時代(1192～1332)の像で、大きさと彫り方などから、不動明王(県重要文化財)と同じ所に安置していた可能性がある。目は木眼とする。体には長袖の衣を着け、その上から甲冑(かっこう)をまとった武装の姿をしている。背(かた)の彫刻には軍帯の彫り跡(しずかみ)を表わし、右手を腰に、袖を翻して動的姿勢をよく表現している。用材の巧みな使用法は、同寺の不動明王像に劣らぬものがある。頭部甲等の欠損及び左肩以下の欠失は残念である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造狛犬	もくそうこまいぬ	1対	廿日市市上平良	昭60.12.2	寄木造	阿形/像高34.5cm、身長40.0cm 吽形/像高34.0cm、身長41.0cm	室町時代中期(15世紀)の作品であり、速谷(はやたに)神社に伝わる。頭部は金色(箔置き)に塗り、眼は玉眼である。胸張り前足の踏ん張り力は力感に富む。阿形(あぎょう)は、頭髪を青白色に仕上げ、髪は黒漆にて表わし、髪のはねは渦巻き様を表わしている。吽形(うんぎょう)は、頭髪を緑色に表わし、髪のはねは垂らす。両者ともに力量感に富んだ彫成(ちようせい)技法の秀作で、初め木彫に仕上げ、次に木割れを防ぐ古紙を貼り、胡粉(こみん)を貼って膝を付け、着色にて仕上げの技法を知る上からも貴重な資料で、ほとんど完成の状態に残る。県内ではまれな作品である。速谷神社は古代以来の名社で、安芸国造との関連も指摘され、平安時代(794～1191)の記録には神階叙位の記事も見える。中世には安芸二宮に位置付けられ、人々の信仰を集めた。		関連施設: 速谷神社宝物館
県	重要文化財(彫刻)	木造大日如来坐像 金剛界 附台座	もくそうだいにちによらいざう こんこうかい つけたり だいざ	1軀	尾道市東久保町	昭62.12.21	寄木造	像高78.5cm、膝張60.0cm、台座高43.0cm	いわゆる智拳(ちまき)印を結ぶ結跏趺坐(けっかふざ)の金剛界大日如来である。本像は専らにれば、別件胎藏界大日如来坐像(県重要文化財)とともに浄土寺末寺の極楽寺の本尊であったと伝えられる。面部の彫り口は穏和で、また着衣の衣文の彫り口も透く、像座からも内割(うちくり)が施されており、内割りは大きいなど平安時代(794～1191)の特徴がよく出ている。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(彫刻)	木造大日如来坐像 胎藏界 附光背	もくそうだいにちによらいざう たいそうかい つけたり こうはい	1軀	尾道市東久保町	昭62.12.21	寄木造、舟形板光背	像高90.0cm、膝張68.0cm、台座高118.0cm	法界定印(ほうかいじょういん)を結ぶ結跏趺坐(けっかふざ)の胎藏界大日如来である。檜材寄木造である。頭頂には余り高くない宝髻(ほうはつ)があるが、これは別選り地彫部に別(は)を合むす。金剛界の像とは彫法や製作技法も異なり、別人の作とみられるが、胎・金二界の大日如来が遺存することは珍しく、平安時代(794～1191)の作といふことあつて重要な作例と考えられる。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造薬師如来坐像 附 木造天部像 2躯 木造神将像 2躯	もくぞうやくしにょらいざそう	1躯	広島市佐伯区五日市町石内	平1.11.20	寄木造	像高85.0cm、膝張68.0cm	平安時代末期、12世紀の作。石内地区の町内有志により護られた仏像である。 薬師如来像は枳材の寄木造、印相(いんそう)は右手の掌を前方に向けて挙げる施無畏印(せむいゐん)で、左手は左膝上において掌を前方へ向ける身願印(みがんいん)の上に薬塗を置いている。眉部は刻み螺髪(らふつ)で、眉間に水晶の白毫を入れ、丸顔で眼は影眼で伏眼となり、瞳孔は墨書き、耳は長大で耳突(じだ)に貫孔がある。口元は小さく閉じていて全体として温雅な面相である。顔には浅い三道(さんどう)を刻み、衣は造脣(つうけん)にかけ、結跏趺座(けつかたざ)する。本像のほか天部像2躯と十二神将像2躯が遺存しているが、ともに損傷は甚だしい。 ※白毫(びやくごう)…仏の姿を表す三十二面相の一つで仏の眉間にあつて光明を放つとされる		
県	重要文化財(彫刻)	木造狛犬	もくぞうこまいぬ	1対	山県郡北広島町大朝	平2.4.23	榎材	阿形ノ像高35.0cm、胸張17.5cm、産長24.0cm 吽形ノ像高35.5cm、胸張17.0cm、産長26.5cm	枝宮(えだのみや)八幡神社の木造狛犬は阿吽(あうん)の一对をなし、枝宮本殿内の左右に守護獣として奉安されていたもので、阿形と吽形(うんぎょう)はほぼ同寸である。ともに跏趺(そんきよ)の姿勢をとり、ケヤキの一本造りで、彩色されている。 本狛犬は、応安7年(1374)に千鶴丸と比丘尼(びけに)に某とが連名で寄進したものであることがわかる。銘文中の千鶴丸は吉川家文書にも見える在地の人物で、道品と文雅がよく一致している。富士神社の狛犬(県重要文化財)も、枝宮の狛犬とほぼ同寸法で、阿吽両像の足裏に墨書銘文が見られる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造狛犬	もくぞうこまいぬ	1対	山県郡北広島町大朝	平2.4.23	榎材	阿形ノ像高34.0cm、胸張17.0cm、産長25.5cm 吽形ノ像高35.5cm、胸張18.0cm、産長24.5cm	肢体が直立気味で、脚にも張りが見られ、吽形(うんぎょう)の髪が垂れ髪に表現される古様を引いている。また、吉川家文書に見える千鶴丸が応安7年(1374)とともに墨書で残されているなど、南北朝時代(1333~1392)の在銘の狛犬として、近隣の枝宮八幡の狛犬(県重要文化財)とならんで貴重である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来坐像	もくぞうあみだにょらいざそう	1躯	三次市島敷町(三次市小田幸町、広島県立歴史民俗資料館寄託)	平2.12.25	檜材、一木造(像身)、玉眼、上から蓮台・円形数童子・八花形反花座・八花形二重椗座から成る蓮華座	像高18.3cm	像容は定印を結び、袈衣を通脣(つうけん)に着し、玉眼を入れた坐像で、熊野神社の前身である王子権現に、天文4年(1535)三吉致高・同高僧が奉納した典型的な本地仏である。厚い衣の髣髴など、うわがが大きく重たい感じで、室町時代後期(16世紀)の特徴をよく示しており、同時代の基準作となつる貴重な仏像である。 ※袈衣(のうえ)…僧などが着る一枚布の衣 ※玉眼(ぎよくがん)…眼球部をくりぬいて内側から凸レンズ状の水晶をはめたもの ※定印(じょういん)…阿弥陀如来に特徴的な印相の中で悟りを表わす印相		関連施設：広島県立歴史民俗資料館(0824-66-2681)
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのりゅうどう	1躯	福山市鞆町後地宇古城跡	平3.4.22	寄木造、玉眼	像高145.7cm	室町時代(1333~1572)の作。前後左右に四材を刳(は)ぎ合わせた寄木造で、目には玉眼を嵌入(かんじゅう)し、肉身や着衣の表現において写実性に優れた点を認めることができるものである。目は微笑をあらわし、口は開いて上面四本をのぞかせており、「歯吹き観音」と称される。		
県	重要文化財(彫刻)	木造千手観音立像	もくぞうせんじゆかんのりゅうどう	1躯	尾道市東久保町	平3.12.12	寄木造、玉眼、金泥彩漆箔	像高139.0cm、裾張34.0cm	頭頂から足下、脇手、瓔珞金具、表面彩色等、細部まですべて当初のまま残っており、その保存状態はきわめて良好である。作風は、細部まで非常に丁寧な作りで、優れた技術をもつた仏師の作と思われる。光背(こうはい)、台座も同時代のものと思われる貴重な仏像である。鎌倉時代中期(13世紀中頃)の作である。 ※瓔珞(ようらく)…珠玉をつづつた首飾り		
県	重要文化財(彫刻)	木造真教上人坐像	もくぞうしんきょうしょうにんざそう	1躯	尾道市西久保町	平3.12.12	寄木造、玉眼、彩色	像高82.0cm、肩張48.0cm、膝張74.0cm、面長18.0cm、面幅16.0cm	時宗の開祖一遍上人の高弟「真教」の僧形坐像である。法衣は白衣の上に墨染めの衣を着し、袈裟を懸けた姿を写實的に彫り出している。一遍の死後、教団として実質的に組織化した真教上人の数少ない彫像であり、貴重なものである。 製作年代は鎌倉時代後期または南北朝時代(14世紀)と推定される。		
県	重要文化財(彫刻)	木造地藏菩薩坐像	もくぞうじぞうぼさつざそう	1躯	三次市吉舎町三玉	平5.2.25	寄木造	像高48cm	この地藏菩薩は、もともと中世にこの地方に南天山城を築き、勢力を持った和智氏の持仏(じぶつ)で、和智鎌善が毛利氏によって殺された際、城外へ持ち出され、町内の寺院を経た後、宝寿寺に伝えられた。本体は両脚を半跏坐(はんかざ)として、顔の表情も上品で洗練された表現で、生氣が感じられるものである。全体的に繊細な彫り上げに終始しており、秀麗な印象を受ける仏像である。保存状態も極めて良く、南北朝時代(1333~1392)の優美さを感じさせる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのりゅうどう	1躯	呉市倉橋町	平5.10.18	檜材、寄木造、埋色彫	像高134.0cm	本像は埋色を加えた檀像(だんざう)彫刻の特色である木目の美しさを示している。図像的には通常の十一面観音であるが、像の保存が全般的に良好なのが特色である。また、頭髪毛筋の丁寧な彫出、知的で秀麗な面相、宋風を加味した写實的な髣(ひた)の処理、正面側面に向つた肉体の把握感覚など、いずれも鎌倉時代(1192~1332)の標準的な様式を示している。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造宝冠阿弥陀仏坐像	もくぞうほうかんあみだぶつざう	1躯	三原市本郷町南方字良丸	平7.1.23	一木造、背割	像高110.0cm	この像は、顔の天冠台上に五面筒形の宝冠をかぶり、身に朱衣を通肩(つうけん)にまとい、両手の掌を膝前で重ねる印相を示し、結跏趺座(けっかふだ)する相になっている。基本構遣は、わずかに背割(せくご)を入れるのみの完全な一木造で、材は方材と推定される。様式的特色から平安時代前期(10世紀前半)の作と考えられ、備後・安芸地方の平安時代(794～1191)の地方信仰を考へて行く時に、重要な資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥如来坐像	もくぞうあみだにょらいざう	1躯	府中市元町	平7.9.21	割形造、漆地金泥彩、玉眼	像高71.7cm	本像は、割形(わりはぎ)造りで、顔・体とも前後に二材を合わせている。螺髪(らっぽ)は切付螺髪である。面貌は若く張りがあり、引き締まったやや脛長の肉身にまといかる袈衣(のうえ)は、胸前で動きがある処理がなされているなど、像の各部が見事な彫刻的均合を葆ら、前身に若々しい生氣あふれた勇健な表現となっている。全国的に見ても鎌倉時代前半期(13世紀)を代表する傑作である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造千手観音菩薩立像	もくぞうせんじゅかんのりゅうざう	1躯	安芸高田市吉田町吉田	平10.9.21	一木造、素地、一部彩色、檀像仕上	像高152.0cm	本像は四十二臂(ひ)像で一木造である。合掌手先及び脇手全ては後補になるなど、他にも後世の修理箇所が認められるが、独特の優麗な面相相模が印象的なもので、裳裾(もすそ)には翻波(ほんば)文が見られる。平安時代前期(10世紀)の製作とされる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造行道面 附 菩薩面頭部 1頭、宝冠残闕 2枚、幡竿付 電頭 1本、■ 1個、鼓 1個、鼓胴 1個、蓮華 1本	もくぞうぎょうどうめん	8面	三原市沼田東町納所	平15.4.21			鎌倉時代後半、14世紀頃の製作と推定されている面。仏教行事のひとつ「行道」において使用されていた。保存状態もよく、本県の歴史と文化を語るうえで貴重な資料である。菩薩面を演じる役者が冠する木造面頭部や、菩薩面に打ち付けられていた皮革製宝冠の残闕をはじめ、行道で用いられていた幡竿付電頭、鼗(ふりつつみ)、鼓、鼓胴(袋裏けいろ)、蓮華なども残されている。 ※行道 極楽世界の聖衆来迎を現世で演じてみせる仏教行事。「練供養(ねりくよう)」、「迎講(むかえこう)」又は「迎接会(きょうじょうえい)」とも呼ばれる。		
県	重要文化財(彫刻)	木造佛通禅師坐像	もくぞうぶつづぜんじざう	1躯	三原市高坂町許山	平16.2.26	ヒノキ材、寄木造、玉眼嵌入、彩色	総高112.8cm、坐高74.3cm、 膝張68.1cm、膝奥49.5cm	室町時代の応永32年(1425)に、京都の高辻富小路(たかつじとみこのじ)の仏師「大夫法眼」が制作した頂相彫刻(ちんぞうちようこく)、顔部に墨書がある。ヒノキの寄木造である。肉体把握や衣文表現は巧みで質感があり、生氣と力強さを感じさせる。彫刻史上の基準作例であるとともに、本県の歴史と文化を語るうえで重要な資料である。 現在は、木造大通禅師坐像とともに、佛通寺舎佛院開山堂(ぶつうじがんきんかいざんどう)に安置されている。 ※佛通禅師 即休契了(しつしゅうけりょう)の諡号。即休契了(1269～1351)は中国・元の禅僧で、佛通寺を開いた愚中周及(ぐちゅうしゅうきやう)の師であった。		
県	重要文化財(彫刻)	木造大通禅師坐像	もくぞうだいづぜんじざう	1躯	三原市高坂町許山	平16.2.26	寄木造、玉眼嵌入、彩色	総高113.0cm、坐高73.8cm、 膝張66.7cm、膝奥49.5cm	室町時代の15世紀中頃に製作されたと推定される頂相彫刻(ちんぞうちようこく)。現在は、木造佛通禅師坐像と並んで佛通寺舎佛院開山堂(がんきんかいざんどう)に安置されている。 寄木造である。木造佛通禅師坐像と比べ、衣文表現などにやや硬さがあり、木造佛通禅師坐像より後述の製作と考えられている。 本県の頂相彫刻を代表する作品のひとつである。 ※大通禅師 愚中周及(ぐちゅうしゅうきやう)の諡号(しごう)。愚中周及(1323～1409)は室町時代の禅僧で、中国に渡り佛通禅師の教えを受けた。帰国後、応永4年(1397)小早川春平の懇請を受けて佛通寺を開いた。		
県	重要文化財(彫刻)	木造十一面観音立像	もくぞうじゅういちめんかんのりゅうざう	1躯	廿日市市宮島町	平22.4.19	寄木造、玉眼嵌入、白毫水晶嵌入	像高:193.8cm、髪際高: 159.7cm 面張:16.1cm、面奥:22.5cm 頭上仏面 頂上阿弥陀仏面高:11.5cm その他仏面高:9.5cm前後 台座高:21.4cm	本像は、大聖院観音堂の本尊として、内陣(ないじん)須弥壇(しゆみだん)の上(ずし)内に安置されている。丸面の清楚な表情や豊潤な肉身には生氣があり、均整のとれたプロポーションや頭上仏面の面貌も的確に丁寧に仕上げられている一方、衣文(えもん)は全体的に形式化している。 本像は、元祿島社本地堂(ほんじどう)に祀られ、明治初年の神仏分離により大聖院に移されたことがわかると、伝来由緒の確かなものである。		
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥如来坐像	もくぞうあみだにょらいざう	1躯	尾道市西久保町	平28.10.27	檜材、寄木造、差し首、玉眼嵌入、白毫水晶(新補)嵌入、肉髻珠(後補)嵌入、着衣全体に鍍金・盛り上げ彩色	像高:130.9cm	常務寺本堂本尊である本像は、頭幹部の(ハラス)がよく整えられているとともに、流麗な衣文(えもん)が的確に形成され、着衣全体には精緻な文様が敷(き)り金(かね)や盛り上げ彩色による高度な技術で表現されており、これは当初の状態ではほぼ完全に残っている。 本像は、平成24年度の保存修理の際、足跡(あしあと)の銘文から、正中2年(1325)に仏師美作(みまさか)法橋(ほつしやう)宗暉(そうけい)又は「宗暉(そうけい)」により約3か月弱の期間で制作されたことや、50人以上の仏名の寄進者などが確認された。 本像は、数少ない時宗(じしゆ)寺院の遺構である本堂本尊として制作年次などが分かることに加えて、制作優秀であり、特に着衣全体の精緻な装飾が当初の状態ではほぼ完全に残っている事例がほとんどないことから、貴重である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造五劫思惟阿弥如来坐像	もくぞうごこうしがいあみだにょらいざう	1躯	尾道市西土堂町	平28.10.27	檜材か、寄木造、玉眼嵌入、白毫水晶嵌入、肉髻珠(後補)貼付	像高:112.0cm	五劫思惟阿弥如来像は、五劫という長い時間思惟にふけり、理髪をしなかったために長大な頭髪となったことを表す大きく膨らんだ頭部が特徴である。持光寺本堂本尊である本像は、風格のある装束の(ハラス)、ふくよかであるが目鼻立ちのすっきりとした面部の表現、整えられた衣文表現などに優れた造形感覚が認められる。 当寺の古記録によると、本像は元祿15年(1702)に仏師(ぶし)法橋(ほつしやう)安(あん)満(まん)いに、ついに造像されたことが記されている。 江戸時代以前の木造彫像の五劫思惟阿弥如来像は全国的にほとんど遺例がない中で、本像は彫技が的確であり、造形的に優れているだけでなく、制作年代や作者などの由緒が分かるものとして、貴重である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(彫刻)	木造阿弥陀如来及び両脇侍立像 附 観音菩薩像内納入品 十五枚 阿弥陀如来印仏 勢室菩薩像内納入品 十一枚 阿弥陀如来印仏 包紙添 十一枚 内一枚に弘安八年二月の記がある 阿弥陀如来像内納入品(追納) 一、台座光背寄蓮状 包紙添 一通 一、位牌	もくぞうあみだにらいおびりょうきょうじりゅうぞう	3軀	尾道市東久保町	令和元年(2019)10月21日	檜材、寄木造、金泥塗り、截金、玉眼嵌入	阿弥陀如来立像(中尊) 像高:98.0cm 髮際高:91.8cm 観音菩薩立像(左脇侍) 像高:66.3cm 髮際高:55.8cm 勢室菩薩立像(右脇侍) 像高:66.4cm 髮際高:55.7cm	本三尊像は、時宗寺院・西福寺の本堂本尊で、阿弥陀如来像を中尊として、前後の観音菩薩像と勢室(せいし)菩薩像を脇侍とする。来迎形の阿弥陀三尊像である。檜材、寄木造。阿弥陀如来像は、ふくよかな顔貌、矩形(けい)のがつりした体軀に緩やかな衣文線が施され、立体的で端正な造形を持つ。両脇侍像は、髪の高い細身の像容で、随所に細かな彫材を組み合わせて破綻のない微妙な姿態が生み出され、統一的な律動感がある。いずれも仏師の優れた造形感覚と高い技術を読み取ることができる。平成26・28年の保存修理の際、両脇侍像の像内から印仏が発見され、その中に弘安8年(1285)の年紀が確認された。納入品は堂像当初のもの見られ、本三尊像は同様に制作されたと考えられる。以上より、本三尊像は、制作優秀であるとともに、年代の明らかな来迎形阿弥陀三尊像の基準作に位置付けられるため、本県の彫刻史上特に重要な作品であると評価できる。また、印仏を始めとする納入品も、本三尊像の由緒・伝来を示す重要な資料である。		
県	重要文化財(彫刻)	木造弥勒菩薩坐像及び木造不動明王坐像・木造愛染明王坐像	もくぞうみろくぼさつざおうおよびもくぞうどうみょうおうざおう・もくぞうあいぜんみょうおうざおう	3軀	福山市草戸町	令和2年(2020)3月23日	寄木造、截金、盛り上げ彩色、玉眼嵌入	像高:弥勒菩薩 62.7cm、不動明王 28.8cm、愛染明王 34.4cm	本文化財は、南北朝時代(貞和4年(1348))創建の明王院五重塔(国宝、以下「五重塔」という。)初層に安置される。中央の弥勒菩薩像は、端正な慈悲相を表し、ゆとりとした構えに格調の高さを示す。着衣には截金(きりかた)や盛り上げ彩色による文様が施され、装飾的にまとめられる。不動明王像・愛染明王像は、忿怒(ふんぬ)の形相をよく表し、肉身や着衣には丹念に施された華麗な彩色・文様が残る。いずれも小像ながら、彫技や装飾が繊細で巧みであり、仏師の高い技術と優れた造形感覚が認められる。特に、各像の着衣に見られる彩色・文様は、五重塔内荘厳画にほぼ同様のものとして連和感がなく、五重塔の創建に近い時期の造像になると考えられる。この三像の組合せは、県内唯一の制作時期が中世に遡る事例である。以上のことから、本文化財は、制作優秀であるとともに、五重塔とも共通する制作当初の装飾が良好に残る。稀少な像種の組合せであることから、貴重な作品であると評価できる。		
県	重要文化財(工芸品)	銅鑪	どうろう	1口	東広島市西条町下三永	昭28.6.23	銅製	総高126cm、口径69cm	室町時代・寛正2年(1461)福成寺(ふくじょうじ)に奉納された銅鑪。現在の三原市を中心に活動した鑪物師(しもし)「三原鑪物師」の作品である。鑪身に作者名「宗吉」や奉納された寛正2年の年号などが刻まれている。三原鑪物師は中世の広島県地域を代表する鑪物製作者たちであり、鎌倉時代(1192～1332)以後、瀬戸内海中部地方各地で銅鑪などを製作した。福成寺は中世以来の古刹であり、中世の西条盆地を支配した周防内氏と深い関係を持っていた。		関連施設:福成寺宝物収蔵庫(082-426-0523、082-423-3486)
県	重要文化財(工芸品)	三鉢	さんこ	1個	世羅郡世羅町甲山	昭28.6.23	金銅製	長さ20cm	これは独鉢(どっこ)とともに密教の修法に用いられる法具の一つで、仏教では心中の煩悩をくゞき仏性の智光をあらわす意味で用いられる。二品とも真言宗の名刹高野山龍華寺に伝わるもので、独鉢は断面方形、鬼目(おにめ)はよく時代の特色を示す鎌倉時代(1192～1332)の作である。		毎年8月20日のみ公開 関連施設:今高野山龍華寺収蔵庫(0847-22-0840)
県	重要文化財(工芸品)	銅鑪	どうろう	1口	廿日市市宮島町	昭28.8.11		高さ109cm、口径57.6cm	仏教では、その宗教的雰囲気が高めるための多くの鳴物が使用されるが、それら梵音具(ぼんおんぐ)と言われるものの中で最大の梵鐘に属するもので、天正15年(1587)に豊田秀吉が、島津攻陥の際に持ち返って、飯島神社に寄進したものとされ、応永5年(1398)の銘がある。銘は「筑前州宗像郡那馬庄鎮守八所大明神社頭洪鐘也 応永5年2月16日 大工了案」と記されている。		
県	重要文化財(工芸品)	銅鑪	どうろう	1口	安芸高田市吉田町	昭28.8.11		高さ90cm、口径46cm。	この銅鑪の銘文によると、もとは高田郡甲田町甲立にあった石室寺に懸けられていたものといひ、銘文中「建武二年(1335)十月廿四日」と銘された年月日が刻まれている。鑪物師は河内国の名工丹治友重である。「国朝志下頭帳(こくしんしたしべちやう)」吉田村によると、甲立の穴戸氏が隣村にしていたものを当寺に寄進したと記しており、石室寺の荒廃後、一時穴戸氏の手に残っていたのであろう。		関連施設:安芸高田市吉田歴史民俗資料館(0826-42-0070)
県	重要文化財(工芸品)	独鉢	どっこ	1個	世羅郡世羅町甲山	昭28.8.11	金銅製	長さ21cm	三鉢(さんこ)とともに密教の修法に用いられる法具の一つで、仏教では心中の煩悩をくゞき仏性の智光をあらわす意味で用いられる。二品とも真言宗の名刹高野山龍華寺に伝わるもので、鉢部は断面方形、鬼目(おにめ)はよく時代の特色を示す鎌倉時代(1192～1332)の作である。		毎年8月20日のみ公開 関連施設:今高野山龍華寺収蔵庫(0847-22-0840)
県	重要文化財(工芸品)	金銅仏具 五種鈴5個、輪宝1個、羯磨4個、輪宝台1個、羯磨台4個	こんどうぶつぐ こんどうぶつぐ こんどうぶつぐ	15個	府中市元町	昭28.8.11		五種鈴(独鈴鈴)高さ21.2cm、径7.4cm (三鉢鈴)高さ19.8cm、径7.4cm (五鉢鈴)高さ19.0cm、径7.4cm (宝塔鈴)高さ22.3cm、径7.4cm (宝珠鈴)高さ19.5cm、径7.4cm 輪宝、径11.8cm、輪宝台、径12.5cm、羯磨、径11.5cm、羯磨台、径11cm、火舎、高さ8.4cm、径10.1cm、六羯、高さ3cm、径7.5cm	栄明寺は、弘法大師の開基と伝える真言宗の大寺で、この仏具は密教大壇の仏具だが、それが一括具揃っている室町時代(1333～1572)の作品として貴重である。仏具の内容は、五種鈴5口(独鉢鈴、どっこい)、三鉢鈴、五鉢鈴、宝塔鈴、宝珠鈴、輪宝(りんぼう)1口、輪宝台1口、羯磨(かつま)4口、羯磨台4口、火舎(かしや)1口、六羯(ろっき)6口である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしよう	1口	安芸高田市甲田町高田原	昭28.10.20		高さ99cm、口径50cm	銘文によると、永徳3年(1383)豊後国速見郡(大分県)吉祥寺の鐘として鑄造されたものである。更に追銘があり、それによると、毛利氏によって厳島神社で謀殺された和知親春の菩提を弔うため、天正7年(1579)厳島大願寺の円海上人が、善捨を集めた金と真春の腰刀を添えて買得し、佐伯郡玖波(大竹市)栢農院に寄進した旨を刻んでいる。その銅鐘がこの寺に伝わった経緯については不明である。		
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしよう	1口	三次市三次町	昭29.4.23		高さ87cm、口径50cm	永和2年(1376)に福永永良荘(兵庫県神崎郡市川町)の護聖寺のために鑄造されたもので、追銘によると長享元年(1476)周防大島三浦本庄(大島郡大島町)志取岸八幡宮の鐘となっており、大塚郡として大内政弘の名前が見える。更にその銅鐘が、どのような経緯を経て三勝寺に納まったかは不明である。		
県	重要文化財(工芸品)	銅製銅口	どうせいわにくち	1口	尾道市東久保町	昭29.9.29	銅製	直径37cm、重量15kg	銅口は、鉦鼓(しょうこ)を二つ合せた形に似て、神社仏閣の軒先に懸けてあり、前面に鉦(かね)の輪という布輪を垂らし、参詣人はこの輪を手に持ち、振って鼓面を打ち礼拝するもので、本品も浄土寺本堂(国宝)の正面に懸けられている。刻銘があり、貞和5年(1349)の作であることが分かる。「備後国尾道浦浄土寺観音堂也」貞和五年己丑卯月十八日大工阿部房綱		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(工芸品)	達磨大師位牌	だるまだしいはい	1基	福山市鞆町後地	昭30.1.31	木製、朱漆塗	高さ68cm	臨済宗法燈派の宗祖達磨大師の位牌である。文永10年(1273)金宝寺仏殿(現在の安国寺釈迦堂重文)が造営されたのを記念し、大工藤原季弘が施入したものである。鎌倉時代(1192~1332)の位牌形式を知ろうと貴重な資料である。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅五鈺鈴	こんどうごこれい	1口	福山市駅家町新山	昭30.3.30	金銅製	高さ18cm、口径6cm	弘法大師傳來と伝える唐代(7~10世紀)の作品で、鈴の胴には五大明王が刻まれており、鈴の下部はやすばんだ形状をしている。五鈺(ごご)の痕跡は残しているが、江戸時代中期(17世紀後半~18世紀前半)に堂宇が焼亡し、本品は一時土中に埋れていたためか、柄の五鈺の部分をはほとんど欠損している。福盛寺は真言宗の古刹である。		
県	重要文化財(工芸品)	戸張 永祿十年丁卯五月吉日と墨書がある	とばり	1幅	世羅郡世羅町東上原	昭32.2.5		縦174cm、幅183cm(幅61cmの布3枚をつづる)	舶来の織子(どんす)と思われる布の上部をつづったもので、これには梵字、観音経の一部のほか、永祿10年(1567)に吉光弥三郎なる者が奉納した旨が墨書してある。「敬白、奉掛御八幡戸張之事」「具一切功德、慈悲獲衆生、福聚海無量、是故頂礼」「右為、護持信心之大施主立願成就、皆令満足、息災延命、如意吉祥祈所而已、永祿十年丁卯五月吉日、吉光弥三郎主、真誠敬白」		
県	重要文化財(工芸品)	銅製銅杖頭	どうせいしゃくじょうとう	1柄	福山市新市町宮内	昭33.1.18	銅製	長さ31.5cm、環横外径15cm、柄管12cm	柄管(えかん)の上部に円形の環をつづき、環の両面ならびにその対角の環上に弧月形の突起がついている。環の上頭には五輪塔を鑄出し、その五輪塔と柄管を結ぶ環内直線上には、両脇に華瓶をもつ宝篋印塔(ほうきょういんとう)を鑄出している。普通の銅杖(しゃくじょう)に見ると同様に、仏教の穴道を意味する6個の小環を左右に3個ずつ宛存している。この銅杖は環に古い形式をとどめており、大形であるのも珍しい。柄管に応仁3年(1469)の紀年銘がある。「備後国一宮吉備津彦大明神願主口口応仁三年己丑」		
県	重要文化財(工芸品)	神輿	みこし	1基	三次市甲奴町小童	昭34.10.30	高さ340cm、方213cm		神輿は神霊がお旅所その他へ遷御される際に用いられる乗物で、お輿(こし)とも称される。この神輿は八角形で、その基盤側面の剣巴(つるぎともえ)文の文様はすぐれており県内では他に例を見ない。普通の神輿は各角に柱を立て、内部を一室とした構造形式であるのに、本品は心柱を持つ珍しい構造で、古くはこの心柱に祭神を置き祭ったのであろうか。この心柱の意味については、大社通りにある大極柱の系統をひくのか、または神輿を振り立てる神輿振りのための構造か今後の研究課題である。内部左板壁に永正14年(1517)創建の墨書がある。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅蓮花輪宝文置説相箱	こんどうれんげりんほうもんおきせつそうばこ	1合	尾道市東土堂町	昭36.4.18		縦39cm、横36cm、高さ12cm	長方形の箱で、導師が説教の原稿などを入れる。本製蓮花堂で備前に全額運搬(れんげ)の文や輪宝(りんぼう)文などの金具を置き、ふちに唐草文を浮彫りにした帯板(金具)を貼り、上(げ)底の脚部は金銅板(くわ)を施した格狭間(こうざま)を透かす。製作の年時は「慶長第三成茂(朱漆書の銘)すなわち慶長3年(1598)で、手法と様式は安土桃山時代(1573~1602)の特徴を示している。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	銅製髷口	どうせいわにくち	1口	三次市布野町下布野	昭36.4.18	銅製	直径22.5cm、高さ7.5cm	知波夜比彦(ちはやひめ)神社は、備後における式内社17座のうちの一つで、10世紀初めにはその存在が認められる古社である。この社に伝わる髷口は、建武元年(1334)の紀年銘をもち、県内における銘最古の髷口である。 「奉感鳴神社鐘一枚」 「建武元年才次甲戌十二月十八日施主清二良敬白」		
県	重要文化財(工芸品)	白紫緋糸段威巻附 兜眉庇	しろむらさきいとだんおどしはらまき	1領	尾道市因島中庄町宇寺迫金蓮寺内	昭36.11.1		高さ53cm、胴回り72cm	腹巻は、背中引合せ形式の初期のものは袖も兜もない軽武装用の鎧で、鎌倉時代末頃(14世紀前半)発生したと思われる。その後、室町時代(1333～1572)には大流行し、背中の引き合わせ部分に背板をつけ、更に袖をつけ兜も具備するようになる。 本品はそのような室町時代末期の腹巻と思われる。小札を紫・緋・白糸で段々に威(おど)した、美しく軽快な姿の腹巻である。 伝承によると因島村上家九代の新蔵人吉充が、小早川隆景より拝領したと言い、村上家に代々伝えられたものである。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅五鈷件	こんどうごこしよ	1口	広島市安佐北区可部町綾ヶ谷	昭37.7.20	金銅製	長さ23.5cm	室町時代初期(14世紀)製作と推定される。福王寺(ふくおうじ)に伝えられた作品。広島県内では厳島神社所蔵の五鈷件について古い作品と言われる。量感のある大ぶりな作品である。 五鈷件は、梵語(ぼんご)で鍍折羅(ばさら)と言われ、心中の煩悩をくさき仏性の修行を表す意味で用いられる金剛件(こんごうけん)の一種で、密教の修法に用いられたものの一部である。 福王寺は福王寺山頂にあり、中世、安芸守護武田氏や熊谷氏と深い関係を持っていた。		関連施設: 福王寺宝物収蔵庫 (082-814-9300)
県	重要文化財(工芸品)	鉄製燈籠	てっせいとうろう	2基	尾道市東久保町	昭37.7.20	鉄製	高さ37cm、幅28.5cm	もと浄土寺利生塔(りしょうとう)にあったと伝えられる一対の燈籠。春日厨子の形をとる。鉄製の屋蓋や柱を組み合わせたもので、鮮やかさを失くすため、かやうの中央に折れを作るなど、時代の建築の作風をよく反映する。屋根の上には三鈷(さんご)のすかしを二つ並べるが、ひねり蓮子(れんじ)に菱形をきざんだ欄間、きびきびしたりん形の格狭間(こうざま)などは南北朝時代初期(14世紀前半)ころの様式をよく示している。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(工芸品)	木造厨子 木造厨子台(旧太子堂安置) 1基	もくそうし もくそうすだい	3基	尾道市東久保町	昭37.7.20	木造	春日厨子 大(高さ1.6m)中(高さ1.3m)、小(残欠) 厨子台 幅2.7m、奥行1.28m、高さ32cm	3基の厨子は春日厨子で、それぞれ聖徳太子像(重要文化財)を納めていたものである。 厨子の台は、重なる文様を連子の中にきざみ出した手法は多宝塔須弥壇のそれと同じで、厨子とともに南北朝時代(1333～1392)ころの作と推定される。台及び厨子とともに簡素なすざりした秀作である。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2362)
県	重要文化財(工芸品)	なぎなた 銘藤原輝広尾州	なぎなた	1口	三次市吉舎町三五	昭38.4.27	刀身	刃長51.7cm、反り2.3cm	薙刀(はげ)の三ツ棟、鍛えは移征流(しゅうせいりゅう)に小志目(こしめ)入り、肌立って露地(ろじ)がかる。刃文はのたれ刃(のたれやいば)に互の目(ごのめ)を交え、刃中に砂流(すなぢり)がかり、銚子(すし)のはたれ込み(はたれこみ)が尖つて返る。茎は少し磨り上げ、先は生(なま)で浅い粟尻(あやせ)となり、鍔(つば)は勝手(て)下り、形物は表裏ともに薙刀(はげ)に種(たね)があり丸留(まるどめ)となる。		江戸時代の雲州(むすしゅう)広島(ひろしま)の刀工(たぎ)初代輝広(はげひろ)の作である。輝広は福島(ふくしま)正則(まさのり)の移封(いりてん)に従い尾張(おわり)から移住(うつり)したと言われ、その後広島藩(ひろしまはん)を代表する刀工(たぎ)のひとりとなった。輝広の作風を知るうえの有力な資料で、仕上げもよく抜群(ぬきぐん)の技量(ぎりょう)のほどを示している。
県	重要文化財(工芸品)	短刀 銘清貞 附 雲波文合口拵小刀播磨守輝広	たんとう	1口	広島市西区高須	昭38.4.27	短刀	長さ28.5cm	室町時代初期(14世紀)の周防(すおう)山口(やまぐち)の刀工(たぎ)・二王清貞(におうきよさだ)の作品で、三原物(さんげんぶつ)に近い作風であるが、額内(ごううち)真(ま)の俱利伽羅(くりにがら)欄間(らんま)の透かし(すかし)の彫り物は二王(におう)鍛冶(たが)独特(とくどく)である。この短刀は、打ちおろし(うちおろし)のような健全(けんぜん)な皮(かわ)をもち、彫り物(うづりぶつ)も珍しい。 付の拵(つきのこしらへ)も質素(しやくそ)で気品(きひん)のあるみことな出来(でき)ばえて、広島藩(ひろしまはん)抱え(かか)えの名工(なまぐ)・一方堂(いっぽうどう)明政(めいせい)の作品(さく)である。もと浅野(あさの)長則(ながのり)の所用(しよう)と伝えられる。		
県	重要文化財(工芸品)	短刀 銘播磨守輝広寛永五年八月日	たんとう	1口	庄原市西本町	昭38.11.4	短刀	刃長29.3cm、反り0.24cm、平造り、磨棟(なげ)でわずかに反りが付いている。鍛えは板目(いため)柱(はしら)がかり肌立(こやし)ちころに地沸(ぢわい)えつ。刃文(やいば)は小(こ)のたれに互(ご)の目(め)乱(みだ)り交(まじ)り、砂流(すなぢり)がかり沸(わい)えつき。ところどころに金筋(かねすぢ)がかり。銚子(すし)のはたれ込み(はたれこみ)先(さき)小丸(こまる)で、わずかに拵(こしらへ)がかりやちや長(なが)く返(かえ)る。茎(かぶ)は先(さき)栗尻(あやせ)丸(まる)く、鍔(つば)は大筋造(おほすぢぞう)である。		江戸時代の寛永(かんえい)5年(1628)作。 播磨守輝広(はりまのり)は、肥後守輝広(ひごのり)の弟子(でし)となった者(もの)で、最も古い年紀(ねんご)は慶長(けicho)15年(1610)である。寛永(かんえい)5年の年紀(ねんご)をもつこの短刀(たんとう)の資料的(しりょうてき)価値(かち)は高く、姿(すがた)があかぬけ地刃(ぢやいば)の出来(でき)も最高(さいこう)のものである。	
県	重要文化財(工芸品)	太鼓	たいこ	1張	尾道市東久保町	昭41.4.28	皮に墨で雲龍と鳳凰が描かれ、紙とめ	径96cm、高さ88cm、胴回り301.5cm	胴内銘(たねうちな)によると、正和(しょうわ)5年(1316)に大工(たか)教通(きょうと)・友延(とものぶ)により製作(せいさく)されたもので、皮(かわ)に墨(すみ)で雲龍(うんりゅう)と鳳凰(ほうおう)がかかれており、紙留(しりぞめ)びよどめである。また、皮(かわ)の張り替(か)えは、延元(えんげん)元年(1336)・延文(えんぶん)4年(1359)・応永(おうえい)6年(1399)・応永(おうえい)34年(1427)・元和(げんわ)4年(1618)の5回あり、何年(なんねん)で張り替(か)えたかがわかり、歴史的(れきしてき)資料(しりょう)としては珍しい。		関連施設: 浄土寺宝物館 (0848-37-2362)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	太鼓	たいこ	1張	世羅郡世羅町東上原	昭41.4.28	胴張なし	径55cm、胴の幅66cm。	胴内に墨書銘があるが判別しにくい。分かつたものでは、文明18年(1486)と天正10年(1582)の銘がある。太鼓の作り方が珍らしく、胴張がない自然木をつたまで、両側の皮は、細い皮ひもで引っぱってしめてある。胴の内側には、三方から鼓のつなぎがあり、何らかの音響効果をねらったものと考えられる。		関連施設: 大田庄歴史館 (0847-22-4646)
県	重要文化財(工芸品)	銅製髷口	どうせいわにくち	1口	廿日市市原	昭42.5.8	銅製	直径45cm	戦国時代の明応2年(1493)に製作された髷口。本願を明撰とし、大工久信が製作したもので、中世から近世にかけて活躍した廿日市錫物師の作品とも推定されている。胴部の中心には榎弁蓮華の権座(つきざ)を鑄出し、これを中心とし四段の円帯を鑄出し、上部懸環を支える二個の突起は先端剣先を表わしている。外縁から二段目の円帯の内側には刻銘がある。中心から外に二段目の円帯は幅広しかも子持帯となっており、さらに髷口口縁の両側の突出が少ないのは、この製作年次を表づける形態である。均衡のとれた優作である。		
県	重要文化財(工芸品)	刀 銘芸州三入住二王真清天正九年十一月吉日	かたな	1口	広島市中区備町	昭45.1.30	本達、中鋒、鑢柄高く庵棟、鍛え板目、刃文皆焼	刃長67.6cm、反23.3cm	天正9年(1581)、可部三入(みいり)、広島市安佐北区に住む刀工・二王真清(におうまさきよ)の作品。中世における中国地方西部の刀工として著名なものは、周防の二王一派、右見の直綱一派があげられるが、安芸県内においては見るべき土着の刀工は非常に少ない。わずかに室町時代末期(16世紀)に、大山住宗重と二王真清をおおるに等しい。二王真清は、可部三入の城主熊谷氏の招きにより周防から移住した古刀芸州刀工中の名工で、その作品は極めて少ないが、本品は相州伝法で作りした保存のよい傑作である。		
県	重要文化財(工芸品)	刀 銘芸州大山住宗重作永禄十一年八月吉日	かたな	1口	三次市十日市東一丁目	昭45.1.30	冠厚し達、大鋒、丸棟、鍛え板目刃縁経交り地沸つく、刃文互の目逆乱交り砂流れかかる	刃長70.3cm、反10.0cm	宗重は二王真清(におうまさきよ)とともに、中世の芸州刀工を代表する名工で、刀割古書によると宗重の銘は三代製いたようであるが、初代及び二代作で現存するものはなく、三代宗重の作もきわめて少ない。本品は三代宗重作の数少ない一つで、保存もよくれた作品である。大山鍛冶は、建武の頃(14世紀中頃)筑前の一派が大山(広島市安芸区瀬野川町大山)に來住したものであると言われ、現在も鍛冶宅跡や墓が残っている。		
県	重要文化財(工芸品)	姫谷焼色絵皿	ひめたにやきいろえざら	6口	福山市加茂町(5口) 呉市広吉松(1口)	昭46.4.30	紅葉文の皿 5密1組(5口) 飛雲桜間山水文の皿 1口	紅葉文の皿/径約16cm、高さ2.4cm 飛雲桜間山水文の皿/径18cm、高さ2.6cm	姫谷焼は、肥前系の磁器製造技術を持つ陶工市右衛門(?~1670)が焼いた磁器である。17世紀後半のごく短期間焼かれたものであるが、色絵の磁器としては、日本でも早い段階の作品である。紅葉文皿は五密一組、紅葉の一枝を置き、染付青華で下絵を置き、赤、緑、黄色で絵付けされている。飛雲桜間山水文皿は、平縁白磁の皿面に染付の飛龍と流水、樹木は緑と黄色の絵付けがなされている。なお、姫谷焼窯跡(県史跡)から同様の染付部分の破片が出土している。		
県	重要文化財(工芸品)	鉄錆漆塗二十八間二方白総纏輪阿古陀形筋兜鉢 漆塗兜櫃 1合	てつきびるしめりにじゅうはっけん にほうしろうそうふりんあごだなりず しかぶとばら	1頭	三次市十日市東	昭47.4.24		前後径25.7cm、左右径24.0cm、高さ14.8cm、重量1.690kg	この兜は、室町時代(1333~1572)特有の誇張的なふらみをもった阿古陀形で、錆漆を厚く盛り上げ腰巻も水平となり、[849d](しころ)を欠失しているのが当時流行の笠[849d]を付けていたものである。前立の三鍔形(みつわがた)を欠失し、肩庇(まびさし)の張子の絵草と鉢裏の張草は後補であるが、彫刻張金は精巧で定形を築く。後盾も良好であり当代を代表する兜鉢である。備後国山内首藤家に伝来したと伝えられ、天辺の座に定紋の三拾紋(みつかしわもん)が浮彫されている。		
県	重要文化財(工芸品)	密教法具	みつぎょうぼうぐ	1具	福山市金江町金見	昭48.12.18	金銅製 五鉢杵、五鉢鈴、金剛盤、各1口	五鉢杵/長さ14.6cm 五鉢鈴/高さ19.0cm、口径7.6cm、鈴の径20.4cm 金剛盤/高さ3.8cm、縦17.8cm、横24.5cm	鎌倉時代~室町時代(12世紀末~16世紀)製作の、密教儀式に用いる法具。いずれも金銅製。五鉢杵(ごこし)は鉢の肩はりは強く、握柄の二重帯もよしまり、猪目もよく現れている。連弁の脈すじの細さは精巧で、制作年代に相応する作品である。五鉢鈴(ごこし)は鉢の肩の連弁の連弁と同じ手法で、鈴胴には子持帯をもち、この時代の特色をよく示している。金剛盤(こんごうばん)は三つの脚がついており、形は四弧形である。外縁部の断面は三角形になり、前面の弧の両端の猪目とともにこの時代の特色をよく表している。杵は煩悩を砕き仏の智慧(ちえ)の光を表す。鈴は密教の儀式の時、諸尊を覚めさせ喜ばせるために鳴らす。		
県	重要文化財(工芸品)	刀 銘備州三原住員正近作天正三年二月日	かたな	1口	呉市普戸町普戸	昭50.9.19	鑄造、庵棟、身中尋常で反り深く太刀姿、小鋒、鍛え板目圭目つまり地沸厚くつき淡く映り立つ	総長79.1cm、刃長63.4cm、反22.4cm	天正3年(1575)作。表に九字銘、裏に年紀七字銘がある。三原鍛冶は、代々大和伝の鍛冶を伝える伝統的な作風を示し、しかも地刃健全である。当時繁栄した多くの末三原の刀工一派の中で最も傑出した作品である。		
県	重要文化財(工芸品)	革包茶系威二枚胴具足	かわづつみちやいとどしにまじょうく	1個	福山市寺町	昭52.3.4		胴高さ43.5cm、兜高さ35.0cm、同前後径22.5cm、同左右径19.0cm、袖幅20.5cm、同長さ28.0cm、総重量10.2kg	福山水野氏の菩提寺・賢忠寺に伝わる当世具足で、福山藩初代藩主・水野勝成の所用と伝えられる。兜は、唐冠形の鉢の左の左に黒い熊毛で包んだ長い腰(えい)をつけ、前立(まえだて)には木製漆塗の魁(しかみ)が取り付けてある。胴は紋を革包にし茶漆塗りにした桶胴で、その下部二段は茶系糸で毛引威(けびきおどし)にするなど、旧来の甲冑にくらべ特異な意匠をもち、防禦にすぐれた堅牢で、備みは少なくほぼ完成形である。当世具足は室町時代末期から安土桃山時代(16世紀後半~17世紀初頭)にかけて発達したもので、この具足はその完成期に武将が着用した例として、武器の歴史を知るうえで貴重な資料である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしやう	1口	福山市沼隈町下山南	昭54.3.26		総高111cm、直径67.6cm	周防に本拠をおく戦国大名大内義隆が天文13年(1544)安芸厳島神社に寄進した。銘文があり、龍頭中央の宝珠の火炎を四方に付けた中世の和鐘である。追鈴から、後に寛茂郡西条四日市(東広島市西条町)真光寺に移されたことが分り、明治時代になって西光寺所有となった。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅製独鉢杵	こんどうせいどっこしよ	1口	福山市内海町	昭54.3.26		長さ17.5cm	密教法具の一種である。杵(きね)の形をして、両端に鋭い刃をつけたものを金剛杵(こんごうしよ)といい、もともと武器だったものが象徴化されて、悩みをやぶり、仏性を表わすための法具となった。その中でも両端が一本のものを独鉢杵という。この独鉢杵は金銅製で、鉢の先四方に鉢を入れている。握部の猪目・連弁のしぼり強く、全体の仕上げはよく多し、鋭さを思わす。製作は室町時代初期(14世紀前半)を下るものではない。 ※鉢(しのぎ)…刀身の背から刃へ移る境の線。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅製三鉢杵	こんどうせいさんこしよ	1口	福山市内海町	昭54.3.26		長さ17.5cm	密教法具の一種である。杵(きね)の形をして、両端に鋭い刃をつけたものを金剛杵(こんごうしよ)といい、もともと武器だったものが象徴化されて、悩みをやぶり、仏性を表わすための法具となった。その中でも両端が湾曲して分岐した鉢(ほこ)の数が三本のものを三鉢杵という。この三鉢は室町時代初期(14世紀前半)の作と推定される。金銅製で、握部は扁平形となる。猪目の突起も著しく、連弁のしぼりも強く、両端の蹄(こ)の張りも著しい。時代の特徴をよく表している。		
県	重要文化財(工芸品)	銅製髷口	どうせいわにぐち	1口	福山市神辺町八尋	昭55.6.24	銅製	直径35.5cm	髷口は神社の軒下(かき)にかけ鳴らして使用するものである。この髷口は銅の裏裏二面を同じ型で鍛造し、合わせた形式である。表面は銘帯と中区、槽座(つさざ)の三区にわかれ、銘帯には最初に刻まれた銘文を消して、後に追刻されている。鈎手(かぎて)である耳は丸の四角形に近く、目は耳の下方向に短く筒状に凸出し、中央下部の目の間に裂け口を開き、錠鼓(しょうこ)線状の筋をめぐらしている。最初の銘はかすかに残るもののみと「右首龍者口天下泰平口口口」を左側にあり、右側の文字は追刻の備後国安部郡八尋村神宮寺の銘文で消されて明読できない。裏面の銘文は、神宮寺の銘文と同様に右側に「應永一六年二月日」、左側に「大願主惣目申」と刻んでいる。これらの銘文から、この髷口が室町時代中期の応永16年(1409)に神宮寺(現在の深安郡神辺町八尋にある吉備津神社)に寄進されたことが分かる。		
県	重要文化財(工芸品)	鉄打出漆塗仏脚腰取脚丸具足 附 立浪文障羽織 1領 袴 1本	てつうちだしうるしぬりほとけどうこしとがどうまるぐそく	1領	広島市西区古江東町	昭57.2.23		総重量13.250kg 兜ノ高さ35.5cm 面頬当ノ 胴ノ高さ45.0cm 帯ノ 佩箱ノ横30.0cm、長さ24.5cm 籠当ノ高さ22.5cm 障羽織ノ肩巾45.5cm、身丈82.0cm 袴身ノ長さ38.5cm	安土桃山時代(1573～1602)の当世具足の一つ。広島藩家老で茶人として知られる上田宗箇(うへだそうこ)が大坂夏の陣(1615年)の時に着用したと伝えられる。大形の風折烏帽子(かざおえぼし)形の兜に、鉄の一枚板で作られた胴で、胴の前面と背面には銀箔で日の丸が描かれている。製作も優れ、保存も良く、安土桃山時代を代表する甲冑である。 ※仏脚…当世具足の胴の形式の一種。鉄の一枚板で作られ、仏像の胸のようなところからその名がある。		
県	重要文化財(工芸品)	黒漆威胴丸	くろかわおとしどうまる	1領	山県郡安芸太田町	昭58.11.7			南北朝時代(1339～1392)に製作されたと推定されている。威葦(おどしかわ)あるいは紐所(ひもところ)に後補が施されているが、総体的に原形をよどどめ、南北朝時代の特徴をうかがい知ることが出来る。現存する同様式の胴丸は、大山院神社の宝物に多くあることが出来るが、全国的にみて遺品は極めて少なく、しかも版板を用いておらず、注目し得る稀有の遺品といふべきであろう。		
県	重要文化財(工芸品)	金銅唐草文板蓮華文金具置戒体箱	こんどうからくさんいいたれんげもんかなくおきかいたいばこ	1合	東広島市西条町下三永	昭59.11.19	木製金銅装	縦37cm、横12.7cm、高さ8.7cm	福成寺(ふくしようじ)に伝わる室町時代末期(16世紀)製作と推定されている戒体箱。木製で、周囲を金銅製の板で覆っている。長方形で、蓋と身にわかれ、身の下部は格状間(こうさま)の透かしが入った脚になっている。底板の四方縁辺部に「一・二・三・四」の数字が墨書してある。 ※戒体箱…密教灌頂(かんじょう)と呼ばれる仏教儀式の会場で用いる、戒文を納める箱		関連施設: 福成寺宝物収蔵庫 (082-426-0523、082-423-3486)
県	重要文化財(工芸品)	金銅輪宝頸懸文置説相箱	こんどうりんぼうかつまもんおきせつそうばこ	1合	東広島市西条町下三永	昭59.11.19	木製金銅装	縦33.5cm、横24.5cm、高さ11cm	福成寺(ふくしようじ)に伝わる、室町時代末期(16世紀)製作と推定される説相箱。長方形の木製箱で、側面に金銅製の飾り金具が取り付けられている。下部は高台(こうたい)状の脚になっており、格状間(こうさま)の透かしが入る。底板の四方縁辺部に「一・二・三・四」の数字が墨書してある。 ※説相箱…僧侶が仏教儀式の時に用いる衣や法具、原稿などの必要なものを納めて傍に置いた箱。居箱(すえはこ)とか接僧箱(せつせうばこ)とも呼ばれている。		関連施設: 福成寺宝物収蔵庫 (082-426-0523、082-423-3486)
県	重要文化財(工芸品)	金銅製五鉢鈴	こんどうせいごこれい	1口	廿日市市廿日市	昭60.12.2	金銅製	高さ18.0cm、径口径外回り7.5cm、内径5.0cm	密教法具の一つである金剛鈴には、独鉢鈴、三鉢鈴、五鉢鈴、宝珠鈴、宝塔鈴がある。この金剛鈴は金銅製である。五股の張りはやや弱いが、連弁のしぼり強く、鉢の中程の猪目(いのめ)も一段一太目が見え、鈴傘部の連弁の跡も顕著で、その外を廻る芯も細芯につり、鈴筒を巻ぐ子持ち帯も製作時代を特徴づけている。室町時代中期(15世紀)に製作されたと思われる数少ない遺品である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	銅製地藏菩薩懸仏	どうせいじぞうぼさつかげぼとけ	1面	尾道市瀬戸田町御寺	昭62.3.30	浮彫, 半肉彫, 毛彫	径24.2cm	鎌倉時代(1192～1332)の作。円形銅板上中央に宝珠と錫杖(しゃくじょう)とをもつ地藏菩薩が蓮台上に坐し、頭光身光を負う姿に表されている。地藏と蓮台は一枚の銅板を楕で起して薄肉に押出して現わし、衣文蓮台などの細部は、よどみのない流れるような彫彫(しゅうちよう)で表現し、頭光・身光とともに円形銅板上に砥止めされている。 懸仏は仏像などを金属などの円板上に作り出したもので、神社や寺院の内陣に懸けられていた。		
県	重要文化財(工芸品)	鉄製釣燈籠	てつせいつりどうろう	1基	三次市島敷町(三次市小田幸町 広島県立歴史民俗資料館寄託)	平2.12.25	鉄製, 六角燈籠	総高33.0cm, 総廻64.0cm	熊野神社の前身である王子権現に天正8年(1580)比叡尾山(ひえびやま)城主三吉隆亮が奉納したもので、火袋の下部にその旨の銘文が打ち抜き模様の中に刻まれている。 六角燈籠の形態や、打ち抜き模様の優美な彫刻など、工芸美術的に優れたものであり、数少ない安土桃山時代(1573～1602)在銘の釣燈籠として貴重である。		関連施設: 広島県立歴史民俗資料館(0824-66-2881)
県	重要文化財(工芸品)	金銅製板塔婆	こんどうせいいたとうば	2基	三次市島敷町(三次市小田幸町 広島県立歴史民俗資料館寄託)	平2.12.25		高さ62.0cm, 台幅20.8cm	熊野神社背後の比叡尾山(ひえびやま)城主三吉致高・隆亮父子が戦国時代の弘治2年(1556)、熊野神社の前身である王子権現に寄進したものである。中世末期(16世紀)この地方を支配した三吉氏と神社の関係を示す資料である。熊野神社の前身王子権現神院を右の程に打ちつづられたものと思われる。いづれも金銅製の板を三重塔形に打ち抜き、線刻で九輪三層の座標・塔身・回廊等を詳細に線刻し、台座部分には願文銘文が刻まれている。 精巧に彫金加工された優れた遺品であり、また地域史の資料としても貴重である。		関連施設: 広島県立歴史民俗資料館(0824-66-2882)
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしやう	1口	尾道市瀬戸田町瀬戸田	平5.2.25	和鐘, 撞座に蓮華文	総高93.5cm, 口径59.5cm	戦国時代の天文24年(1555)製作の和鐘で、三原鍾物師の製作したものである。撞座(つきざ)には蓮華文を鏤出している。 また、慶長の道銘には、豊臣秀吉の朝鮮侵略の際に供出されようとした本鐘が、町衆の寄附によって免れたことが刻してあり、天文年間(1573～1591年)当時の和鐘様式を良く伝えているのみならず、向上寺自体の歴史を語る資料としても貴重である。 向上寺は臨済宗仏通寺の大通神師の開山になる寺で、瀬戸田水道北口に位置する。国宝三重塔があることでも著名である。		
県	重要文化財(工芸品)	太刀 附 鉄はばき	たち	1口	山県郡安芸太田町	平5.2.25	鍛造, 庵棟, 腰反り深く, 大鋒	刃長86.7cm, 反12.8cm	大振りで作られ、身中が広く、総体的に長寸で、切先は長く、豪華な姿の作刀が多く造られた南北朝時代(1333～1392)の特徴を良く示している。 また、茎(なかご)は製作当時のままであるため、茎全体が錆で朽ち込んで、本来あったものと考えられる作者名が不明になっているが、備中善工一派の作と思われる。 このほか、大蔵神社には同じく黒重文の黒韋威願丸(くろかわおどどうまる)が伝えられている。		
県	重要文化財(工芸品)	銅鐘	どうしやう	1口	廿日市市吉和	平6.10.18		総高89.0cm, 口径48.5cm	南北朝時代の明德5年(1394)に製作された鐘である。銘文に「筑前国遠賀荘黒山千手寺」とあり、本来は現在の福岡県の寺の鐘として鑄造され、江戸時代末期に京都太秦広隆寺に移動し、現在は本寺に備すという経歴をもつたものであるが、その経緯については不明である。 遠賀荘黒山が遠賀郡戸屋町に近いことから戸屋鍾物師の作品として注目される。		
県	重要文化財(工芸品)	鉄地黒漆塗三十八間総覆輪筋兜	てっちくろうるしぬりさんじゅうはっけんそうふくりんすじからと	1頭	廿日市市宮島町	平5.10.18		高さ11.7cm, 前後22.5cm, 左右19.5cm	本児録の黒漆は製作当初の状態をよく表し、兜の筋には鍍金(とぎん)の覆輪(ふくりん)を施し、徽形台の唐草の浮彫りなど、細部に多くの意匠が加えられた優品である。兜髹漆金具等は製作当初のものが残っており、室町時代初期(14世紀)の美術工芸品として貴重な兜である。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
県	重要文化財(工芸品)	太刀	たち	1口	庄原市西本町三丁目	平7.1.23	鍛造, 庵棟, 切先はやや小さい, 刃文直刃, 鍔目は浅い構手下がり	全長91.3cm, 刃長71.3cm, 反り1.7cm, 目釘孔1個	戦国時代の天文2年(1533)三原の刀匠正興が製作した太刀。この時代は刀が主流であり、実用刀としての太刀はまれである。保存状態もよく、美術的にも非常に価値がある。 製作者の正興は、時代、銘振り、鍔目(やすりめ)などから初代正興と考えられる。 銘太刀表「備後国三原在正興作」 裏「天文二年八月日」		
県	重要文化財(工芸品)	太刀	たち	1口	福山市引野町北二丁目	平8.9.30	鍛造, 庵棟, 鍔え板目, 小鋒	全長92.0cm, 刃長74.3cm, 反り2.3cm, 目釘孔1個, 重量670g	鎌倉時代末期(14世紀前半)の作。備後神辺の国分寺助国の作品である。国分寺助国は三原刀工と並んで鎌倉時代(1192～1332)の備後を代表する刀鍛冶であり、大和系の技術で製作する三原鍛冶に対して、備前・備中系統の刀剣製作を製作していた。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(工芸品)	金銅製有頸五輪塔形舍利塔	こんどうせいゆうけいごりんとうがたしゃりとう	1基	尾道市瀬戸田町御寺(福山市西町二丁目)広島県立歴史博物館寄託)	平8.9.30	銅造、鍍金	総高6.45cm、舍利容器高2.2cm	平安時代末期から鎌倉時代(12世紀後半～14世紀前半)にかけて製作された舍利容器である。通常の五輪塔と異なり、火輪と水輪の間に円筒状の部分が付されており、むしろ宝塔を意匠したデザインと見える。水輪内部に舍利を納める円筒との蓋がある。蓮華座など各所に細かな細工が施され、洗練された美しさを感じさせる。光明坊は鎌倉時代以来の古例であり、西大寺流律宗の影響が伝わる。		関連施設: 広島県立歴史博物館(084-931-2513)
県	重要文化財(工芸品)	琵琶 附 旧捍撥革1枚	びわ	1面	廿日市市宮島町	平14.2.14	四絃琵琶(よんげんびわ)	全長101.2cm 腹板幅(ふくばんはば)40.5cm	厳島神社の社伝によると、玄上の琵琶と称し、別名「谷川の琵琶」ともいわれる。腹板裏面の墨書名から、弘長2年(1262年)10月11日に玄上の琵琶を模して唯念(ゆいねん)が製作したことが知られる。 四絃琵琶(よんげんびわ)として、鎌倉時代(1192～1332)の年号並びに作者名をも明記する稀有の品であり、正倉院の遺例と比較しても、その製作に古例をとめている。		関連施設: 厳島神社宝物館(0829-44-2020)
県	重要文化財(工芸品)	金銅火燭宝珠形舍利容器	こんどうかえんほうじゅがたしゃりようき	1基	尾道市東久保町	H26.2.27		総高 14.2cm、基壇径 5.6cm、独鉢弁(高さ)4.6cm、輪宝径 4.2cm(輪宝中央枘穴 縦横 0.4cm×0.5cm)、蓮華座径 4.4cm、宝珠(高)3.9cm(径)3.2cm 火燭最大幅 5.6cm	当該舍利容器は、下から、台座、輪宝(りんぼう)及び宝珠から成る。台座は、六方隅入りの円形の基壇の上に反花座(かえりはなざ)が載り、その上に独鉢弁(こっし)が立てられる。独鉢弁の上には輪宝と宝珠を連結するほどとなる。輪宝は、中央部に独鉢弁の弁が入るよう四角い穴が設けられている。輪宝は、蓮華座の上に載り、四方を火燭の周囲に囲んでいる。蓮華座は、5段で各段8弁の計40弁の水蓮弁から成る。宝珠内部には、白色とやや黄色味を帯びた米粒状の舍利が納められている。宝珠は水晶製で、これ以外には金銅製で鍍金が施されている。広島県重要文化財「浄土寺文書」によると、暦応3(1340)年、足利尊氏の弟(直頼の嫡子)が仏舎利2粒を浄土寺に奉納したことが知られる。当該舍利容器の制作時期は南北朝時代と思われる。これがこの仏舎利を収めた容器である可能性がある。		関連施設: 浄土寺宝物館(0848-37-2361)
県	重要文化財(工芸品)	短刀 銘口州分寺住人助国作 嘉暦二年正月日	たんとう めい(一字不明)しゅうこふんじゅうにんすけにたくかやくにねんしゅうがにつち	1口	福山市草戸町	平成30年(2018)3月22日	平造、庵棟、鍛えは板目に歪交じり、目釘穴二個。	全長34.8cm、刃長24.8cm、わずかに内反り、目釘穴2個、重量142g	鎌倉時代末期の高暦2年(1327)、現在の福山市神辺町下御領の備後国分寺を拠点として活動した刀工の助国(すけくに)によって製作された短刀。 助国は、備前伝(一文字派)の流れをくみ、大和伝(手播系)の流れをくむ三原派(古三原)とともに、備後地域において最も古く鎌倉時代末期から南北朝にかけて活躍したことが知られる。助国には代があったと考えられ、本短刀の作者と考えられる二代助国は、初期は備前伝の作風であるが、徐々に大和伝が強く作る作風を示す。 本短刀の内反りとなる姿は、鎌倉時代の短刀の特色をよく表す。板目に歪交じりの地肌(鍛え)や筋映りを見せる点などに備前伝(一文字系)の特色が認められるとともに、直刃調の小沸つき刃文などに大和伝(手播系)の特色が認められる。備前伝と大和伝が混在する点は、二代助国の中期の作風を顕著に示しており、全体的に鍛えた出来映えである。 助国一派の現存する作品は非常に少なく、特に短刀の遺例は稀有であるが、その中において本短刀は在銘で高暦2年の年紀を有しており、刃工の研究において重要な作品である。 また、県内の刀工が製作し、県内に所在する国又は県指定文化財の刀剣類に照らして、年紀を有するものでは最も古い年代に位置付けられることから、本県の刀剣史上においても貴重な資料である。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経	しほんぼくしよないほんにゃきょう	25帖	三次市吉舎町吉舎	昭28.4.3	紙本墨書		平安時代の保延4年(1138)播磨国(兵庫県)播磨郡の住人桑原貞助の発願により、同国書写山王教寺(兵庫県姫路市)の僧徒一齊に書写した般若(どんしゆ)経、いわゆる「大般若経」で、平安末期の名品の一部である。もとは巻子装であるが、現在は折本装になっている。また、大般若経は本来800巻あるが、25帖だけが残っている。 戦国時代の明応2年(1493)守近善秀が願主となって、大慈寺の山麓近くにある吉舎村八幡宮に施入されたと記されている。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書小田家文書	しほんぼくしよおだけもんじよ	3巻	廿日市市津田	昭28.8.11	紙本墨書		平安時代の永久3年(1115)から江戸時代の慶安4年(1651)にかけての91通の文書群である。戦国時代、厳島社領の佐西郡玖島(じま)郷(佐伯郡佐伯町玖島)の刀将(とね)であつた小田家に伝えられた古文書である。厳島社領の刀将は村落や郷の中心人物であり、この文書も玖島郷における在支配や収納関係を主体としている。 中世の土地支配の状況を明らかにするうえで貴重な資料である。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書宝治二年二月領家下文地十二通	しほんぼくしよほうじにねんにがつけりょうけだしふみほかじゅうにゅう	1巻	三原市本郷町南方(福山市西町二丁目)広島県立歴史博物館寄託)	昭29.1.26	紙本墨書、巻子装		豊田郡本郷町の美音寺文書6巻のなかの1巻。美音寺文書は計56通で、うち54通が県指定である。文政2年(1819)巻子装にまとめられた。 この巻子は、12通の文書を1巻にまとめたもので、宝治2年(1246)美音寺の支配下にあつた基沼寺(ひきぬでら)領乃乃名(のりきみょう)の方親公事(まんぞうじ)、荘園内の雑税を免除し基沼寺の修理にあつたことを命じた領家下文地は、弘安11年(1230)4月の沼田庄雑掌と地頭との争論を載いた領家下文地知状の本文、天正18年(1590)毛利氏惣領地にあつた美音寺境内の守護不入を確認した毛利氏様地奉行人違書状などが含まれる。 美音寺は豊田郡本郷町にある真言宗の古刹である。沼田荘の開発領主・沼田氏が平安時代(794～1191)に創建した寺で、源平の争乱後地頭として入部した土肥平氏(氏)が氏寺とした。		関連施設: 広島県立歴史博物館(084-931-2513)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書正応三年四月比丘尼浄蓮寄進状十一通	しほんぼくしよしょうおうさんねんしよがつかいじゅうれんせんしんじょうほうかじめいじゅう	1巻	三原市本郷町南方(福山市西町二丁目)広島県立歴史博物館寄託)	昭29.1.26	紙本墨書、巻子装		美音寺文書6巻のなかの1巻。 小早川茂平の娘地頭尼浄蓮が鎌倉の将軍家や自身及び子孫の菩提を弔うため、三重宝塔建立助成田寄附した正応3年(1290)4月の寄進状など、鎌倉時代から安土桃山時代(12世紀末～17世紀初め)にかけての小早川氏や毛利氏による土地寄附や死行(あてがい)に関する文書がまとめられている。 美音寺は、沼田氏が創建した寺で、源平の争乱後地頭として入部した小早川氏は、寺を沼田氏から引き継いで所領の寄進など厚い保護を行っている。		関連施設: 広島県立歴史博物館(084-931-2513)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書天正十二年五月仁和寺法親王令旨地十三通	しほんぼくしよてんしゅうじゅうにねんごがつかいじゅうれんごんじょうのりょうじょうじよかじゅうさんつう	1巻	三原市本郷町南方(福山市西町二丁目)広島県立歴史博物館寄託)	昭29.1.26	紙本墨書、巻子装		美音寺文書6巻のなかの1巻。 仁和寺門跡仁助法親王が西国下向の途中美音寺で宿泊接待を受けたことを感謝し塔頭のひととに院号を与えた天正12年(1584)5月の2通の令旨をはじめ、南北朝時代の永享元年(1379)から明徳4年(1393)にかけての時期の院主職関係の文書や室町時代(1333～1572)の役負担に関する小早川氏の文書など13通がまとめられている。 美音寺は、沼田氏が創建した寺で、源平の争乱後地頭として入部した小早川氏は、寺を沼田氏から引き継いで所領の寄進など厚い保護を行っている。		関連施設: 広島県立歴史博物館(084-931-2513)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書弘安四年正月領家下文地十一通	しほんぼくしよこうあんよねんしようがつりょうげくだしよみほかにしよういつつ	1巻	三原市本郷町南方(福山市西町二丁目)広島県立歴史博物館寄託	昭29.1.26	紙本墨書、卷子装		<p>楽音寺文書6巻の中の1巻。 弘安4年(1281)正月の沼田庄領家下文をはじめ、楽音寺への土地寄進や役免除に関する鎌倉時代から室町時代(永享12年(1440)までの文書11通がまらめられている。 楽音寺は、沼田氏が創建した寺で、源平の争乱後地頭として入部した小早川氏は、寺を沼田氏から引き継いで所領の寄進など厚い保護を行っている。</p>		関連施設: 広島県立歴史博物館 (084-931-2513)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書慶長五年五月毛利輝元寺領寄進状一通	しほんぼくしよけいごうごねんごがつりょうていもとりよきしんじようほかいいつつ	1巻	三原市本郷町南方(福山市西町二丁目)広島県立歴史博物館寄託	昭29.1.26	紙本墨書、軸装		<p>楽音寺文書の中の1巻。 慶長5年(1600)4月付けの毛利輝元の楽音寺領寄進状写しや梨子羽郷南方(豊田郡本郷町南方)の楽音寺領を一筆毎に列記して渡した奉行人連署打戻状など3通でまとめているが、寄進状などの江戸時代の写し2通は対象外である。 楽音寺は、沼田氏が創建した寺で、源平の争乱後地頭として入部した小早川氏は、寺を沼田氏から引き継いで所領の寄進など厚い保護を行っている。</p>		関連施設: 広島県立歴史博物館 (084-931-2513)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書慶長元年核地帳	しほんぼくしよけいごうねんけんちちょう	1巻	三原市本郷町南方(福山市西町二丁目)広島県立歴史博物館寄託	昭29.1.26	紙本墨書、卷子装	本紙縦31.9cm、横637.5cm	<p>楽音寺文書6巻の中の1巻。 慶長元年(1596)毛利氏の惣国核地の一環として行われた楽音寺法持院領分の核地帳。田島屋敷一筆ごと地名・面積・年貢納金・耕作者(所有者)名が記されている。現状は卷子装に改装されている。 楽音寺は平安時代(794~1191)に沼田氏の開創領主・沼田氏が創建した寺で、法持院はその18の塔頭の一つである。源平の争乱後地頭として入部した小早川氏は、寺を沼田氏から引き継いで所領の寄進など厚い保護を行っている。</p>		関連施設: 広島県立歴史博物館 (084-931-2513)
県	重要文化財(典籍)	葛原勾当日記 附印刷用具1具及び琴、三味線稽古墨筆記録10冊	くずはらこうとうにっき	3帖・11冊	福山市神辺町新湯野町(管茶山記念館 保管)	昭29.9.29 昭50.4.8 (追加指定、名称変更)			<p>葛原勾当は文化9年(1812)現在の深安郡神辺町八尋に生まれた。3歳の時ほうそうにかり失明、9歳で京に上り松野校校(けんぎょう)の門に入り、生田(いくだ)流の草書(そうきょく)と地歌(ぢうた)を学んだ。15歳で勾当の位階を許され、郷里の地名をとって葛原勾当と称した。帰郷して後は、備後、備中(岡山県西部)兩國を中心に広く教授に当たり、関西の名手として聞こえた。 勾当日記は、26歳から71歳で病没するまで、みずから采出した木活字を使って記したものである。活字はひらがな、数字、句点かなり、縦を別み無感で判別できよう。また行は定本で正すように考案されており、今日のタイプライターの原理に通じるものがある。その記載は簡潔素朴、音の世界を詠んだ歌が260首も収められており、勾当の感受性の鋭さがうかがわれる。</p>		
県	重要文化財(典籍)	版本大般若経 附経櫃 3櫃	はんばんだいはんにゃきょう	600巻	府中市栗柄町	昭29.11.11	木版刷り		<p>奈良興福寺で印刷・出版された春日版(かすが版)大般若経の3櫃600巻である。櫃の銘によって室町時代の応永23年(1422)12月に南宮神社に寄進されたことが分かる。 大般若経の遺品は県内に多いが、600巻が完存しているものは比較的少ない。また、原則どおり200巻ずつ3櫃に納められ、櫃が経巻と同時代のものであるは更に少なく、貴重である。 神宮寺は、南宮神社の別当寺である。この大般若経と同じ時期に寄進された十六善神像も保存されており、貴重な事例となっている。</p>		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書啓瑞集	しほんぼくしよけいてきしよう	8冊	三原市内一町	昭30.1.31	紙本墨書、冊子装	縦27.1cm、横20.9cm	<p>日本医学史上に画期的な功績を残した曲直満道三(まなせどうさん、1507~1595)(正盛)が天正2年(1574)に脱稿した道三医学の集大成本で、助命によって僧養彦(さくげん)が題辭を認め、医学全般にわたって論述されている。 天正11年(1583)小早川隆景の侍医・水野松林軒に贈ったことが自筆奥書によって知られる。永禄年間(1558~1570)、毛利元就が出家出征中に病になつたとき、道三は将軍足利義輝の命で出家して下向してこれを治療して以来、毛利氏一族の知遇を得ており、その縁でこの本を隆景の侍医に贈ったのであろう。この啓瑞集の刊本はなく、現存を確認できる自筆本は他に一書しかない。</p>		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西園寺寄附帳	しほんぼくしよさいていきふちょう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書、折本		<p>南北朝時代末期から室町時代(14~16世紀)にかけて行われた西園寺の講堂宇の建立・再建に関する寄附を中心に記録したもの。巻頭の山名持豊(完全、1404~1473)をはじめ山名氏一族や備後守護代・犬橋満泰などの山名氏被官を中心に23名の名前と寄進内容が記されている。「沼隈郡新庄長者実秀」の名もみえ、中世の富裕層の一端を見ることが出来る。 西園寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794~1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。</p>		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西園寺建立施主帳	しほんぼくしよさいていきふちょうせしゅちょう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書、折本	縦33cm、横122.4cm(八折)	<p>室町時代(1333~1572)の西園寺再建で施主となった人たちの署名帳である。筆頭の「征夷將軍」は花押から見て足利6代將軍義隆(1394~1441)と考えられ、次いで本願寺師である西園寺の尊章(ゆげせん)が確認、次いで、細川持之、畠山持重、山名持豊、大内隆弘など、幕府の重臣や守護大名たちの名が見える。 西園寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794~1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。</p>		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西園寺不断経修行事及西園寺上録帳	しほんぼくしよさいていきふだんぎょうしじゆぎょうじおよびさいていきあげせんちょう	1帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	紙本墨書、折本	縦30.3cm、横702cm(52折)	<p>戦国時代の文明3年(1471)6月16日、西園寺の不断経修行を再興するため、西園寺支配下の各坊に上録をさせた記録である。この一帖に書き上げられた各坊僧侶の数は197筆にのぼり、尾道をはじめ、吉香・今高野山・御調などの備後国内の者や備中薬王寺などの名が見える。 不断経修行は天仁元年(1108)堀川院退福のため始まったが、武家の領地押領のため中断していた。西園寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794~1191)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代(14~16世紀)にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。</p>		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	紙本大般若経 附 経櫃 3櫃 中箱 60箱	はんぼんだいはんにゃきょう	600帖	尾道市西久保町	昭30.1.31	版本, 折本	縦26.3cm, 横10cm程度	近江源氏の佐々木氏種が康暦元年(1379)に開版した版本で摺った大般若経で、600帖を完備しているのは珍しい。経巻の奥書や経櫃の墨書銘により、応永9年(1402)6月に西国寺薬師堂(金堂)に捲入されたことが記されている。 蓋裏墨書銘は次のとおりである。 「寄進備後国御調郡尾道浦西国寺薬師堂 応永九年壬午六月八日勅主権律師慶弁願主興賢」		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経 附 経櫃 1櫃 中箱 18箱	しほんぼくしよだいはんにゃきょう	112帖	尾道市西則末町	昭30.1.31	紙本墨書, 冊子, 旋風葉(せんふうよう)		平安時代の承安5年(1175)に藤原盛時が三島大明神に捲入した大般若経。全巻に捲入の奥書がある。1行17文字で、界線は墨書である。旋風葉(せんふうよう)の表裏を除いたこの経巻は、全巻を同時期に書写したものではないようで、奈良・平安時代初期(8世紀前半)の書風も見える。 天文22年(1553)に栗原六村の氏子により八幡宮に寄進され、以来、栗原八幡神社に伝えられた。櫃の蓋裏に墨書で寄進した旨が記されている。 「天文廿二天美丑栗原之惣六村願主八幡宮御経五百内六百内住侶清正月十三日氏子諸人」		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経	しほんぼくしよだいはんにゃきょう	2帖	尾道市美ノ郷町本郷	昭30.1.31	紙本墨書, 折本		平安時代の永久6年(1118)に明法生藤原季行が書写した旨を記している。巻第百五十三及び巻第百五十四の二帖が伝えられ、各巻に奥書がある。1行17文字、界線は墨書である。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書西国寺塔婆勧進帳	しほんぼくしよさいていとうばかんじんちょう	1巻	尾道市西久保町	昭31.3.30	紙本墨書, 卷子装	縦42.0cm, 横255cm	室町時代の永享元年(1429)に青尊(ゆうそん)僧正が西国寺三重塔(重要文化財)の建立を発願した際、寄附を募るために趣旨を記した勧進帳である。 西国寺は今日までに幾度かの災禍に遭い、平安時代(794～1181)に白河法皇により再建、南北朝時代から室町時代(14～16世紀)にかけては、備後守護山名氏などの保護を受けた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書三吉鼓家文書 正平六年正月廿五日後村上天皇輪旨 1通1巻 親応二年二月十五日足利尊氏下文外 20通1巻 附 三吉鼓家系図 1巻 康永二年五月廿一日僧寛弁軍忠状外 10通写1巻	しほんぼくしよみよつづみけもんじよ	2巻	広島市中区千田町三丁目	昭33.8.1	紙本墨書, 軸装		南北朝時代(1332～1392)、備後の豪族であった三吉少納言房寛弁(かくべん)及びその子孫の活動を物語る古文書20余通からなる。この文書中、寛弁に関するものが最も多く、それも正平6年(1351)から2年間に集中している。この時期は親応乱(かんののうじょうらん)の直後であり、在地武士の動きは鎌倉で寛弁も正平6年正月に南朝の後村上夫島より論旨(ろんじ)を受け、親応2年(1351)2月には南朝方となった足利尊氏から下文(くだしふみ)を受けており興味深い。 ※親応乱(かんののうじょうらん)…南北朝時代、足利尊氏と直義の対立を中心とする争乱。1350～1352年を中心とする時期に起こった。		関連施設: 広島県立文書館 (082-245-8444)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書因島村上家文書	しほんぼくしよいんのしまむらかみけもんじよ	3巻	尾道市因島中庄町寺宇追 (水軍城資料館寄託)	昭37.3.29	紙本墨書, 卷子装	第一巻長さ222.7cm, 幅40.6cm, 第二巻長さ746cm, 幅40.6cm, 第三巻長さ450cm, 幅40.6cm	因島を中心とする中世荘園関係文書、感状及び書簡など50通からなる因島村上家伝来の古文書群。鎌倉時代から戦国時代(12世紀末～16世紀)の毛利・小早川関係のものもあるが、すべてが因島村上家に関するものではない。その間わりについて種々論議されているが、確たる説はない。いずれにしろ、中世における因島及び瀬戸内海地域の状況を知るうえで貴重な史料である。 因島村上家はいわゆる三島村上家のひとつである。室町時代(1333～1572)以来因島や向島などを拠点に活動し、金蓮寺や中庄八幡宮など因島村上家ゆかりの社寺も数多く見られる。後、小早川氏の水軍の一翼を担った。		
県	重要文化財(典籍)	金蓮寺在銘瓦 宝徳三年結縁衆の名を記す	こんれんじよめいいかわら	4巻	尾道市因島中庄町寺宇追 金蓮寺内	昭37.3.29	丸瓦・棟瓦, 銘へら影刻	丸瓦縦32cm, 横14cm, 高さ7.6cm 棟瓦縦30cm, 横29cm	因島村上吉吉が薬師堂を建立した翌年の宝徳2年(1450)に御堂の上葺のこを施す(へらがき)した丸瓦と棟瓦である。尾道の瓦大工が製作したもので、住持快秀(かいしゅう)、大連那宮地大炊助妙光(おおいのすけみよこう)、瓦大工尾道住衛門五郎経次などとともに、浦々の結縁合力者の名が列記されている。宮地妙光は徳名明光、村上吉吉、吉原の家老であったという。また、伯耆大山の僧侶の名前も見られ、瀬戸内と日本海の交流の様子をうかがうことができる。 金蓮寺は、因島のほぼ中央にあり、因島村上家の菩提寺である。宝徳元年(1449)村上吉吉が創建したと言が、開基はそれ以前と思われる。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書出三蔵記集録上巻第二 「文永十二歳萩原之彌於斗山寺書写之の奥書あり」 附 紙本墨書弘明集(断簡) 1巻	しほんぼくしよつさきんぞうきしゆらうくじょうかんだいに	1巻	三原市八幡町宮内	昭38.4.27	紙本墨書	縦25.4cm, 横1190.9cm	文永12年(1275)頃に斗山寺(賀茂郡大和町萩原に跡がある)において行われた一切経書写の一部と思われる。鎌倉時代(1192～14世紀前半)における地方仏教史を研究するうえで貴重な資料である。 出三蔵記集録は、梁の僧祐撰の漢訳大蔵経の目録で、記録目録としては最古の仏教史上貴重なものである。		関連施設: 御調八幡宮宝物収蔵庫 (0848-65-8652)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書不動院文書 附 新山安国寺不動院由来 1冊 新山安国寺不動院雜記 1冊	しほんぼくしよふどういんもんじよ	4巻	広島市東区牛田新町三丁目	昭38.4.27	紙本墨書, 卷子装		安土桃山時代から江戸時代初期(16世紀後半～17世紀)にかけての文書群。4巻24通からなる。安国寺意珠(いけい)関係の書状、豊臣秀吉来印状、毛利輝元や福島正則の書状などが見られる。 不動院の前身は平安時代(794～1191)の創建と伝えられ、南北朝時代(1333～1392)に安芸国の安国寺に設立された。戦国時代、瑞南惠環(すいなんゑい)が京都東福寺住持に出世し、毛利輝元・豊臣秀吉の信任をうけ政治的にも活躍するようになると寺運は興隆し、堂塔の再建に力が入れられた。福島氏の広島入部後は、正則の折衝師有珍(ゆうちん)がこの寺に入り、臨濟宗から真言宗に加えられ、寺号も有珍が不動明王を奉じてきたので不動院と呼ばれるようになった。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	法華経版本	ほけきょうはんぎ	62枚	尾道市東久保町	昭38.11.4		縦65cm, 横90cm	南北朝時代の応永2年(1395)9月から3年正月にかけて、僧行安の勧進により、浄土寺で開版された版本。広く俗人の理解をはかるため、経文に送り仮名や送り点を施しており(巻八の刊記)、付録の版経の古い資料として貴重である。また、この版本は、応永5年(1398)重刊近江八幡神社蔵の倭点法華経と本文割点が大体同じであり、播磨書写山の心空の校定版の収刻版の一つと言われる。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	梵網経版本	ぼんもうきょうはんぎ	6枚	尾道市東久保町	昭38.11.4		縦65cm, 横90cm	室町時代の応永11年(1404)浄土寺で作られた版本。「備後国尾道浦浄土寺開版応永十一年甲申」の刊記があり、地方における印刷文化発達の事例として貴重である。梵網経は5世紀後半に中国で成立したと推定されている経典。日本仏教でも尊重され、多くの注釈が作られた。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	浄土寺文書	じょうどじもんじょ	104通	尾道市東久保町	昭41.4.28	紙本墨書		鎌倉時代末期から室町時代(14～16世紀)にかけての文書類である。浄土寺が、天皇家をはじめ足利将軍家・管領・守護・守護代などと密接な関係を保ちながらその信仰を集めるとともに、寺領荘園の維持に努めてきたその時代推移を語る資料類である。これらを大別すると1.信仰関係、2.皇室・足利氏以下諸豪族から荘園までを網羅した文書、3.寺領年貢書付となり、それらは相互にからみあっている。寺内にあった利生塔の料所種田村(双三郎君田村)の首領が、武家代官に対する年貢拒否を申し合わせた連署起請文のような、庶民の動きを示す文書も含まれている。		関連施設:浄土寺宝物館 (0848-37-2361)
県	重要文化財(典籍)	知新集	ちしんしゅう	25巻25冊	東広島市鏡山一丁目	昭41.4.28	和装本袋じ、楮紙	縦26.4cm, 横20.0cm	「知新集」は、江戸時代における広島町奉行管内(町組と新開組、すなわち旧広島市域)の地誌としてほとんど唯一、しかもきわめて詳細な文献で、広島藩地誌「芸藩通志」の編集の下調査書の一つである。町奉行菅原重胤、町役人の山県重胤、安田屋ら史料を集め、更に浄土寺文人の飯田利矩(篤老)(とくろう)が主任として加わって文政2年(1819)から文政5年(1822)までの間に整理編集されたものである。第一巻には国名・群名・風俗など総本を記し、第二巻から第八巻までは広島五組及び新開について町村別に詳説している。第九巻から第二十四巻は寺社別の位置、沿革、第二十五巻は広島城のことを記している。「新修広島市史」の第六巻「資料編その一」に全巻収録されている。		
県	重要文化財(典籍)	西備各区	せいびめいく	123冊	福山市駅家町向永谷	昭41.4.28			向永谷村(福山市)の庄屋・馬屋原重帝(1762～1836)が著した備後全域の地誌。草稿本90巻34冊(完備)、清書本89巻89冊(初巻欠、第27巻後補)からなる。草稿本は文化元年(1804)成立、その後も改定増補が続けられ、清書本には「文化五年夏四日馬屋原重帝誌」の跋文(ばつぶん)がある。郡別に各村の地誌的情報を詳細に記し、後の「福山志料」などのものとなった。他の伝写本と異なり著者の自筆であり、完全な姿で子孫に継承されていること、備後全域のほとんど唯一の詳細な地誌として史料的価値のあることなど、県地域に密着した著作として貴重である。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金字大般若経	こんしきんでいだいはんにきょう	1巻	三原市八幡町宮内	昭42.5.8	紺紙金泥経、卷子装	縦24cm, 横510cm	平安時代(794～1191)の装飾経。大般若波羅蜜多経(だいほんにのいはらみたくょう)600巻内の第591にある「第十五静慮波羅蜜多分之二」である。紺紙に金泥(きんでい)をもって一行16字から18字なり、経巻中の脱字は未で加筆されている。見返しには金泥で三尊仏が描かれているが、奥書はない。江戸時代後期(18世紀後半～19世紀前半)の三原の学者・青木充延が著した「備後八幡宮記」には、「文化八辛未正月七日青木充延奉納」とあり、文化8年(1811)青木充延が神宮寺を経て御調八幡宮へ納められたことが分かる。		関連施設:御調八幡宮宝物収蔵庫 (0848-65-8652)
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経附中箱 60箱	しほんぼくしゅだいはんにきょう	600巻	東広島市豊栄町乃美宮迫	昭42.5.8	紙本墨書、折本		この大般若経の主体をなすものは、平安時代の建久元年(1190)増延増が、商人からかなりまとまった本経典の一部を入手し、欠巻を、増延増自ら補写して完本としたものである。したがって、それは平安時代中期(10～11世紀)ごろの書写と認められるもの、保安4年(1123)書写の奥書を有するものなどがあるが、「永久五年(1117)細工所目代主殿首山永継」が寄進した旨の奥書を有するものが多い。また、鎌倉時代(1192～1332)の補写や版本も交っている。嘉慶2年(1387)政信が郷内に勧進して小冊60巻を寄進し、文明8年(1477)則光の幸福寺において経巻を修復した。江戸時代に散逸したが、延享5年(1746)乃美村庄屋児玉政勝以下の寄進をもって凡そ100巻余に及ぶ欠巻を補い、前欠、後欠等の補写を行って完備させた。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経附 11巻	しほんぼくしゅだいはんにきょう	570巻	三原市久井町江木宮の本	昭42.5.8	紙本墨書、折本		室町時代の応永13～17年(1406～1410)の間に書写されたもので、各巻奥書に執筆者名と、応永17年11月22日僧清篤が大師主兵衛三郎宗義並びに女、また一部は村上義興を施主として伊予国大浜八幡宮(愛媛県今治市大浜)に奉納した旨が記されている。執筆者は清篤が最も多く(263冊書写)、その他29人の人名がみられる。そのうち聖純(28冊書写)は讃岐国豊田郡坂本郷畑田村柏木住の僧であることが知られる。これらの経巻は天正13年(1585)8月小早川隆景が伊予の領主となったことにより、同年9月18日付をもって産業から久井稲生神社に寄進されたものである。版本5巻と寛延年間(1748～1750)同地千光寺と仏通寺において重様書写された6巻を含む。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書田所文書 安芸国領注進状(前欠) 1巻 正応二年正月二十三日 沙弥謙状の奥書のあるもの 1巻	しほんぼくしゅたどころもんじょ	2巻	安芸郡府中町	昭44.4.28	紙本墨書、卷子装		平安時代後期(12世紀)から安芸国衝(こが)の田所職(たどころしき)を世襲した在庁官人・田所氏に伝えられた文書群。国領注進状(ちゅうしんじょう)は各種免田と輪租田を列記した注文である。巻首部に欠くが、奥書に「十二月日大判官代(花押)」とあり鎌倉時代初期から中期(12世紀末～13世紀)にかけてのもので推定され、当時の安芸国領領の権相を知るための貴重な資料である。正応2年(1290)正月23日沙弥謙状(ゆずりじょう)のある一巻は田所氏の財産を書き加えた注文である。国領に所属する船所・惣稅所職以下田所氏が世襲している諸職の身分、散在する数十町歩の私領地数十人に及ぶ所従など田所氏の家族的性情、具体相を知る貴重なものである。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経	しほんぼくしよだいはんにゃきょう	514巻	神石郡神石高原町油木	昭44.4.28	紙本墨書、折本	縦27.5cm、横9.2cm	南北朝時代の応安6年(1373)5月頃から永和元年(1375)10月頃までの約2年をかけて完成し、永徳2年(1382)尾道持光寺に納められた経、勅主(勸進元)は、すべて禪僧都阿闍梨(あじり)頼喜という僧で、願主は頼喜のほか武士、名主、庶民、僧侶などさまざまな階層の者38人を数える。写経場所は尾道浦の各寺院がほとんどだが、豊後(大分県)などの僧侶の名も見え、港町尾道の活況をも見ることができ、この大般若経は、奥書の「尾道持光寺常住地」の文字や、これを納める唐櫃の朱書「永徳二年壬戌六月一日」(備後国尾道浦)により、尾道浦の共有として持光寺に置かれていたが、なんらかの経緯を経て、油木八幡神社に奉納されたものと思われる。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥大乗十法経	こんしきんぎんでいだいじょうじっぽうきょう	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	卷子本	全長1,012cm、幅25.7cm	紺紙十八紙を縫いで作られた経巻で、巻頭表には金泥をもって宝相華(ほうそうけ)唐草文様を題巻を描いて「大乗十法経一巻」の経題を書いている。見返しには、釈迦が宝樹の下で大衆説法をしている図を描いた表紙をつけている。本文は「仏教大乗十法経」から書き始め、金銀泥で全書行の間に金銀一行ずつ交互に書き交す交書で記され、流麗な楷書で書かれた装飾経で、奥書はないが平安時代(794～1191)の作である。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金銀泥無量義経	こんしきんぎんでいむりょうぎきょう	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	卷子本	全長846cm、幅25.6cm	紺紙十七紙を縫いだ経巻で、巻頭に見返し経があったと思われるが、ほとんど欠失してその残部をわずかに残すのみである。巻末には杉製の軸棒をつけ、その両端の金銀(84x3)形(はちがた)金具は完形しており、魚々子(ななこ)宝相華(ほうそうけ)文様を彫り出し、当時の工芸技術を知るうえで資料となる。本文は、金銀泥で全書行間に金銀一行ずつ交互に流麗な楷書で書き写したいわゆる交書で、奥書はないが平安時代(794～1191)の装飾経である。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金泥大田比盧遮那成仏経巻第三	こんしきんでいだいひるしやなじょうぶつきょう かんたさいせん	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	卷子本	全長802cm、幅25.8cm	紺紙十六紙を縫いでおり、紺紙の表には金泥で宝相華(ほうそうけ)文と「大[84x]盧遮那成仏経巻第三」の経題を書き、見返しには山水、家屋、墓池を描き、室内には二人の僧が対面し、外には教人の僧がいる様子が描かれている。杉製の軸の両端には金銀(84x3)形(はちがた)金具をはめ、魚々子(ななこ)宝相華文様を彫っている。本文は「大[84x]盧遮那成仏神変加持経世間成就品第五」から書き始め、銀野の間に金泥で楷書で書き写した装飾経である。奥書はないが平安時代末期(12世紀後半)の作。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金泥大田比盧遮那成仏経巻第五	こんしきんでいだいひるしやなじょうぶつきょう かんたさいせん	1巻	尾道市瀬戸田町御寺	昭46.4.30	卷子本	全長900cm、幅26cm	紺紙十七紙を縫いだ経巻で、紺紙の表には金泥(きんいでい)で宝相華(ほうそうけ)文様を描き、題巻に「大[84x]盧遮那成仏経巻第五」の経題を書き、見返しには龍雲山での釈迦説法の図を描いている。軸木は杉製で、両端に金銅形(こんどうけい)金具に魚々子(ななこ)宝相華文様を彫り出したものをつけている。本文は「大[84x]盧遮那成仏神変加持経巻第五、字輪点第十」から書き始め、銀野の間に金泥をもって楷書で記した装飾経で、奥書はないが、鎌倉時代初期(13世紀前半)の作。		
県	重要文化財(典籍)	法華経版本	ほけきょうばんぎ	61枚	三次市吉舎町椋	昭50.9.19	版本、材質桜	縦25cm、横90cm前後、厚さ2.4～3cm、別字面ノ縦22.5cm、横60cm(30行)と70cm(35行)	版木の材質は桜で、室町時代(1333～1572)の製作。収蔵場所は、能引寺と言われる禅宗寺院跡で、南天山城主和智権守の開基による仏通寺末夷梅院の支配であったという。永禄9年(1566)小早川隆景が仏通寺に法華経版本を寄進しているが、現在仏通寺には当該版本はなく、あるいは隆景寄進の版本が門末の能引寺に移されたものとも考えられる。椋村園部志書出現によると、この版本は鎮守の四王殿に納められ、この版本が村を出ると異変があると記しており、文政年間(1818～1829)以前のなり前から同寺に所蔵していたと思われる。	関連施設:吉舎歴史民俗資料館(0824-43-4400)	
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経	しほんぼくしよだいはんにゃきょう	393帖	世羅郡世羅町田打	昭50.9.19	紙本墨書、折本	縦27.6cm、横11.5cm	南北朝時代の永和3～5年(1377～1379)に備後国三原金剛院開山源恵が願主となり、同寺のために、三原、沼田荘付近の寺院で多数の僧が協力して書き写したものであることが奥書によって知られる。書写の場所として三原大智坊、墓沼寺(ひきぬでら)、楽音寺、香根島長壽寺等、当時の真言宗寺院の分布状況が知られる。その後、文明2年(1470)に伊予国越智郡朝倉郷(愛媛県越智郡朝倉村)の神社に奉納されているが、これは小早川氏の所領関係によると考えられる。更に後には再び海を渡り豊田郡舟木村(本郷町)の永福寺の所有になったようで、経典の裏に永正末期(1520年)頃から永禄年間(1558～1570)にかけての永福寺等の記事がある。更に三転して永寿寺に入ったのは江戸時代に入ってからである。		
県	重要文化財(典籍)	清神社棟札 附 在銘遣子窓断片 1枚	すがじんしゃむなるだ	16枚	安芸高田市吉田町吉田(安芸高田市歴史民俗博物館寄託)	昭50.9.19		長さ81.8～163.4cm、横0.4～23.7cm 遣子の縦53cm、横80.8cm	清神社社殿の遺書、修理、屋根葺替の際のもので、南北朝時代の正中2年(1325)から江戸時代の元禄7年(1694)までの16枚からなる。毛利時代までのものは花園本家の呼称及び毛利氏歴代の当主の名が見られ、近世には村の鎮守へと変化する経過がたどれる。遣子(れんじ)窓断片の落書きは、元龜3年(1572)に京の神道家・吉田兼右が参詣したこと、天正4年(1576)に吉田兼右が公卿の九条経通から通氏邸に遷したことを記す資料である。清神社は、中世には京都祇園社の荘園吉田荘の鎮守で、のち毛利氏の氏神となった。		
県	重要文化財(典籍)	福成寺文書 附 福成寺縁起文 1巻	ふくじょうじもんじょ	9通	東広島市西条町下三永	昭53.10.4	軸装		福成寺に伝わる南北朝時代(1333～1392)から安土桃山時代(1573～1602)にかけての9通の文書群。西条盆地の歴史を知るうえで貴重な資料である。後醍醐天皇崩御(りんじ)と後村上天皇崩御は福成寺が建武政権の庇護を得、南朝勢力の拠点であったことを示す。毛利弘元書状は山口の氷上山興隆寺(大内氏の氏寺)別当宛で、室町戦国時代に東西条(西条盆地と黒瀬川下流域)が大内氏直轄領でこの寺がその精神的拠点であった時期のもの。天正12年(1584)6月付の毛利輝元書状と同奉行入道兼兼頼は伊予の河野通直が土佐の長宗我部氏の攻撃を受け、毛利氏の救援を求めて安芸に渡来し、この寺で宗元を見出したことを示す資料である。福成寺は西条盆地東側の海拔500m余の山上にある真言宗の古刹で、寛仁年中(1017～21)に現在地に寺地を移したと言われる。南北朝時代から室町時代(14～16世紀)にかけて大内氏と関係を深め、山口興隆寺末寺になっている。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	洞雲寺文書	どううんじもんじょ	42通	廿日市市佐方	昭63.2.18			戦国時代初期の明応2年(1493)から桃山時代の文禄元年(1592)までの100年間にわたる。殿島藤原神主家歴代、周防大内氏、陶晴賢、毛利氏当主乃至松尾藩主等から受けた尊号・保護を示す洞雲寺伝来の文書42通。範囲では尾道浄土寺や殿島大願寺を別として、数種の建立による寺院の中世文書としては稀有な文書に属する。保存も良好であり、学術資料、古文書として貴重である。洞雲寺は戦国時代初期の長享元年(1487)殿島社神主藤原教親が金岡用兼を開山として建立した名刹である。戦国時代には藤原神主家をはじめ周辺の支配者がめまぐるしく交代したが、洞雲寺は寺勢を維持している。		
県	重要文化財(典籍)	洞雲寺本正法眼蔵	どううんじほんしやうほうげんぞう	20冊(60巻)	廿日市市佐方	昭63.2.18	袋綴	縦25.0cm、横18.5cm、厚さ1.5cm	永正7年(1510)阿波国勝浦(徳島県勝浦郡勝浦町)の桂林寺で、当時桂林寺住持で洞雲寺開山の金岡用兼や桂林寺昌桂首座を中心に、数人の筆者によって写された写本である。金岡用兼の自筆を含んでいる。正法眼蔵は曹洞宗(そうとうしゅう)開祖・道元の説法・示衆を集大成したもので、大きく分けて75巻・60巻・12巻・28巻の4種が存在する。洞雲寺本正法眼蔵は80巻に属する。書写時期が奥書によって明らかとなっており、大部分を占め、かつ平板な交じりで書かれているため、道元の撰述当初の本文に近いと思われるものである。戦国時代前期(16世紀前半)書写の良質の正法眼蔵写本として広く世に知られており、成立事情・由来の明らか極めて貴重な典籍といえる。		
県	重要文化財(典籍)	五輪塔形曳覆曼荼羅版木	ごりんとうがたひきおおいまんだらほんぎ	1面	府中市本山町	平7.1.23		縦124.8cm、幅48.5cm、厚さ4.5～5.0cm	曳覆曼荼羅は、中世以来の葬送儀礼に用いられたもので、箱に納められた遺体を覆う白布に成仏を祈願するため曼荼羅等を描いたもので、これを印刷するための版木が等に伝わっている。比較的板式の版材の一面に高さ90.5cmの五輪塔形を陽刻し、梵字・漢文を配している。裏面は一切無地である。この版木は図像等から、鎌倉時代(1185～1332)の作と考えられるので、全国的にも室町時代(1333～1572)以前の版木は5例しか確認されておらず、全国でも最古級のものと推測される。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大願寺尊海文書(大願寺領所務帳)	しほんぼくしやうたいがんしよんかいもんじょ(たいがんしりょうしよむちょう)	1巻	廿日市市上平良字堂埴内	平9.3.18		幅30.8cm、長さ505.1cm	戦国時代(16世紀)の天文16年(1547)11月、大願寺尊海作成の殿島島内所在の屋敷分を除く大願寺領の年貢徴収台帳。雑目録には尊海の花押がある。島内や廿日市などの大願寺領の全容が詳細に記録され、寺領形成の過程や負担の実態などを知ることができる。大願寺は殿島神社の寺院のひとつで、社殿の造営や修理などに係わることで大きな勢力を築きあげていた。尊海は戦国時代の寺領のひとりとして、天文6～8年(1537～1539)には高麗版大蔵経を求めて朝鮮半島に渡っており、「尊海上人渡海日記」を残した。		
県	重要文化財(典籍)	紙本墨書大般若経 附 経櫃 3櫃 中箱 60箱	しほんぼくしやうたいがんにゃきやう	583帖	東広島市志和町志和堀	平9.5.19			南北朝時代の正平20年(1365)10月天野遠藤が願主となって志芳(しわ)庄八幡宮(現在の大宮神社)に寄進した大般若経である。天野遠藤は志和地頭天野氏一族と推定される。卷子装であったが、後に折本装に改装されている。600巻のうち17巻が失われているだけで、471帖はほぼ正しい形を失っており、広島県の中世史を語る貴重な資料となっている。また、経櫃3合・中箱60合が伝えられている。		
県	重要文化財(典籍)	紺紙金泥細字法華経 附 木製漆塗六角経櫃 1基	こんしきんでいさいほけきやう	1巻	三原市高坂町許山	平9.5.19	卷子本	本紙/縦5.4～5.5cm、全長886.8cm 木製漆塗六角経櫃/全高12.3cm、屋蓋幅7.5cm、基台幅7.2cm	鎌倉時代の弘安6年(1283)の作。極めて小さい卷子(かんす)本で、紺紙上に金泥を用いた細字で法華経8巻28品分を一巻に1より巻に書写している。小品であることから、祈願経か奉納経であったことがうかがえる。附属する経櫃(きやうどう)は六角形で、木製黒漆塗。一部稜線に朱漆を入れ、屋根頂部に漆箔おしの宝珠が載っている。		
県	重要文化財(典籍)	佛通寺文書 紙本墨書47通、板刻2枚、書冊7冊	ぶつうじもんじょ	44点	三原市高坂町許山	平9.9.25			佛通寺に伝来した室町時代から江戸時代初期(14～17世紀前半)にかけての古文書44点。佛通寺の規式、小早川氏や毛利氏らの禁制、あるいは15世紀中頃の沼田小早川氏による佛通寺経営の実態など多様な内容を含み、学術的にも貴重な文書群である。佛通寺は応永4年(1397)小早川春平が愚中周及を招いて創建した禅宗寺院である。		
県	重要文化財(典籍)	佛通寺正法院文書	ぶつうじしやうほういもんじょ	10通	三原市高坂町許山	平9.9.25		(cm) 23.1×52.3 29.9×39.6 41.9×40.7 30.9×41.0 29.0×45.0 17.0×45.5 32.0×69.9 31.7×45.0 28.3×42.2 16.8×41.7	佛通寺の塔頭のひとつ・正法院に伝わる。室町時代の永享4年(1432)以後安土桃山時代(1573～1602)までの中世文書群。正法院領の形成が小早川氏の家臣であった真田氏によって行われたこと、小早川氏の庇護を受けていたことが記録されている。点数は少ないが、佛通寺文書とあわせて、佛通寺の歴史を全体として捉え直すうえで重要な資料である。		
県	重要文化財(典籍)	管波信道一代記 附 箱2合	すがなみのぶみちいちだいき	75冊	福山市神辺町川北	平14.2.14	形状/半紙二ツ折冊子装(箱) 覆箱 桐材	縦27.3cm 横19.7cm (箱)蓋 縦33.3cm 横25.4cm 深さ40.4cm 身 縦31.5cm 横23.5cm 深さ40.7cm	本書は、備後国安郡都川北村(現深安郡神辺町大字川北)の尾道屋菅波家11代当主であった菅波信道(寛政4年～慶応4年(1792～1868))が口述筆記して作成した自叙伝である。本書には、彩色の挿図が多用され、災害や事件に関する挿図はもとより、酒造や酒販売の実況を伝える挿図など、当時の日常生活・世相・風俗を余すところなく伝えている。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(典籍)	東禅寺文書	とうぜんじもんじょ	18通	三原市本郷町	平21.4.23	紙本墨書		東禅寺(元、基沼寺(ひきぬでら))に伝来した鎌倉時代末期から室町時代にかけての文書(もんじょ)群(11通)と、ある時期に同寺に流入した井海名(へんかいみょう)に関する文書群(7通)から成る。前者は、沼田庄(ぬたしょう)地域の政治や宗教の在り方を明らかにする上で貴重である。後者は、記載地名が今日でも現地比定でき、井海名の広がりや経費状況などを明らかにすることができる基本史料である。		
県	重要文化財(考古資料)	廣和光寺塔址出土遺物 風鏝破片3、九輪破片3、中心礎石1	はいわこうじうあとしゅうつどうひつ	7点	福山市津之郷町津之郷	昭29.9.29		九輪は復元推定直径32~42cm 風鏝は復元推定長約20cm	和光寺は奈良時代後期~平安時代初期(8世紀後半~9世紀前半)の古代寺院である。その後荒廃し、永禄5年(1562)、時の津之郷領主田辺長が寺域の一角に田辺寺として再興し現在に至るといわれる。塔の中心礎石は、縦115cm、横87cmのやや長方形の自然石に直径39cm、深さ22cmの穴があけられ、両側に幅24cm、深さ3cmの溝が形られているが、元の場所から移動している。九輪の破片は、長さ43cm、38cm、32cmのものが3個である。本末、塔の頂部に建てられていたものである。風鏝(ふうかく)は、堂塔の軒先につるされていたものである。復元すると約20cmほどの大きさと推測され完全な姿が想像できる貴重な資料である。		関連施設:福山城博物館 (084-922-2117)
県	重要文化財(考古資料)	平形鋼剣	ひらがたどうけん	1口	福山市草戸町	昭32.9.30	鋼剣	長さ45cm、幅9cm、茎巾5cm	昭和6~7年(1931~32)頃、福山市熊野町の熊ヶ峰山麓の熊野神社裏山から折損した一口とともに発見されたもので、折れた方は現在散逸している。鋼剣は、突起部から刃先にはほどよくゆるみをもって、茎部は扁平な円筒状で、その両側には樋が通っている。沼隈郡沼隈町中山南の日枝神社の平形鋼剣(重要文化財)と同型の可能性がある。平形鋼剣は、弥生時代後期(2世紀~3世紀)、まづりに使用したと考えられている青銅製の剣で、伊予を中心とする瀬戸内海中部地域一帯に分布している。		
県	重要文化財(考古資料)	平形鋼剣	ひらがたどうけん	1口	福山市沼隈町中山南	昭32.9.30		長さ45cm 茎幅5cm	この鋼剣は、日枝神社の神宝として伝来し、同社宮司新良真貴家に保管されてきた。同家の史料によると、この鋼剣の東山(長さ100cm)の一角にこの鋼剣が埋め込まれている。この鋼剣は、福山市熊野町の熊野神社裏山から出土した平形鋼剣と同型の可能性がある。平形鋼剣は、弥生時代後期(2世紀~3世紀頃)、まづりに使用されたと考えられており、巨石の周りに埋納されたものと推定される。		
県	重要文化財(考古資料)	荒神古墳副葬品 金銅装太刀1口(柄頭、つば、はばき、さや、責の金、刀身) 刀身3口 耳輪4個 勾玉5個 切り子玉7個 須恵器蓋杯2組 須恵器杯1個	こうじんこふんぶくそうひん	27点	福山市西町二丁目県立歴史博物館	昭36.11.1			荒神古墳は、高田郡甲田町下小原にある思地古墳群に属していた。墳形は円墳で、内部主体は横穴式石室であったと思われるが、明治43年(1910)に発掘され、現在は全壊して規模は不明である。遺物の出土状況は明らかでないが、その一部が指定されたもので、いずれも古墳時代後期(6~7世紀)の特色をもった資料である。これらのうち金銅装太刀は、圭頭(けいとう)の柄頭(つかがしら)であり県内から出土する例は稀である。		関連施設:広島県歴史博物館 (084-931-2513)
県	重要文化財(考古資料)	銅文	どうか	1口	三原市八幡町宮内	昭38.4.27	青銅製	長さ37cm 茎の長さ1.1cm 区部の幅9.9cm 紐かけの孔一辺1~1.2cm	銅文は本来柄(え)に対し、直角につけて用いる武器である。本品は中細形で他にあまり例がなく、北部九州で見られる鉄文に近い形態をしている。この銅文は両刃で、身に斜行する内きみの区(まち)と短い茎(なかご)からなり、鏢(しのぎ)は明瞭でなく種(い)はない。鏢(むね)は丸味をおおむね欠けており実用性に乏しく、備後として用いられ、弥生時代中期(第1世紀~2世紀頃)のものと推定される。この銅文は「天逆鏢」と言われて御調八幡宮宝物として伝えられ、青木充延の「備後八幡雑記」(文化13年(1816)著)では、同社北方の鏢ヶ峰から出土したと記述されている。		関連施設:御調八幡宮宝物収蔵庫 (0848-65-8652)
県	重要文化財(考古資料)	伝瀬崎山古墳出土三角縁五神四獣鏡及び短冊型鉄斧 1面	でんせきやまこふんしゅうつどきんかくぶらこしんしゅうきょうおよびたんざくがたてつ	1面	福山市新市町相方	昭56.11.6 昭57.2.23(追加指定、名称変更)	三角縁五神四獣鏡 / 白銅製短冊形鉄斧		瀬崎山古墳は戸田川の右岸、新市の平地が見渡される丘陵上にあり、現在は個人の墓所となっている。古墳は、前方後円墳の可能性もあるが、全体的に削平が著しく、墳形は不明瞭である。この古墳から出土した伝えられる鏡は三角縁五神四獣鏡で、背面中央に円座鏡(えんざきょう)をめぐって、内区に神獣の像を彫刻する。鏡帯には六個の方格内に「天・王・日・月・天・王」の文字を右まわり外向に配し、鏡文(かみ)よりつづいている。内区と鏡帯との間は段がつく鏡面文(きよしもん)をめぐらせている。外区との境にも段がつく。鏡面文がめぐらされている。更に内側から鏡面文、波文(はもん)、鏡面文の順に文様帯がめぐり、外縁が三角縁となっている。鏡出はきわめて良好で鏡(さび)や腐蝕もほとんど見られない。きわめて完好な状態である。また、鉄斧は短冊形である。これら出土品の時期は古墳時代前期(4世紀)であり、大和政権から配布された鏡と考えられている。		関連施設①:広島県歴史博物館(084-931-2513) 関連施設②:広島県歴史民俗資料館(0824-66-2881)
県	重要文化財(考古資料)	追山第一号古墳出土品	えこやまだいいちこうこふんしゅうつどひん	274点	福山市神辺町川北 町立歴史民俗資料館	昭62.3.30			追山第一号古墳は、神辺平野を領む丘陵南斜面に位置し、11基で構成される追山古墳群中、最大規模の埋葬的な古墳である。古墳は、径21.5mの円墳で、横穴式石室である。この石室から武器類、馬具類、装身具類、土器類の計274点の多量の遺物が出た。これらの中で、県内では3例目の風車環頭大刀(たんばうかんとうたち)は、柄と鞘に金銅製の金具、鞘頭に金銅製の環頭が装着され、環頭の中央には風車、環体には龍を表現している。その他、熊象眼鐔付大刀(きんぞうがんづつきたち)など、美術工芸品として、また、同一古墳からの一括出土品として当時の生活、技術などを知らずには置けない。また、環頭大刀は、大和政権から地方支配を推展する過程で、政治的・軍事的に示すものとみられ、大和政権と備後南部における古墳時代後期(6世紀~7世紀)の政治的動向を示す貴重な資料である。		
県	重要文化財(考古資料)	貝ヶ原遺跡出土の特殊器台形土器	かいがはらいせきしゅうつどつどのしゅうきだいがたどき	1点	尾道市御調町市御調町教育委員会	昭62.12.21		現高68.5cm、脚部最大径41.1cm、胴部最大径23cm	この特殊器台形土器は、昭和43年(1968)御調町貝ヶ原に位置する御調川沿いの左岸丘陵の土取り工事中に出土したといわれる。特殊器台形土器は、特殊器台形土器とともに、弥生時代後期の中頃(2世紀頃)以降に、吉備(岡山県・広島県東部)を中心とした墳墓から出土する。集落遺跡から出土する日常使用される器台や壺に比べて、極めて大型化すること、鏡面文(きよしもん)・斜格子文(しやうしもん)・連続S字状の文様などの特徴ある文様で飾られること、赤色顔料が表面全体に塗られることなどの点で大きく相違し、特殊の用途に用いられると考えられている。本例は特殊器台形土器の中でも最大サイズのものとされており、吉備の中核(岡山県南部)においてもこのような完存に近いものはなく、極めて貴重な資料の一つといえる。		
県	重要文化財(考古資料)	白鳥古墳出土品 三角縁鏡文帯三神三獣鏡 1面 三神三獣鏡 1面 碧玉製勾玉 1点 素環頭大刀 1口	しらとりこふんしゅうつどひん		東広島市高屋町郷	昭62.12.21		三角縁鏡文帯三神三獣鏡 / 直径21.8cm 三神三獣鏡 / 直径16.4cm 碧玉製勾玉 / 長さ3.1cm 素環頭大刀 / 現存長69.8cm	白鳥古墳は、東広島市高屋町郷の白鳥山(標高453m)山頂にあたとされているが、明治43年(1910)白鳥神社敷造営時に破壊されたものらしく、古墳の規模や形状は明らかでない。この時、三角縁鏡文帯三神三獣鏡(面(さか)かぶらしゅうもんたいさんしんしんしゅうきょう)、三神三獣鏡1面、碧玉製勾玉(まかたま)1点、素環頭大刀(そかんとうたち)1口などが出土したと伝えられている。これらの遺物の年代は、鏡の鏡文や素環頭大刀の存在などから西暦400年前後とする時期と考えられる。国産の三角縁鏡文帯三神三獣鏡の鏡文の時期の古墳の一括遺物としては、県内では他に例が少なく貴重である。		

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(考古資料)	一ツ町古墳出土亀形須恵器	ひとつまちこふんしゅつづかめがたすえぎ	1点	安芸高田市向原町戸島	平2.12.25	亀に見立てた平瓶	長さ18.7cm、幅17.5cm、高さ12.6cm	亀に見立てた平瓶で、胴上半部に甲羅、底部に三本の短脚をつけた、いわゆる装飾須恵器の一例である。造形的には鳥形須恵器と同一であるが、亀形の平瓶は他に例がない。向原町の古墳からは、環状埴輪や鳥形須恵器などの装飾須恵器が多く出土している。鳥形須恵器は古墳時代終末期(7世紀)のこの地方を特色づける代表的な資料として貴重である。		
県	重要文化財(考古資料)	石籠山古墳群出土遺物 【第1号古墳】 斜縁二神二獣鏡 1面 硬玉製勾玉 3箇 琥珀製勾玉 3箇 碧玉製管玉 42箇 鉄やりがんば 2本 鉄刀子 2口 鉄鏃 41本 鉄短剣 1口 銅鏃 5本 【第2号古墳】 内行花文鏡破片 2面 鉄刀子 1口 鉄やりがんば 1本 土師器片 2箇	いしがやまこふんしゅつづかいぶつ	106点	福山市西町二丁目(広島県立歴史民俗資料館保管) 三次市小田幸町(広島県立歴史民俗資料館保管) 広島市西区観音新町四丁目(広島県立埋蔵文化財センター保管)	平5.2.25	第1号古墳/斜縁二神二獣鏡1面、硬玉製勾玉3箇、琥珀製勾玉3箇、碧玉製管玉42箇、鉄[0745]2本、鉄刀子2口、鉄鏃41本、鉄短剣1口、銅鏃5本 第2号古墳/内行花文鏡破片2面、鉄刀子1口、鉄[0746]1本、土師器片2箇		中国の後漢や三国時代の青銅鏡2面を初めとする石籠山第1号・第2号古墳出土遺物は、各埋葬主体ごとに遺物の組成がやや相違するが、いずれも古式の形相を示す。特に斜縁(しゃえん)二神二獣鏡や定角式鉄鏡(じょうかくしきてつぞく)、硬玉製勾玉(こうぎょくせいまいがた)類は前期古墳の特徴的な遺物として貴重である。広島県内における古墳時代前期(4世紀)の一括遺物として各形相を代表する遺物といえる。		
県	重要文化財(考古資料)	王生西谷遺跡出土遺物 内行花文鏡 1面 鉄鏃 1本 碧玉製管玉 10箇 弥生式土器 6箇	みぶにしたにいせきしゅつづかいぶつ		三次市小田幸町(広島県立歴史民俗資料館保管) 広島市西区観音新町四丁目(広島県立埋蔵文化財センター保管)	平6.2.28	内行花文鏡1面、鉄鏃1本、碧玉製管玉10箇、弥生式土器6箇		これらの遺物は王生西谷遺跡(千代田町所在)の墳墓群から出土した中国の後漢鏡、及び鉄鏃・管玉・弥生土器である。鏡は墳墓群のなかで中心となる埋葬施設から出土したもので、完形の内行花文鏡(ないこうかもんきょう)には「長直子孫(ちようぢしん)の銘がある。完形の後漢鏡を副葬する弥生時代(前3世紀～3世紀)の墓は中国地方では稀で、被葬者はこの地域の首長クラスと考えられる。この時期の首長一族の存在を示す資料として貴重である。		
県	重要文化財(考古資料)	山崎遺跡出土呪術関連遺物 円形木札(墨書呪符) 2枚 和鏡(蓬莱鏡) 1面 銭貨 27枚 土師器土器 20箇 土師質土器破片 一括	やまさきいせきしゅつづかめがたしゅつづかめがた		広島市西区観音新町四丁目(広島県立埋蔵文化財センター保管)	平8.9.30	円形木札/鏡の蓋となる和鏡/銅鏡 銭貨/中世の輸入銭、開元通宝、宣徳通宝など	円形木札/直径108mm、厚さ1.5mm 和鏡/直径108mm、縁高8.9mm 土師器土器/口径12.8～15.8cm、底径5.3～7.6cm、器高2.6～3.5cm	これらの遺物は、山崎遺跡(三次市大田幸町所在)の土坑(どこう)から出土したものである。円形木札の呪符からみて調伏や悪霊退散のまじないにかかわる可能性が高く、何らかの呪術行為を行った後に一括埋納されたものと考えられる。中世の呪術関連遺物である。 埋納された時期は、円形木札に記載された干支の「丁酉(ひのと?)」、和鏡、銭貨、土師質土器からみて天文6年(1537)(室町時代後半)が考えられる。 これらの遺物は、室町時代(1333～1572)の民間信仰の様相や精神文化の一端を解明する上で重要な資料である。		
県	重要文化財(考古資料)	田上第二号古墳出土遺物 脚付装飾壺(須恵器) 1点 杯蓋(須恵器) 7点 杯身(須恵器) 7点 高杯(須恵器) 4点 椀(須恵器) 1点 平瓶(須恵器) 1点 埴輪(須恵器) 2点 長頸壺(須恵器) 1点 直口壺(須恵器) 1点 小壺(須恵器) 1点 須恵器破片 一括 鏃(鉄製品) 7点 鏃片(鉄製品) 7点 刀子(鉄製品) 1点 管玉(玉類) 3点 小玉(玉類) 5点	たがみだいにこうふんしゅつづかいぶつ		福山市西町二丁目(広島県立歴史民俗資料館保管)	平10.9.21		脚付装飾壺/器高43.3cm、口径12.4～13.1cm	これらの遺物は福山市戸田町に所在する田上第2号古墳の横穴式石室内から出土した。中でも特徴的な遺物として、脚付装飾壺(きやくつきそうじょくつぼ)は高さ43.3cmと、県内では珍しい大きさの装飾須恵器(すえぎ)である。肩部に人物や動物の小さい像や小壺が付けられている。全貌は不明であるが、向かい合った男女の性差を表現した全体的にも類例の少ない人物像が含まれており、子孫繁栄か死者再生の願いを表現したものと考えられている。 装飾須恵器の多くは6世紀中葉から7世紀末までにみられるが、この壺は共存遺物から6世紀後半と考えられる。		
県	重要文化財(考古資料)	隅内遺跡出土遺物 縄文土器(完形復元) 1点 骨製耳飾(耳栓) 1対 縄文土器片465点 つづつ状耳飾片1点 石鏃1点 有柄石七(石匙) 1点 桃形石器1点 剥片1点 石鏃33点 磨り石・敲石か9点 石器破片 82点	ようないせきしゅつづかいぶつ		庄原市中本町一丁目	平15.4.21			隅内遺跡(庄原市濁川町隅内)の、縄文時代中期(5000年前)の祭祀(さいし)あるいは埋葬の場所と推定される16基の土壇(どこう)とその周辺の包含層から出土した遺物。 遺物の時代は、縄文時代中期を中心に、早期から後期までである。 完形復元された縄文土器は、口縁部から胴部下半に属(ず)が付着するが、土壇の中をさらに横に掘りこんだ場所から出土したことから、素溝(しやうづつ)用土器を埋葬に再利用したものと推定される。 このほか、日本海沿岸との交流を物語るサメの骨製耳飾(耳栓)なども出土し、中国山地の縄文時代中期研究の基礎資料となっている。		関連施設: 庄原市歴史民俗資料館(0824-72-1159)
県	重要文化財(考古資料)	丸山経塚出土品 経筒(蓋付) 1口 厨子入り木造十一面観音立像 1躯	まるこやまきょうづつかしゅつづかめがた	2点	世羅郡世羅町	平22.4.19			本出土品は、経筒と厨子に入った木造十一面観音立像からなる。経筒は16世紀前半を中心にみられる。定型化した六丈六部(むいぶつ)の一回国(いこく)か二回国(にこく)の経筒の形を踏襲している。一回国経筒に仏像を伴う例は、西日本では少ない。県内では、紀年銘(きねんめい)があって完全な形に残り、出土状況まで確認できる唯一の一回国経筒である。 本出土品は、16世紀前半の世羅郡のみでなく、戦国時代の安芸や備後地域の社会を解明するための貴重な考古資料である。		
県	重要文化財(考古資料)	吉川氏城館跡出土品(小倉山城跡、吉川元春館跡、万徳院跡) 土器・土製品65点 木竹製品233点 墨書木製品32点 漆器19点 石製品43点 墨書石製品3点 金属製品157点 繊維製品1点	きっかわしじょうかんとしゅつづかめがた(おぐらやまじょうかんと、きっかわらとはるやかたあと、まんとくいんあら)	1,141点	山県郡北広島町	平25.4.30			15世紀から16世紀における、安芸の国人領主(こくじんりょうしゅ)吉川氏の発展段階を示す城跡、館跡、寺跡などで構成される吉川氏城館跡のうち、平成3～17年(1991～2005)に県教委と大朝町、豊平町及び千代田町教育委員会(現 北広島町教育委員会)により、史跡整備事業に伴う発掘調査が行われた。小倉山城跡、吉川元春館跡、万徳院跡からの出土品である。 城跡・館跡・寺跡という各遺跡の性格を特色付ける。種類・質・量共に他を圧倒する豊富な内容を持つとともに、各遺跡の位置する安芸国北部の地域性を明瞭に示し、年代についても史料による検証結果と矛盾しない。安芸国北部の戦国期から織豊期城館跡の基準となる、中国地方を代表する一括遺物である。		関連施設: 戦国の歴史史館(0826-83-1785)

国/県	種別	名称	よみ	員数	所在地	指定等年月日	構造形式	法量	解説	写真	備考
県	重要文化財(考古資料)	装束櫛文銅鐸(黒川遺跡出土)	けさだすきもんどうたく(くろかわいせきしやつど)	1口	三次市小田幸町 広島県立歴史民俗資料館	平成29.12.4		総高28.0cm、最大幅(推定)16.4cm、重量890g	昭和36年、広島県世羅郡世羅西町(現、世羅町)大字黒川字下陸地で農道工事にもなって偶然発見された。本体の文様は四区装束櫛文である。また、紐(吊り手)の変化に基づく型式分類では、扁平紐式古段階に分類される。同じ型式の銅鐸は主に岡山県から近畿地方にかけて出土し、兵庫県で銚型が出土していることから、兵庫県地域を中心に製作され近畿地方以西に分布した可能性が高い。その中で、本銅鐸は山陽側における分布の西端である。本銅鐸は、近畿地方の銅鐸象形が西方向へ広がって行く様子を知らる上で重要であるとともに、広島県地域における弥生文化の受容・展開過程、さらには広島県地域の弥生文化の地域的特色を知らる上での極めて重要な資料である。		関連施設: 広島県立歴史民俗資料館(0824-66-2881)
県	重要文化財(歴史資料)	金剛兼禪師被着装束(金剛兼禪師被着装束(冬用) 金剛兼禪師被着装束(夏用) 金剛兼禪師持物木製持鉢 金剛兼禪師持物木製長杖)	きんこうようけんぜんじかんけいひん	4点	廿日市市佐方	昭60.12.2	装束/帽子、麻持鉢、長杖/漆塗		・金剛兼禪師被着装束(けさ)(夏用) 洞雲寺(どううんじ)伝の金剛和尚行状記に「金剛和尚装束一領 大宮司明神師衣所製」とあるので、麻製の五条装束で、古式のものである。漆塗り木製額を付けている。 ・金剛兼禪師被着装束(冬用) 同行状記に「金剛和尚装束一領 嚴島明神所献」とあって、象牙の額着(かんちやく)の裏製(うらぎれ)に「雲潭代、京都江連湛色修補」と墨書の七条装束である。材料は、雲や亀文を織り出している縞子裂(とんすきれ)で仕上げ、額(かん)は象牙である。 ・金剛兼禪師持物木製持鉢(Uはつ) 同行状記に「金剛和尚持鉢一口 香木所製」と見られるもので、禅僧が持鉢に所持し、食料品あるいは布施料を受納する器である。古くは沙波離裂(金属)のものもあり、正倉院に残っている。金剛兼禪師所持のこの器は、木製で赤色の漆を塗って仕上げたものであるが、底が抜けている。 ・金剛兼禪師持物木製長杖 木製の長杖の柄に一面小突起を彫出し、漆塗りに仕上げた。		
県	重要文化財(歴史資料)	金剛般若波羅密經版木	こんごうはんにはらみつぎょうはんぎ	7枚	三原市高坂町許山	平9.5.19	桜材		室町時代の長禄3年(1459)防州(山口県)祥雲寺で開版された版木。僧永賢によって佛通寺に寄進されたと伝えられる。7枚目には刊記と護法尊天神像が彫られている。祥雲寺は佛通寺を本山とする十六派の寺院のひとつで、この版木は中世の地方出版文化を語るうえで重要な資料である。 金剛般若波羅密經は般若經典のひとつである。		
県	重要文化財(歴史資料)	延命地藏菩薩經版木	えんみょうじぞうぼさつぎょうはんぎ	2枚	三原市高坂町許山	平9.5.19	桜材		戦国時代の文明10年(1478)開版の版木。2枚目裏に刊記と如意輪観音像が彫られている。中世出版文化の水準を示す貴重な資料である。 延命地藏菩薩經は、地藏菩薩の誓願・功德を説く經典である。		
県	重要文化財(歴史資料)	広島県深安郡山野村役場文書	ひろしまけんふかやすくんやまのむらやくばもんじよ	8,071点	広島市中区千田町三丁目(広島県立文書館 寄託)	平25.1.24	3,400冊、4,099巻、56箱、105袋、20包、265通、79枚、8点、2箱、35巻、1折、1本	8,071点	山野村(現在の福山市山野町)が近代の自治体として存続した期間に、山野村役場で作成及び收受された行政文書を中心とする文書群(もんじょく)である。役場の各職掌が作成した簿冊、国の法令、県・郡の布達類から成り、その後継に当たる近世の庶民文書(しょうやもんじょ)及び加茂町山野支所の行政文書なども含む。 明治維新及び第二次世界大戦という二つの大きな社会変革期を含む自治体文書がまとまって伝来している例は、全国的に見ても極めて希少である。 また、役場の全ての職掌で作成された行政文書が連続して伝来しているため、役場の行政事務の変遷、村の現状と課題、国や県とのやり取り、村民の生活など、村と村民の具体像についてどの時期をもっとも多面的に明らかにできるとともに、一つの村を対象にそれらの変遷を解明できるという、学術資料として高い価値を有する。 さらに、大正期という早い時期から行われた地元の方々による文書保存活動は、地域住民による資料保存活動の先駆けであり、貴重な例として顕彰することができる。		関連施設: 広島県立文書館(082-245-8444) 写真提供: 広島県立文書館